陸前浜街道地域づくり交流会

報告書

平成18年2月

『新時代の浜街道』連絡推進協議会

目　次

１．　陸前浜街道地域づくり交流会の目的……1

２．　第１回陸前浜街道地域づくり交流会……2

３．　第2回陸前浜街道地域づくり交流会……11

陸前浜街道地域づくり交流会の実施

1. 陸前浜街道地域づくり交流会の目的

陸前浜街道地域内の"新たな交流"を生み出し、地域全体を一体として魅力ある地域とするための取組を進めるために、商工団体等の民間団体を中心に各地域より推薦のあった代表メンバーが集まり、当該地域が今後の方策を考えるに必要な地域の現状認識、課題の抽出･共有化の作業を行う陸前浜街道地域づくり交流会を実施。

陸前浜街道地域づくり交流会構成メンバー

（＊敬称略）

いわき商工会議所　大平　均
いわき青年会議所　四ツ倉　隆裕
いわき地区商工会連絡協議会　碇川　寛
岩沼市商工会　國井　陽介
相双地区商工会連絡協議会　亀岡　昭典
相双４ＪＣ協議会　早川　恒久
相馬商工会議所　新妻　良一
浜通り歴史の道研究会　脇坂　省吾
原町商工会議所　酒井　和広
宮城県商工会連合会　渡邊　豊　　高橋　薫
亘理山元商工会　遊佐　宗之

2. 第１回陸前浜街道地域づくり交流会

日時：平成18年2月1日（水）　13:30～
場所：相馬商工会議所　第三会議室

第１回「陸前浜街道地域づくり交流会」次第

◎開会
◎開催主旨説明
◎委託業者の紹介
◎交流会メンバー紹介
◎地域づくり交流会
　(1) メンバーそれぞれの地元における地域づくりの取組状況、課題等の紹介
　(2) 陸前浜街道地域の現状認識の共有
　(3) 陸前浜街道地域共通の問題点の抽出、今後の課題の整理
◎その他　交流マップへの要望、追加事項収集
◎閉会

■出席者（＊敬称略）
　いわき商工会議所　大平　均
　いわき地区商工会連絡協議会　碇川　寛
　岩沼市商工会　國井　陽介
　相双地区商工会連絡協議会　亀岡　昭典
　相馬商工会議所　新妻　良一
　浜通り歴史の道研究会　脇坂　省吾
　原町商工会議所　酒井　和広
　宮城県商工会連合会　高橋　薫
　亘理山元商工会　遊佐　宗之

■第１回陸前浜街道地域づくり交流会議事録

＊敬称略

地域づくりの取組状況について

司会

本日は皆様のご協力を得て、実のある会にしたいと思いますので宜しくお願いします。

まずは地域毎ということから、またはそれぞれのお立場から、通常のお仕事の内容や地域に関して共有できる内容をお話願います。

大平

本年は３年に渡る福島県観光推進キャンペーンの最後の年で、浜通りの観光推進キャンペーン実施年です。いわき市では昨年、まだ草案ですが、市長を座長に１年かけて観光戦略プランをつくりました。その他、年間一億程度の予算を市から受け、観光物産協会のキャンペーンを行っていますが、実際、地域交流はしていない状況です。北茨木市とのソフトモデル事業もあり、それぞれ地域毎の動きはあるものの、連携となると顔合わせや勉強会程度で終わっています。

いわき市は合併して今年40周年を迎えますが、多少、まとまってきているとは言いながら市内においても地域間の温度差はまだある状況です。現在、交流人口を目標である1,000万人までどうやって増やすかが課題となっています。現状は約700～800万です。現状はそんなところです。

碇川

いわき市は40年前に14市町村が合併して、商工会議所と商工会が並存している地域です。９つある商工会地域は、情報を交換しようと組織づくりに入ったところです。交流人口を増やすためには、それぞれの地域が情報公開することが大切だと思います。私はいわき市立草野心平記念文学館のある小川町に住んでいますが、それぞれの地域で地域おこしを積極的に行っています。

國井

岩沼市においても岩沼市商工会と名取市商工会が広域的に連携をとっています。まちづくりについては講演会等の活動を通して頑張っていきたいという、そんな進捗状況です。具体的にはまだありません。

亀岡

相双地区は12の商工会と、相馬、原町の２つの商工会で成り立っています。その12の商工会が３つのブロックに分かれて、それぞれに交流人口を図るにはどうしたらよいか、また、特産品の開発をするにはどうしたらよいか、の点から広域交流を行っております。現在、南相馬市中心の商工会が地域の特産品のネット販売を計画し実施段階まできています。商業は人口の流出でダメになり、工業は高齢化によってダメになります。地域の活性化には人口の交流が必要というのが現実です。原発の協力を得ながら交流人口の増大に向け、Jヴィレッジ等の施設を利用しながら努力はしていますが、思うように進んでいません。

現在、行政から商工会に観光協会の事務委託を受けている大熊町、鹿島町などございますが、

将来、常磐自動車道の延伸に伴うインターチェンジの設置に対し、いかに交流人口増大を図るか考えていかなくてはならないと思います。

新妻

相馬商工会議所では隣の新地町と連携をとり、広域型の考え方として会頭が福島大学の協力を得て特産品の開発に取組んでいます。現在は魚の加工品で「どんこのつみれ」です。近々、商品化されることになっています。相馬市は魚がとれるため生食の文化ですが、加工品を作ることで若い方々にも食べていただける訳です。

浜通りの一番の欠点は山と海の間が狭く南北に交流がなければ交流ができないということです。幸い相馬は松川港、相馬港の新鮮な魚を利用して観光誘致を行ってきましたが、最近では山形の天童市で行っている「鍋合戦」にエントリーして１月の鍋将軍の最高位をとりました。これからは内にこもっていてはダメだということです。特産品の開発も、外へ向けた活動のひとつです。

また最近JR東北でいわきのあんこう鍋と、相馬のカニをPRしていただき、先日もお座敷列車で関東圏から２回誘客が出来、いま観光事業としてなんとか定着しています。しかし特産品の開発は手間がかかります。大切なのは各地域が連携をとりながら特化していくことではないでしょうか。観光でも特産品でもいいと思います。

脇坂

私は歴史という方面からこの交流会をお手伝いできればと思います。いわき浜街道（旧道）は鎌倉時代の石碑が集中して残っています。北茨城以南や仙台以北にはこの時代の石碑は残されていません。その意味でもこの浜街道は興味深いと思いますし、探ってみると面白いと思います。

酒井

2006年1月に原町と小高町、鹿島町が合併し南相馬市となりました。昨年の暮に商工会議所内に株式会社を設立し道の駅をつくることが決まりました。そのため現在、特産品の生産や開発に取り組んでいます。原町ではお祭りを行ったり、夏はサーフィン、また海浜公園を会場に地元企業からの協賛金により手づくりの花火大会等を行っています。去年は２～３万人程度の人出でしたが、これから大きくしたいと思います。秋も産業まつりを行っています。合併して人口が７万４千人にはなりましたが、原町は３万７千人の人口でしたので、定住人口や交流人口の増加は以前から課題になっています。商工会議所としても、交流人口と定住人口の増加を図るためのいろいろな方法を探っていきたいと思います。

青年部で去年の夏、桂三枝さんを招いて講演会を実施しましたが、そのご縁で今年2月の22日、京都の清水寺で桂三枝さんの湯豆腐の大食い大会のテレビ番組があるので地元をPRをしたいと思っています。その他にも「いのししカレー」等の地元の特産物を作りながら、青年部の発案による活動を行っております。特産品開発の候補ですが純原町産の小麦粉、また製造業者で特許をとった「しみてん」というドーナツの中に餅を入れたお菓子等がありますので力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

高橋

宮城県商工会連合会としては、御存じのように各商工会に対して特産品の支援をしています。今回のこの交流会やシンポジウムでお手伝いができればと思っております。

司会

先週、JTBの小林理事長のお話を伺う機会があったのですが、観光に特化してお話すると国内に関しては京都と沖縄が面白いということでした。双方、ベーシックな観光地ですが、10年前の観光とは客層も内容も全く違っているそうです。例えば京都ですが、金閣寺や竜安寺等への観光客が減って、そのぶん町家めぐりが人気だそうです。観光客が唯一、一定なのは清水寺だけということでした。何故かというと、周辺のまちづくりが非常にいい。昔は20～40代が京都めぐり観光客の柱でしたが、今は50才以上の方々が京都に来るそうで観光人口は変わらないということでした。50代以上の方々は旅行も人生経験も豊富で、他人の生活を覗きたいという、非日常と日常を比べる要素を旅に求めているようです。そのため劇的な観光というよりは、少しだけ日常から逸脱した生活が魅力的に映るとのことでした。沖縄も同様で今伸びているのは有名な観光地ではなく、離島めぐり、つまり離島のなかの生活を、かい間見たいということのようです。その事実に対し大手旅行会社はまだ対処ができていないというお話でした。

今までは大きなハコモノの観光施設や大河ドラマの舞台といった話題で誘客をしがちでしたが、今後はより知らないことを見つけたい、という観光客の動機を満足させる視点からの観光地を今回の交流マップに落とし込んだり、地域の中でそれぞれアイデアを出し合って、ひとつのおもしろい商品がつくれないか探っていくことが大切だと思います。それぞれの地域によって、それぞれの役割を明確にしながら魅力的な交流ルートができるのではないかなと、みなさんのお話を伺いながら感じます。

遊佐

山元町では商工会の青年部で小さなお祭りを行っています。青年部員を実行委員長にして委員長がやりたいお祭りをしようというスタンスなので、ゼロからのスタートです。そのため実行委員会の回数も多く、週に２～３回が通常です。そういった経緯もあり、山元町には祭りの好きな熱い人間が育っていく土壌があります。ほっき祭りはありますが、その他の観光資源がほとんど無いため、地元の青年部の情熱は強力な力です。例えば、毎年開催している夏まつりで招いた和太鼓のステージに感動して、その後、和太鼓の団体を立ち上げてしまいました。私もメンバーのひとりで、すでに５年活動を続けております。昨年はその集団によるコンサートも開催しました。そういった小さなきっかけで派生したものはありますが、商工会として行っているものは特にありません。自分が参加して感じることですが、太鼓は不思議な縁を連れて来ます。人間らしく生きる方法を示唆されているような気がして、やめられなくなってしまった状況です。

司会

お話を伺うと地域振興において浜街道全体で戦略的な武器がまだ物足りないと思いますが、それぞれの立場から、ご自分の地域だけでも結構ですので、お話いただければと思うのですが。

新妻

かつて相馬市は伊達領と相馬領と分かれていました。実は現在で言う相馬から角田までの113号線沿いの地名には昔、「磐城丸森」「磐城角田」など、全て「磐城（いわき）」という名称が付いていました。相馬市では毎年８月に「市」を開催していますが、これは相馬藩政時代に山元町と交流を行っていた歴史的背景からきています。その時だけは関所の検閲もなく山元町の人々が自由に相馬に行き来し、市で売ったお金で買物をして帰ったそうです。この「市」は400年近い歴史を持っています。交通の体系が良くなった今、そういう歴史が無くなってきているのは、私達、商工会議所側も考えていかなくてはならないと思います。交流の原点は「商」が始まりであ

るという話もありますし、浜街道の交流にも「商」が重要だと思います。そういった点もふまえ、相馬市も何か活かしたいと思っています。

亀岡

双相地区では今年度イベントマップを制作して商工会同士でも交流会を行い情報交換しています。互いの町で何を行っているか分かることで、イベントのブッキングの日程調整もできます。浜街道内においても年間の事業イベント日程が分かるといいかもしれません。

司会

確かにそれができると各地域のイベントへの興味も湧きますし、体験もできますね。机上だけでは交流はできません。今回の会の目的として、浜街道のなかで他の地域にはないものを出していきたいと思いますし、一番大切なのは、本日ご出席の皆様が今後どれだけ親密におつきあいいただけるかということだと思います。

ところで、現状、皆さんの地域においての課題はありますでしょうか。実施している対策でも結構です。情報交流として、そのあたりをお聞かせください。課題が分からないと進む方向も見えません。様々あると思いますので端的にお話いただければと思います。

地域づくりにおける課題について

大平

連携のことに絞ってお話すると、観光物産協会、商工会議所、また行政もですが、観光が注目されるなかで、実際にはいわき市においても何もやれていない状況です。とはいえ、今、観光まちプレビューローというものを立ち上げる動きはあります。また小名浜のNPOですが、国交省の調査事業で、いわきの夏まつりの連携の立ち上げを行っています。先程お話した戦略プランでも、観光局をつくろうという動きもあります。これは今ある観光物産協会をグレードアップするもので、あとは行政の観光物産課や農林水産業務も入れた形でのビューローです。まちづくりが観光であるという意識付けを皆でやっていこうというものです。観光というと、どうしても旅館や土産物屋や魚屋だけが潤うといった考え方があるのですが、本当は違うという意識を広く市民の方々に持っていただくための取組です。つまり市民が住みやすいと思わないところに、人は来ないだろうという考え方です。発想を変えようということです。

國井

岩沼の場合、竹駒神社に年間160万人も観光客が来ますが、駐車場が神社のそばにあって観光客がそのまま帰ってしまいます。商店街としては流れを変えようと観光客の呼び込みをしていますが、神社との折り合いが悪く上手く連携がとれていないのが現状です。もし他の市町村でそういった状況に対する打開策があれば教えていただきたいのですが。住み良さの点では740市中、岩沼は63位です。皆さん、どなたかいらしたら是非、住むようお薦めください。（笑）そういった好条件がありながら、商店街はシャッターが閉まっているという状況が続いています。道路の幅も狭いので、一方通行にするか電柱を地中化するかアイデアはいろいろありますが、実施はまだまだ先の話です。

新妻

商店街の場合、相馬市でも実際にありますが、道路を広くすることで車がスピードを出して危険です。また道路をつくる場合、車椅子の問題もあり必ず歩道を広くとりますが、車が歩道に乗り上げて駐車するといったことが起きています。そうすると、いっそ歩道を駐車場に直しては、との声もあります。そんな中で商工会議所の来年の事業で取り上げようとしているのが、まちの活性化です。福島県内で一番成功しているのが、会津若松の七日町ではないでしょうか。駅舎をつくるなど、昔の街並を再現しています。東京の川越や石川の金沢のように、狭いなら狭さを活かしたまちづくりのほうが効果があるのではないでしょうか。そんな逆の発想をしています。

大平

皆、ミニ東京をつくろうと勘違いをしている部分があるのかもしれません。また商店街の人々と行政の考えのギャップがあるようです。行政としてはある程度引っ張っていこうという考えで、民間のほうは行政に任せようという考えです。そのあたりを調整しないとだめだと思います。行政はどうしても新しいことはやりたくないようです。過去の事例に基づいて実現できたことを参考にする、という手法は私達も勉強するのですが、それが最終的に上手くいった、いかないという「PLAN・DO・SEE」の「SEE」のチェックをしません。その部分を商店街の人々が見極めないとうまくいきません。また、いま商店の人が勉強をしません。私達のところでも商店街のまちづくりを一生懸命やっているのは、商店ではなく運送屋さんであったりといった、全く違う人々です。

司会

まちおこしの事例を伺うと、その場所にずっと暮らしている人々より、一度、違う地域に出られて戻ってこられた方々がそういったパワーを持っているようです。いま大平さんのおっしゃったオペレートの件に関しては、そういう方々を発掘することが地域おこしの一番のポイントになるかもしれません。

私が現在お手伝いさせていただいている県の事業で、玉川村のブランド産品事業があるのですが、道の駅に似ている「こぶしの里」という施設において、訪れる度に驚きの産品が出てきます。例えば黒い柿や茎まで食べられる空芯菜、透明なトマトジュース。トマトジュースはオレンジの沈澱しているような、一見りんごジュースに似たものですが、飲むとトマトというよりフルーツジュースのような味がします。それらは無添加、無塩です。玉川村は標高差や温度差があるので、ひとりあたりの耕地面積が狭い分、限られた土地の中で付加価値のある農産物をつくる達人が沢山いらっしゃる訳です。わたしが打ち合わせをした人々も全く違う分野の方々で、農家の人はひとりもいません。これが凄い、あれが凄いと驚いていることを地元の人々は全く分からない。実は地元のパワーというものは凄いんです。皆さんの地域でも実は見逃している部分が、かなりあると思うのですが。

新妻

先程話した商工会の会頭発案のつみれの加工品も同様です。本来は立ち上げを漁業組合でやる仕事ですが、どうしてもやりたいという商工会の動きがあって、商品開発だけを行って会社を作ってそれを浜の人々にバトンタッチしたという状況です。

また、山元町のほうでも、ある方が蕎麦を打ち始めて、町のなかで始めは少しだけ皆に食べさせて喜んでいたのですが、山奥で昔の茅葺き屋根の民家を改造して本格的に蕎麦屋を始めて、それが成功したという事例があります。そこに至るまでには地域の人々とかなり交流して、店を立

ち上げるまで2年半、山に通い詰めたということです。それが講じて一帯を蕎麦屋だけでなく、いろいろことをしたいといった動きが出て来ているようです。そんな小さな交流もできます。横の連携があれば、浜街道の昔の活気がよみがえるのではないでしょうか。

大平
　福島県は素材はあるのですが、PRが下手だと思います。福島県の特徴と言われると磐梯山か会津若松しか出てこない。それがネックだと思います。

亀岡
　日本の都道府県の中で独立できる県は、何でもある福島県だけです。とはいえ、今の大平さんの話のように特徴がいまひとつ弱い。

碇川
　海のほうでもそうです。黒潮と親潮との境目ですからどちらの魚も揚がります。量こそとれませんが。

大平
　浜通りの特徴とは何か、逆に第三者である司会の方から何かヒントは無いのでしょうか。（笑）

司会
かしこまりました。（笑）

亀岡
　課題と言えば地域おこしをする際、漁業組合や農協等が全く参加しないということがあります。双相地区の場合、いつも商工会議所と商工会だけです。農協の婦人会が開発した商品を商工会がバックアップして販売してやるなど、農業と漁業との交流が必要だと思います。

大平
　農協、漁協との問題は各商工会が抱える課題です。いわき市においても水揚げは15%程度なので、どうしても前向きになれないということがあるようです。

司会
　その間をうまくつなぐキーマンが必要ですね。玉川村の場合もそうでしたが、最初はそれが個人でも、だんだん組織として機能するようになります。例えば、テレビのグルメ番組では、どちらかというと農産物よりは魚介類のほうが訴求効果がありますし、先程おっしゃっていた加工品などは、取り寄せの叶う商材として、おもしろい形ではないでしょうか。

脇坂
　浜通り全体の共通項を探していくと最大公約数的なおとなしいものに納まってしまいますので、むしろ全体としてどういう売り方をしていくか、ということを考え、各地域でそれぞれ宿題として持ち帰って、自分達の地域で何ができるかを考えてはいかがでしょうか。

司会
　皆さんの地域の現状、そして抱える課題を本日お話いただきました。第１回目はまず、情報を

共有するということに力点を置きました。脇坂さんがおっしゃるように、次回まで浜街道の大きな目的をそれぞれの地域毎に考えていただければと思います。

酒井

原町も別の地域からいらした方のほうが元気です。商店街の人々も元気がなく、行政がやってくれるだろうとしか考えていないというところが同じです。野馬追で相馬市等との人的な交流はありますが。

碇川

地域連携を拡大するため大切なことは、その地域毎の足元を固めていくことです。地域振興というのは、その町に住んで良かったというまちづくりですから、自分の住む町についてまず理解を深めていくことが必要だと思います。もちろん、ハード的にいろいろな施設が整っていることも住み良い条件のひとつです。そしてもっと基本的なことは道徳心です。地域の人同士が挨拶をし合うような交流の輪、そういう町が住んでいて一番いい町だと思います。

司会

新妻さんのおっしゃるとおり、地域おこしで一番最初にやらなくてはならないことは現状認識です。今、お話のあった道徳心ということですが、昨年、食育基本法が制定され今年度からスタートしますが、これは子供達に正しい食生活を教えることを目的としたものです。地域の産物を見直すことを、やらなければならない時代に日本も突入したということだと思います。これからは食育の部分からの交流も出てくるのではないでしょうか。それぞれに販売拠点もありますし、食の交流という提案もあると思います。道徳心と食は関連があります。

碇川

いわきは梨が有名です。今、県のサポート事業で青年部が梨ジャムを製品化しようとしています。またいわきには夏井川という素晴らしい渓谷があります。ここで都会の子供達に、いかだ下りのような水に親しんでもらうプロジェクトも検討しています。

遊佐

食に関して言えば山元町は一昨年、宮城県が主催するCMフェスティバルで大賞を受賞させていただきました。いちごとりんごとホッキ貝の自動販売機を登場させたもので、ついつい全部買っちゃった、というような内容の作品です。また山元町には県内唯一のワイナリーがあります。ここでは大きなワイナリーではできない少量生産のワイン醸造ができます。地域の産品を使って100kgだけ造ってくれないかといったオーダーにも応えることができます。いわきの梨もできると思いますよ。

碇川

いわきでも農村地帯それぞれに、発掘されていない素晴らしいものが沢山あります。それを掘り起こせればいいのですが、製品化となると生産量的に難しいようです。

大平

地産地消のネックは供給量が追いつかないということだと思います。

碇川

あとは加工したときの保健所の問題です。委託すればいいとは思いますが。販売となると、やはりハードルは高いです。

遊佐

地産地消の原則は地元で消費し、地元で大切に育てるということです。あまり販売に力を入れすぎて、地元が枯渇しないことが大切です。

司会

今ある新しい考え方としては、そのための資金を回す、いわゆるファイナンスシステムをいかに作るかで解決できると思います。本日は現状認識ということで、皆様の地域の情報や課題についていろいろお話をいただきました。今日の話を聞いて、まずは共通認識を抱いていただいて、興味のある方は各市町村のホームページ等でより詳しく情報を得ていただければと思います。次回の交流会は、浜通り全体で何ができるかということを、簡単に考えて発表いただければと思います。

本日はありがとうございました。

3. 第2回陸前浜街道地域づくり交流会

日時：平成18年2月15日（水） 13:30～
場所：相馬商工会議所　第三会議室

第2回「陸前浜街道地域づくり交流会」次第

◎開会
◎交流会メンバー紹介
◎地域づくり交流会
　(1) 前回出された課題の整理･検討･シンポジウムで発言できるように整理
　(2) 『新時代の浜街道』連携推進協議会よりシンポジウムの代表パネリスト選出
◎閉会

■出席者（＊敬称略）
　いわき商工会議所　大平　均
　いわき青年会議所　四ツ倉　隆裕
　相馬商工会議所　新妻　良一
　原町商工会議所　酒井　和広
　宮城県商工会連合会　渡邊　豊
　亘理山元商工会　遊佐　宗之

■第2回陸前浜街道地域づくり交流会議事録

司会

第１回の話を受けて、この交流会を機会に浜街道全体で出来ることの具体的なアイデアを出していただければと思います。そのアイデアを練りながら最終的に方向性を探っていきたいと思います。

新妻

前回の問題を受けて会頭と話しましたが、根本的にこういった交流はまだ部分的なもので、宮城県との交流を含め、情報がスムーズに流れていないということがあります。事実、先般、対談ということで大平さんと話をしてみて、ひとつの行事をとってみても、何月に何処で何をしているか分からないということがあります。例えば、相馬では今の時期になると「観光いちご園」があります。これは山下のほうと共同で開催している訳ですが、そういう観光地の紹介の中で、互いの特性を理解しないことには交流の意味もいずれ消えてしまうのでは、と思います。そのあたりを問題として挙げたいと思います。

司会

この交流会の中で、新妻さんがおっしゃったように、新たに広域のイベントマップのようなものを作っていくということですね。

新妻

特にいわきと相馬が話し合うことはとても少ないです。同じ福島県でも距離があるために、いわきは茨城を見てしまい、相馬は宮城を意識してしまいます。

大平

福島県という大きな括りの交流はありますが、浜通りとしての交流は残念ながらありません。今、行っている浜通りキャンペーンも行政主体です。民間が交流するということは業界同士はありますが、業界を越えた形ではありません。

新妻
　道路事情の改善はかなり切実な願いです。経済圏で言えば、行政区分は相馬は福島県でありながら、宮城県相馬市といった感じです。現に、私個人の仕事も取引先の95%は宮城県です。

司会
　現状は、かなり地の利の問題があるということですね。

大平
　相馬のひとは遊びに行くのも仙台に行きます。今回の交流も県内という括りにこだわらずにやるしかないのではないでしょうか。

新妻
　この問題が解決できれば、かなり面白い取り組みができると思います。

遊佐
　スポットとしての産業交流は考えられますが、大きな面としての交流はやはり問題が大きいですね。

大平
　産業や道路といった面を外して考えるとすれば、海の食材では同じようなものになると思いますが、やはり食や歴史といった切り口から活動していくのが一番やりやすいのではないでしょうか。漁業は衰退ぎみですが、そういった部分はまだ叶うと思います。その中で、観光というよりも交流人口を増やしていくという取組みが落としどころになってくると思います。高速道路ができていないぶん、ゆっくりじっくり時間をかけて楽しめるという考え方もできる訳ですし。それをやるためには、歴史の中の地域の位置付けも必要になってくるでしょう。モノをつくるのではなく、ソフトの作り込みも必要だと思います。これから高齢化社会が進むなかで、学校や行政等をリタイヤして体をもてあましている高齢者も増えてきます。その人々を組み込んで、現在、県でもやっているような歴史ボランティアや、まちなか案内人等を組織していくのもいいのではないでしょうか。そしてその情報をパソコンで管理するシステムもつくる訳です。現状、既にある県との連携を図っていくこともできると思います。

司会
　総合的学習という学校教育の修学旅行でも、現在行っていますね。今までは子供が対象でしたが、まだまだやる気にあふれた団塊世代の方々からも協力を得たり、学びたいといった欲求を充たす措置を講じることができる訳ですね。

大平
　そういった方々に、働ける場を提供していくことにも繋がります。持っている知識を活かす場をつくる訳です。とりまとめは大変な作業になると思いますが。

司会
　私も課題を出した関係上、いろいろ考えたのが食と歴史でした。各市町村のホームページを見てみたのですが、いわきには「めひかりのすいとん鍋」というものがありました。そういったも

のからアプローチすれば、宮城で行っている牛タンを媒介にした味ロードのようなものができるのではないか、と思います。

新妻

相馬ではその点もふまえて、海のものを特化しています。できれば食なら食、観光地なら観光地のマップといった具合に制作できるのではないか、と思います。実は以前、道の駅にある国交省が管理している情報館のサイトを地元からも情報をアップロードできるようにして、総合的な情報ステーションとして利用できないかと伺ってみたのですが難しいようです。地元のひとでも分からないものがガイドブックに載っていたりと、現在、なかなかそのあたりのコンセンサスがうまく機能していないように感じます。

大平

そういうサイトを作っておいて、パスワードを入れることによって情報が入力できるシステムができると思うのですが。

司会

今回の交流会を好機に、そういったPCを使ったアピールができるといいですね。食をテーマにした交流が何かできるのではないでしょうか。何も無いと思っている地域も、実際に探せば何かはあると思います。そういうものが市場に出てブレイクするというケースもあります。

実は私も千葉の房総地域のあるホテルの仕事で名物料理が無くて困っていたとき、猟師の料理で、鰺をたたいて味噌を混ぜ、それを大葉で巻いて陶板の上で焼く「山河焼」という面白いものがある、と料理長から紹介を受けました。それを出してみたところ、大ブレイクしたという経験を持っています。それまでは地元の人も知らない猟師料理だったわけです。それがきっかけで、全ての房総のホテルでこの料理を出すようになっていしまいました。こういった名物料理は意外とあるもので、実はつくれるものなんです。もう一度、地元に眠っているものはないか探していただきたいと思います。食は裾野が広く、生産もあれば加工もある。販売もあれば飲食もあります。そういった意味では生産効率が非常にいいわけです。例えばいま、東京に行きますと駅弁コーナーに宮城県の食材によるテーマ駅弁があります。そんな括りで例えば浜街道といった味わいがあってもいいのではないでしょうか。昔、このあたりは東（あずま）海道と呼ばれていた訳ですし。

また、歴史といったプロジェクトも団塊の世代には効果的です。現役をリタイヤした人々の協力による、歩くまちなみの整備です。さらに祭というのも魅力です。祭は地域そのもの、一番の限定商品です。食と歴史と祭。このそれぞれを合わせ情報交流をするということが、大きな価値になると思います。今後、こういった交流の機会をもっと増やして、いいきっかけにしてもらえればいいのではないでしょうか。

遊佐

地元に大きな祭がなくても、それぞれの連携で魅力的な地域づくりができれば、まちおこしにつながると思います。祭は単に騒ぐだけのものではなく、その原点を見つめた形での展開ができればいいですね。

四ツ倉

先程、歴史という話がありましたが、歴史を紹介しながら海道を歩く楽しみを提供するマップ

があれば、興味を持ってくれる人がいるのではないでしょうか。もちろん、その他のいろいろな情報も入れてです。多岐に渡って、いわきの海を強力にアピールしていけると思います。

新妻

今は健康ブームです。相馬の隣町の新地にある加納山などは、登り下りが１時間半程度でできるということで、他地域から登山客が通年訪れます。そういった無理なく登れる山も紹介してはどうでしょうか。各市町村にそれらの観光資源は結構あるはずです。加納山では今年のお正月に山頂でアルプスホルンのコンサートなどを行ってNHKも取材に来ました。そんなPRの仕方もあります。原町では歩こう会と言って、いわきから電車で行って一日20km程の行程を決め、何回かに分けて目的地まで完歩するといった会もあるようです。

渡辺

前回、天童温泉の鍋まつりというお話がありましたが、食に関して言えば、何かを盛り上げるためのイベントが必要であると思います。また、私達が新時代の浜街道を伝えるにあたって、スポーツの交流会など子供達を巻き込んでいくことが大切です。実は宮城県では石巻と酒田間でサッカーの交流会を行っています。既に５～６回行っていますが、スポーツはイベントの持続性もあり、交流にはもってこいだと思います。宮城県には寿司街道というものもありますし、今後、浜街道においてもそういったものをつくっていければ面白い展開になるのではないでしょうか。

司会

子供という視点から言えば、金沢にある金沢21世紀美術館の館長がおっしゃっていた面白い試みがあります。行政と協力して、県内の小中学生を全部、無料で美術館に招待したそうです。現代美術というものは解釈が分かれる分野ですので、まず来てもらって、20以上もある展示室で現代美術と遊んでもらったそうです。そうすると子供達が親を連れてくる。そうして最初に自分が来たときに説明された内容を逆に説明して、親がかなり感心するそうです。来た子供達には美術館の無料券を配って、また来てもらう。そうすると必然的に親も入場料を払ってまた来るという仕組みです。そういった意味では、子供はこれからキーパーソンになってきます。前回も食育ということをお話しましたが、食育の中心は子供です。郷土の食をきちんと食べてもらい、学んでもらう。食というテーマからそちらへのアプローチもできるはずです。

大平
　子供のため、は広がるキーワードです。子供と聞くと、実施するほうにも別なパワーが生まれてくるように思います。

司会
　現在、子供の30～40%は朝ごはんを食べないそうです。食べたがらないのか、食べる環境にないのかは分かりませんが。

大平
　一緒に食事をできるのは、父親としては朝ごはんしかないのですが。それが無いということは、父親といつ会っているのでしょうか。

司会
　静岡県ではいま食育の第一段階として、朝ごはんを食べようキャンペーンを行っているようです。朝ごはんを食べないとすぐキレたり、授業中、ぼーっとしていたりすることが結構あるらしいです。それを予防する意味もあると思います。マーケティング的にはどうしでも可能性の多い団塊世代を狙いがちですが、次世代の子供たちに協力してもらうということは、非常にいい視点ではないでしょうか。

新妻
　相馬の商人が書き残した日記を読む会というのが毎月1回あって、その中から出て来た資料なのですが、「枡型」という形の道が残されています。これは騎馬武者に一気に駆け込まれないよう、道を戦略的にわざと曲げた名残りです。受け入れの体制があれば、そういった知識を持っている人たちも協力してくれると思います。こういった歴史的な話に興味のある人にはたまらないと思います。現在は、市の広報、各自治体でインフォメーションしているくらいです。

大平
　いわきにもそういった歴史の道研究会はあります。古代遺跡をまわる遊歩道や文学碑等の調査資料をまとめたツールも有料で販売しています。いわきに自生するきのこをまとめたツールは2回増刷しています。ものによっては人気もあるようです。

新妻
　歴史資料は多々あることはあるのですが、難しいのは人のオペレーションです。通年、観光客が訪れる京都のようにいつも開放できる訳ではありません。いいものがあっても、表にはなかなか公表されていないのが現状です。四国の八十八箇所参りではありませんが、例えばいわきから相馬まで観音像を巡るなど、カメラを趣味にされている方に向けて、期間を限定して行えばできるのかもしれません。

平山　（＊聴講）
　歴史の道研究会の話が出たのでお話させていただきます。現在、浜通り歴史の道研究会は活動しています。その集まりというのは、いわきはいわき支部があり、相馬は相馬といった形で４つ程です。それらの連携を図り、一般の方にいかに紹介していくかということで、今までは講演会や現地探訪会ということを行ってきましたが、先程、お話のあったように現役を退いた60～70歳

代の方々にちょっと声をかけてみると、結構、集まっていただきました。それで今お話にもありましたが、相馬のあまり知られていない部分について現地探訪しようと、いわきだけではなく浜街道の他地域にも公募してみました。バスで移動して何が良かったか感想を伺うと、説明を地元の方に聞きながら歩いたのが良かったという答えがかなりありました。機会がなければ浜通りに来ることが無かった、こういう機会があって良かった、という声がありました。

酒井

原町はあまり特徴がありません。強いて言えばカニでしょうか。浪江のほうでは今、太麺のヤキソバを売り出しています。が、実際には、なかなか飛び抜けたものがありません。これからの開発です。ただ、原町はスポーツが盛んでメセナ杯というサッカー大会を行っています。また原町は中学生が元気で、ここ10年程、吹奏楽が全国大会に出場しています。

司会

みなさんのお話の中で、方向性としては食と歴史と行事というものを、マップの制作やサイトの構築など、形はまだ分かりませんが、そういった共通項を浜通りで括っていくのが今後の形ではないかな、と思います。またそれに関して子供を巻き込んで、社会事業に近い形へ引き上げていくことになると思います。今回のこういう機会を大いに利用して、各地域で連携を図ってもらいたいと思います。

広報の点から見れば、浜街道全体で何かキャッチフレーズのようなものをつくるのもひとつの手だと思います。そういった部分も含め、今後皆さんで話し合っていかれてはいかがでしょうか。そしてそれをロードサイドのサインで展開したり、沿線のコンビニで地域振興事業ということで協力いただき、浜遊記のツールを置いてもらったりすることもできると思います。浜街道を訪れる方々が、常に今どこを歩いているのか意識していただかないと意味がないですので、キャッチフレーズやロゴタイプの整備は必要だと思います。そして最後に、情報交換ということが何より大切だと思います。今回の人のリンクを切らないよう、各地域で交流会を活発にしていただき、アイデアを相互に練りあって欲しいと思います。百聞は一見にしかずです。実際に現地を訪れて見て食べて泊まって感じて欲しいと思います。それが交流会の大きな目的ではないでしょうか。

平成17年度地域連携支援ソフト事業
『新時代の浜街道』地域連携・交流拡大事業
～陸前浜街道の“ 新たな交流 ”～

報告書

平成18年3月

国土交通省国土計画局

目　次

１．　事業の目的 1
２．　事業の概要 2
３．　陸前浜街道地域づくり交流会の実施 3
４．　陸前浜街道地域の連携交流マップづくり 20
５．『新時代の浜街道』のシンボルマークの作成 25
６．　地域連携シンポジウムの開催 26
・開会挨拶 30
・基調講演 32
・活動事例報告 39
・パネルディスカッション 45
・シンボルマークの発表及び閉会挨拶 65
７．　今後の展開 66

参考資料
陸前浜街道地域の連携交流マップ
『新時代の浜街道』のシンボルマーク
地域連携シンポジウムプログラム
新聞掲載紙

1．事業の目的

「21世紀の国土のグランドデザイン」においては、「参加と連携」による国土づくり、地域連携を推進するために、連携意識の醸成を進めるとともに、地域間の連携の主体の円滑な形成が図られることが重要であるとされている。

宮城県南部の浜通り地域から福島県東部の浜通り地域に亘る一帯は、東北地方の南東部に位置して阿武隈山脈と太平洋に挟まれ温暖気候と豊かな自然に恵まれた地域であり、ホッキ貝（山元町）、松葉カニ（相馬港）、鮭（木戸川）、といった魚介類や、ササニシキ（宮城県）、苺（宮城県南部から福島県浜通り地方）、キウイ（双葉郡）等、これまで多くの農産物を産出してきている。

また、当地域は、奈良・平安期の官道の由緒を誇る「陸前浜街道」を軸とした共通の基盤を形成し、域内には、「勿来の関」、「中村宿」などの古来の交通要衝や、街道跡等が存在し、歴史的・文化的な地域資源なども有しているものの、そのポテンシャルが十分に発揮されているとは言い難い。

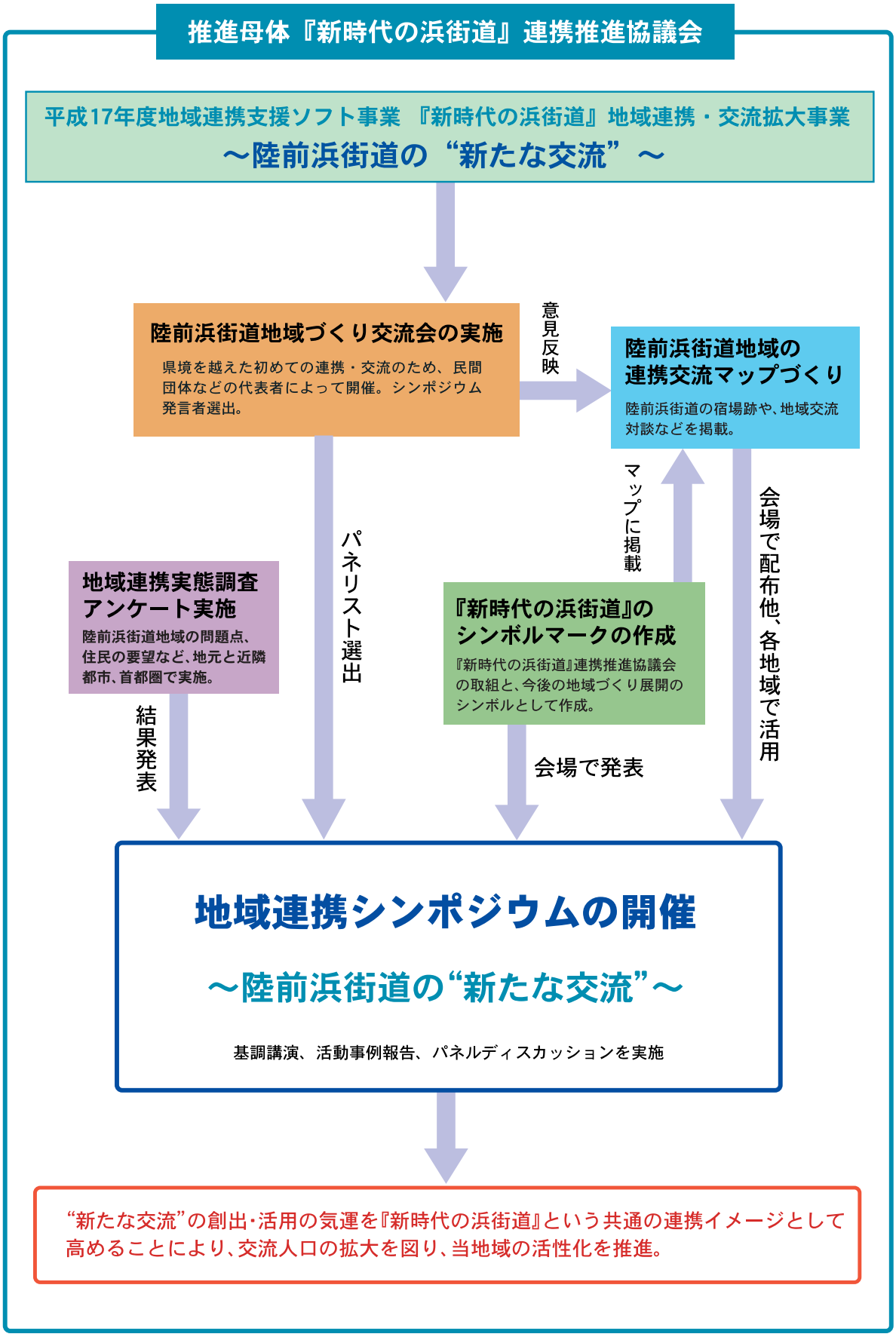
このため、当地域では、地域間交流を深め、これら地域資源を活かしつつ地域活性化を図ることが、これまでより重要な課題となっており、今年度、地元自治体が主体となりキャンペーンを展開するなどしているが、地域間交流を促進する取組は、福島県域内に留まっているのが現状である。

このような状況に対処するため、「陸前浜街道」を軸とした南の福島県いわき市から、北は宮城県仙台市に及ぶ街道周辺のより拡大した広い地域で連携を促進し、その気運を『新時代の浜街道』として地域全域で高める”新たな交流”の創出・活用が求められている。

本事業では、関係する県市町村、地域住民、民間団体などの地域の多様な主体が幅広く参加・協力し、『新時代の浜街道』という共通の連携イメージのもと地域が連携して、地域内の広域連携と観光集客効果の拡大を図ることを目標に、浜通り歴史の道研究会や地元商工団体等との協働で取り組む陸前浜街道地域の連携交流マップづくりや、陸前浜街道地域づくり交流会の実施の取組等を行う。さらにはこれらの活動を集約する形で、地域連携に資する「新時代の浜街道と地域づくり」をテーマとしたシンポジウムを開催し、広く情報発信することにより、県際地域の広域連携と魅力ある地域づくりを展開する。

2. 事業の概要

事業概要図



3．陸前浜街道地域づくり交流会の実施

（1）陸前浜街道地域づくり交流会の目的

陸前浜街道地域内の"新たな交流"を生み出し、地域全体を一体として魅力ある地域とするための取組を進めるために、商工団体等の民間団体を中心に各地域より推薦のあった代表メンバーが集まり、当該地域が今後の方策を考えるに必要な地域の現状認識、課題の抽出･共有化の作業を行う陸前浜街道地域づくり交流会を実施。

陸前浜街道地域づくり交流会構成メンバー
（＊敬称略）

いわき商工会議所　大平　均
いわき青年会議所　四ツ倉　隆裕
いわき地区商工会連絡協議会　碇川　寛
岩沼市商工会　國井　陽介
相双地区商工会連絡協議会　亀岡　昭典
相双４ＪＣ協議会　早川　恒久
相馬商工会議所　新妻　良一
浜通り歴史の道研究会　脇坂　省吾
原町商工会議所　酒井　和広
宮城県商工会連合会　渡邊　豊　　高橋　薫
亘理山元商工会　遊佐　宗之

（2）第１回陸前浜街道地域づくり交流会

日時：平成18年2月1日（水）　13:30～
場所：相馬商工会議所　第三会議室

第１回「陸前浜街道地域づくり交流会」次第

◎開会
◎開催主旨説明
◎委託業者の紹介
◎交流会メンバー紹介
◎地域づくり交流会
　(1) メンバーそれぞれの地元における地域づくりの取組状況、課題等の紹介
　(2) 陸前浜街道地域の現状認識の共有
　(3) 陸前浜街道地域共通の問題点の抽出、今後の課題の整理
◎その他　交流マップへの要望、追加事項収集
◎閉会

■出席者（＊敬称略）
　いわき商工会議所　大平　均
　いわき地区商工会連絡協議会　碇川　寛
　岩沼市商工会　國井　陽介
　相双地区商工会連絡協議会　亀岡　昭典
　相馬商工会議所　新妻　良一
　浜通り歴史の道研究会　脇坂　省吾
　原町商工会議所　酒井　和広
　宮城県商工会連合会　高橋　薫
　亘理山元商工会　遊佐　宗之

■第１回陸前浜街道地域づくり交流会議事録

＊敬称略

地域づくりの取組状況について

司会
　本日は皆様のご協力を得て、実のある会にしたいと思いますので宜しくお願いします。
　まずは地域毎ということから、またはそれぞれのお立場から、通常のお仕事の内容や地域に関して共有できる内容をお話願います。

大平
　本年は３年に渡る福島県観光推進キャンペーンの最後の年で、浜通りの観光推進キャンペーン実施年です。いわき市では昨年、まだ草案ですが、市長を座長に１年かけて観光戦略プランをつくりました。その他、年間一億程度の予算を市から受け、観光物産協会のキャンペーンを行っていますが、実際、地域交流はしていない状況です。北茨木市とのソフトモデル事業もあり、それぞれ地域毎の動きはあるものの、連携となると顔合わせや勉強会程度で終わっています。
　いわき市は合併して今年40周年を迎えますが、多少、まとまってきているとは言いながら市内においても地域間の温度差はまだある状況です。現在、交流人口を目標である1,000万人までどうやって増やすかが課題となっています。現状は約700～800万です。現状はそんなところです。

碇川
　いわき市は40年前に14市町村が合併して、商工会議所と商工会が並存している地域です。９つある商工会地域は、情報を交換しようと組織づくりに入ったところです。交流人口を増やすためには、それぞれの地域が情報公開することが大切だと思います。私はいわき市立草野心平記念文学館のある小川町に住んでいますが、それぞれの地域で地域おこしを積極的に行っています。

國井
　岩沼市においても岩沼市商工会と名取市商工会が広域的に連携をとっています。まちづくりについては講演会等の活動を通して頑張っていきたいという、そんな進捗状況です。具体的にはまだありません。

亀岡
　相双地区は12の商工会と、相馬、原町の２つの商工会で成り立っています。その12の商工会が３つのブロックに分かれて、それぞれに交流人口を図るにはどうしたらよいか、また、特産品の開発をするにはどうしたらよいか、の点から広域交流を行っております。現在、南相馬市中心の商工会が地域の特産品のネット販売を計画し実施段階まできています。商業は人口の流出でダメになり、工業は高齢化によってダメになります。地域の活性化には人口の交流が必要というのが現実です。原発の協力を得ながら交流人口の増大に向け、Jヴィレッジ等の施設を利用しながら努力はしていますが、思うように進んでいません。
　現在、行政から商工会に観光協会の事務委託を受けている大熊町、鹿島町などございますが、

将来、常磐自動車道の延伸に伴うインターチェンジの設置に対し、いかに交流人口増大を図るか考えていかなくてはならないと思います。

新妻

相馬商工会議所では隣の新地町と連携をとり、広域型の考え方として会頭が福島大学の協力を得て特産品の開発に取組んでいます。現在は魚の加工品で「どんこのつみれ」です。近々、商品化されることになっています。相馬市は魚がとれるため生食の文化ですが、加工品を作ることで若い方々にも食べていただける訳です。

浜通りの一番の欠点は山と海の間が狭く南北に交流がなければ交流ができないということです。幸い相馬は松川港、相馬港の新鮮な魚を利用して観光誘致を行ってきましたが、最近では山形の天童市で行っている「鍋合戦」にエントリーして１月の鍋将軍の最高位をとりました。これからは内にこもっていてはダメだということです。特産品の開発も、外へ向けた活動のひとつです。

また最近JR東北でいわきのあんこう鍋と、相馬のカニをPRしていただき、先日もお座敷列車で関東圏から２回誘客が出来、いま観光事業としてなんとか定着しています。しかし特産品の開発は手間がかかります。大切なのは各地域が連携をとりながら特化していくことではないでしょうか。観光でも特産品でもいいと思います。

脇坂

私は歴史という方面からこの交流会をお手伝いできればと思います。いわき浜街道（旧道）は鎌倉時代の石碑が集中して残っています。北茨城以南や仙台以北にはこの時代の石碑は残されていません。その意味でもこの浜街道は興味深いと思いますし、探ってみると面白いと思います。

酒井

2006年1月に原町と小高町、鹿島町が合併し南相馬市となりました。昨年の暮に商工会議所内に株式会社を設立し道の駅をつくることが決まりました。そのため現在、特産品の生産や開発に取り組んでいます。原町ではお祭りを行ったり、夏はサーフィン、また海浜公園を会場に地元企業からの協賛金により手づくりの花火大会等を行っています。去年は２～３万人程度の人出でしたが、これから大きくしたいと思います。秋も産業まつりを行っています。合併して人口が７万４千人にはなりましたが、原町は３万７千人の人口でしたので、定住人口や交流人口の増加は以前から課題になっています。商工会議所としても、交流人口と定住人口の増加を図るためのいろいろな方法を探っていきたいと思います。

青年部で去年の夏、桂三枝さんを招いて講演会を実施しましたが、そのご縁で今年2月の22日、京都の清水寺で桂三枝さんの湯豆腐の大食い大会のテレビ番組があるので地元をPRをしたいと思っています。その他にも「いのししカレー」等の地元の特産物を作りながら、青年部の発案による活動を行っております。特産品開発の候補ですが純原町産の小麦粉、また製造業者で特許をとった「しみてん」というドーナツの中に餅を入れたお菓子等がありますので力を入れて取り組んでいきたいと思っています。

高橋

宮城県商工会連合会としては、御存じのように各商工会に対して特産品の支援をしています。今回のこの交流会やシンポジウムでお手伝いができればと思っております。

司会

先週、JTBの小林理事長のお話を伺う機会があったのですが、観光に特化してお話すると国内に関しては京都と沖縄が面白いということでした。双方、ベーシックな観光地ですが、10年前の観光とは客層も内容も全く違っているそうです。例えば京都ですが、金閣寺や竜安寺等への観光客が減って、そのぶん町家めぐりが人気だそうです。観光客が唯一、一定なのは清水寺だけということでした。何故かというと、周辺のまちづくりが非常にいい。昔は20～40代が京都めぐり観光客の柱でしたが、今は50才以上の方々が京都に来るそうで観光人口は変わらないということでした。50代以上の方々は旅行も人生経験も豊富で、他人の生活を覗きたいという、非日常と日常を比べる要素を旅に求めているようです。そのため劇的な観光というよりは、少しだけ日常から逸脱した生活が魅力的に映るとのことでした。沖縄も同様で今伸びているのは有名な観光地ではなく、離島めぐり、つまり離島のなかの生活を、かい間見たいということのようです。その事実に対し大手旅行会社はまだ対処ができていないというお話でした。

今までは大きなハコモノの観光施設や大河ドラマの舞台といった話題で誘客をしがちでしたが、今後はより知らないことを見つけたい、という観光客の動機を満足させる視点からの観光地を今回の交流マップに落とし込んだり、地域の中でそれぞれアイデアを出し合って、ひとつのおもしろい商品がつくれないか探っていくことが大切だと思います。それぞれの地域によって、それぞれの役割を明確にしながら魅力的な交流ルートができるのではないかなと、みなさんのお話を伺いながら感じます。

遊佐

山元町では商工会の青年部で小さなお祭りを行っています。青年部員を実行委員長にして委員長がやりたいお祭りをしようというスタンスなので、ゼロからのスタートです。そのため実行委員会の回数も多く、週に２～３回が通常です。そういった経緯もあり、山元町には祭りの好きな熱い人間が育っていく土壌があります。ほっき祭りはありますが、その他の観光資源がほとんど無いため、地元の青年部の情熱は強力な力です。例えば、毎年開催している夏まつりで招いた和太鼓のステージに感動して、その後、和太鼓の団体を立ち上げてしまいました。私もメンバーのひとりで、すでに５年活動を続けております。昨年はその集団によるコンサートも開催しました。そういった小さなきっかけで派生したものはありますが、商工会として行っているものは特にありません。自分が参加して感じることですが、太鼓は不思議な縁を連れて来ます。人間らしく生きる方法を示唆されているような気がして、やめられなくなってしまった状況です。

司会

お話を伺うと地域振興において浜街道全体で戦略的な武器がまだ物足りないと思いますが、それぞれの立場から、ご自分の地域だけでも結構ですので、お話いただければと思うのですが。

新妻

かつて相馬市は伊達領と相馬領と分かれていました。実は現在で言う相馬から角田までの113号線沿いの地名には昔、「磐城丸森」「磐城角田」など、全て「磐城（いわき）」という名称が付いていました。相馬市では毎年８月に「市」を開催していますが、これは相馬藩政時代に山元町と交流を行っていた歴史的背景からきています。その時だけは関所の検閲もなく山元町の人々が自由に相馬に行き来し、市で売ったお金で買物をして帰ったそうです。この「市」は400年近い歴史を持っています。交通の体系が良くなった今、そういう歴史が無くなってきているのは、私達、商工会議所側も考えていかなくてはならないと思います。交流の原点は「商」が始まりであ

るという話もありますし、浜街道の交流にも「商」が重要だと思います。そういった点もふまえ、相馬市も何か活かしたいと思っています。

亀岡

双相地区では今年度イベントマップを制作して商工会同士でも交流会を行い情報交換しています。互いの町で何を行っているか分かることで、イベントのブッキングの日程調整もできます。浜街道内においても年間の事業イベント日程が分かるといいかもしれません。

司会

確かにそれができると各地域のイベントへの興味も湧きますし、体験もできますね。机上だけでは交流はできません。今回の会の目的として、浜街道のなかで他の地域にはないものを出していきたいと思いますし、一番大切なのは、本日ご出席の皆様が今後どれだけ親密におつきあいいただけるかということだと思います。

ところで、現状、皆さんの地域においての課題はありますでしょうか。実施している対策でも結構です。情報交流として、そのあたりをお聞かせください。課題が分からないと進む方向も見えません。様々あると思いますので端的にお話いただければと思います。

地域づくりにおける課題について

大平

連携のことに絞ってお話すると、観光物産協会、商工会議所、また行政もですが、観光が注目されるなかで、実際にはいわき市においても何もやれていない状況です。とはいえ、今、観光まちプレビューローというものを立ち上げる動きはあります。また小名浜のNPOですが、国交省の調査事業で、いわきの夏まつりの連携の立ち上げを行っています。先程お話した戦略プランでも、観光局をつくろうという動きもあります。これは今ある観光物産協会をグレードアップするもので、あとは行政の観光物産課や農林水産業務も入れた形でのビューローです。まちづくりが観光であるという意識付けを皆でやっていこうというものです。観光というと、どうしても旅館や土産物屋や魚屋だけが潤うといった考え方があるのですが、本当は違うという意識を広く市民の方々に持っていただくための取組です。つまり市民が住みやすいと思わないところに、人は来ないだろうという考え方です。発想を変えようということです。

國井

岩沼の場合、竹駒神社に年間160万人も観光客が来ますが、駐車場が神社のそばにあって観光客がそのまま帰ってしまいます。商店街としては流れを変えようと観光客の呼び込みをしていますが、神社との折り合いが悪く上手く連携がとれていないのが現状です。もし他の市町村でそういった状況に対する打開策があれば教えていただきたいのですが。住み良さの点では740市中、岩沼は63位です。皆さん、どなたかいらしたら是非、住むようお薦めください。（笑）そういった好条件がありながら、商店街はシャッターが閉まっているという状況が続いています。道路の幅も狭いので、一方通行にするか電柱を地中化するかアイデアはいろいろありますが、実施はまだまだ先の話です。

新妻

商店街の場合、相馬市でも実際にありますが、道路を広くすることで車がスピードを出して危険です。また道路をつくる場合、車椅子の問題もあり必ず歩道を広くとりますが、車が歩道に乗り上げて駐車するといったことが起きています。そうすると、いっそ歩道を駐車場に直しては、との声もあります。そんな中で商工会議所の来年の事業で取り上げようとしているのが、まちの活性化です。福島県内で一番成功しているのが、会津若松の七日町ではないでしょうか。駅舎をつくるなど、昔の街並を再現しています。東京の川越や石川の金沢のように、狭いなら狭さを活かしたまちづくりのほうが効果があるのではないでしょうか。そんな逆の発想をしています。

大平

皆、ミニ東京をつくろうと勘違いをしている部分があるのかもしれません。また商店街の人々と行政の考えのギャップがあるようです。行政としてはある程度引っ張っていこうという考えで、民間のほうは行政に任せようという考えです。そのあたりを調整しないとだめだと思います。行政はどうしても新しいことはやりたくないようです。過去の事例に基づいて実現できたことを参考にする、という手法は私達も勉強するのですが、それが最終的に上手くいった、いかないという「PLAN・DO・SEE」の「SEE」のチェックをしません。その部分を商店街の人々が見極めないとうまくいきません。また、いま商店の人が勉強をしません。私達のところでも商店街のまちづくりを一生懸命やっているのは、商店ではなく運送屋さんであったりといった、全く違う人々です。

司会

まちおこしの事例を伺うと、その場所にずっと暮らしている人々より、一度、違う地域に出られて戻ってこられた方々がそういったパワーを持っているようです。いま大平さんのおっしゃったオペレートの件に関しては、そういう方々を発掘することが地域おこしの一番のポイントになるかもしれません。

私が現在お手伝いさせていただいている県の事業で、玉川村のブランド産品事業があるのですが、道の駅に似ている「こぶしの里」という施設において、訪れる度に驚きの産品が出てきます。例えば黒い柿や茎まで食べられる空芯菜、透明なトマトジュース。トマトジュースはオレンジの沈澱しているような、一見りんごジュースに似たものですが、飲むとトマトというよりフルーツジュースのような味がします。それらは無添加、無塩です。玉川村は標高差や温度差があるので、ひとりあたりの耕地面積が狭い分、限られた土地の中で付加価値のある農産物をつくる達人が沢山いらっしゃる訳です。わたしが打ち合わせをした人々も全く違う分野の方々で、農家の人はひとりもいません。これが凄い、あれが凄いと驚いていることを地元の人々は全く分からない。実は地元のパワーというものは凄いんです。皆さんの地域でも実は見逃している部分が、かなりあると思うのですが。

新妻

先程話した商工会の会頭発案のつみれの加工品も同様です。本来は立ち上げを漁業組合でやる仕事ですが、どうしてもやりたいという商工会の動きがあって、商品開発だけを行って会社を作ってそれを浜の人々にバトンタッチしたという状況です。

また、山元町のほうでも、ある方が蕎麦を打ち始めて、町のなかで始めは少しだけ皆に食べさせて喜んでいたのですが、山奥で昔の茅葺き屋根の民家を改造して本格的に蕎麦屋を始めて、それが成功したという事例があります。そこに至るまでには地域の人々とかなり交流して、店を立

ち上げるまで2年半、山に通い詰めたということです。それが講じて一帯を蕎麦屋だけでなく、いろいろことをしたいといった動きが出て来ているようです。そんな小さな交流もできます。横の連携があれば、浜街道の昔の活気がよみがえるのではないでしょうか。

大平
　福島県は素材はあるのですが、PRが下手だと思います。福島県の特徴と言われると磐梯山か会津若松しか出てこない。それがネックだと思います。

亀岡
　日本の都道府県の中で独立できる県は、何でもある福島県だけです。とはいえ、今の大平さんの話のように特徴がいまひとつ弱い。

碇川
　海のほうでもそうです。黒潮と親潮との境目ですからどちらの魚も揚がります。量こそとれませんが。

大平
　浜通りの特徴とは何か、逆に第三者である司会の方から何かヒントは無いのでしょうか。（笑）

司会
かしこまりました。（笑）

亀岡
　課題と言えば地域おこしをする際、漁業組合や農協等が全く参加しないということがあります。双相地区の場合、いつも商工会議所と商工会だけです。農協の婦人会が開発した商品を商工会がバックアップして販売してやるなど、農業と漁業との交流が必要だと思います。

大平
　農協、漁協との問題は各商工会が抱える課題です。いわき市においても水揚げは15%程度なので、どうしても前向きになれないということがあるようです。

司会
　その間をうまくつなぐキーマンが必要ですね。玉川村の場合もそうでしたが、最初はそれが個人でも、だんだん組織として機能するようになります。例えば、テレビのグルメ番組では、どちらかというと農産物よりは魚介類のほうが訴求効果がありますし、先程おっしゃっていた加工品などは、取り寄せの叶う商材として、おもしろい形ではないでしょうか。

脇坂
　浜通り全体の共通項を探していくと最大公約数的なおとなしいものに納まってしまいますので、むしろ全体としてどういう売り方をしていくか、ということを考え、各地域でそれぞれ宿題として持ち帰って、自分達の地域で何ができるかを考えてはいかがでしょうか。

司会
　皆さんの地域の現状、そして抱える課題を本日お話いただきました。第１回目はまず、情報を

共有するということに力点を置きました。脇坂さんがおっしゃるように、次回まで浜街道の大きな目的をそれぞれの地域毎に考えていただければと思います。

酒井
　原町も別の地域からいらした方のほうが元気です。商店街の人々も元気がなく、行政がやってくれるだろうとしか考えていないというところが同じです。野馬追で相馬市等との人的な交流はありますが。

碇川
　地域連携を拡大するため大切なことは、その地域毎の足元を固めていくことです。地域振興というのは、その町に住んで良かったというまちづくりですから、自分の住む町についてまず理解を深めていくことが必要だと思います。もちろん、ハード的にいろいろな施設が整っていることも住み良い条件のひとつです。そしてもっと基本的なことは道徳心です。地域の人同士が挨拶をし合うような交流の輪、そういう町が住んでいて一番いい町だと思います。

司会
　新妻さんのおっしゃるとおり、地域おこしで一番最初にやらなくてはならないことは現状認識です。今、お話のあった道徳心ということですが、昨年、食育基本法が制定され今年度からスタートしますが、これは子供達に正しい食生活を教えることを目的としたものです。地域の産物を見直すことを、やらなければならない時代に日本も突入したということだと思います。これからは食育の部分からの交流も出てくるのではないでしょうか。それぞれに販売拠点もありますし、食の交流という提案もあると思います。道徳心と食は関連があります。

碇川
　いわきは梨が有名です。今、県のサポート事業で青年部が梨ジャムを製品化しようとしています。またいわきには夏井川という素晴らしい渓谷があります。ここで都会の子供達に、いかだ下りのような水に親しんでもらうプロジェクトも検討しています。

遊佐
　食に関して言えば山元町は一昨年、宮城県が主催するCMフェスティバルで大賞を受賞させていただきました。いちごとりんごとホッキ貝の自動販売機を登場させたもので、ついつい全部買っちゃった、というような内容の作品です。また山元町には県内唯一のワイナリーがあります。ここでは大きなワイナリーではできない少量生産のワイン醸造ができます。地域の産品を使って100kgだけ造ってくれないかといったオーダーにも応えることができます。いわきの梨もできると思いますよ。

碇川
　いわきでも農村地帯それぞれに、発掘されていない素晴らしいものが沢山あります。それを掘り起こせればいいのですが、製品化となると生産量的に難しいようです。

大平
　地産地消のネックは供給量が追いつかないということだと思います。

碇川

　あとは加工したときの保健所の問題です。委託すればいいとは思いますが。販売となると、やはりハードルは高いです。

遊佐

　地産地消の原則は地元で消費し、地元で大切に育てるということです。あまり販売に力を入れすぎて、地元が枯渇しないことが大切です。

司会

　今ある新しい考え方としては、そのための資金を回す、いわゆるファイナンスシステムをいかに作るかで解決できると思います。本日は現状認識ということで、皆様の地域の情報や課題についていろいろお話をいただきました。今日の話を聞いて、まずは共通認識を抱いていただいて、興味のある方は各市町村のホームページ等でより詳しく情報を得ていただければと思います。次回の交流会は、浜通り全体で何ができるかということを、簡単に考えて発表いただければと思います。

　本日はありがとうございました。

（3）第2回陸前浜街道地域づくり交流会

日時：平成18年2月15日（水） 13:30～
場所：相馬商工会議所　第三会議室

第2回「陸前浜街道地域づくり交流会」次第

◎開会
◎交流会メンバー紹介
◎地域づくり交流会
　(1) 前回出された課題の整理・検討・シンポジウムで発言できるように整理
　(2) 『新時代の浜街道』連携推進協議会よりシンポジウムの代表パネリスト選出
◎閉会

■出席者（＊敬称略）
　いわき商工会議所　大平　均
　いわき青年会議所　四ツ倉　隆裕
　相馬商工会議所　新妻　良一
　原町商工会議所　酒井　和広
　宮城県商工会連合会　渡邊　豊
　亘理山元商工会　遊佐　宗之

■第2回陸前浜街道地域づくり交流会議事録

司会

第１回の話を受けて、この交流会を機会に浜街道全体で出来ることの具体的なアイデアを出していただければと思います。そのアイデアを練りながら最終的に方向性を探っていきたいと思います。

新妻

前回の問題を受けて会頭と話しましたが、根本的にこういった交流はまだ部分的なもので、宮城県との交流を含め、情報がスムーズに流れていないということがあります。事実、先般、対談ということで大平さんと話をしてみて、ひとつの行事をとってみても、何月に何処で何をしているか分からないということがあります。例えば、相馬では今の時期になると「観光いちご園」があります。これは山下のほうと共同で開催している訳ですが、そういう観光地の紹介の中で、互いの特性を理解しないことには交流の意味もいずれ消えてしまうのでは、と思います。そのあたりを問題として挙げたいと思います。

司会

この交流会の中で、新妻さんがおっしゃったように、新たに広域のイベントマップのようなものを作っていくということですね。

新妻

特にいわきと相馬が話し合うことはとても少ないです。同じ福島県でも距離があるために、いわきは茨城を見てしまい、相馬は宮城を意識してしまいます。

大平

福島県という大きな括りの交流はありますが、浜通りとしての交流は残念ながらありません。今、行っている浜通りキャンペーンも行政主体です。民間が交流するということは業界同士はありますが、業界を越えた形ではありません。

新妻
　道路事情の改善はかなり切実な願いです。経済圏で言えば、行政区分は相馬は福島県でありながら、宮城県相馬市といった感じです。現に、私個人の仕事も取引先の95%は宮城県です。

司会
　現状は、かなり地の利の問題があるということですね。

大平
　相馬のひとは遊びに行くのも仙台に行きます。今回の交流も県内という括りにこだわらずにやるしかないのではないでしょうか。

新妻
　この問題が解決できれば、かなり面白い取り組みができると思います。

遊佐
　スポットとしての産業交流は考えられますが、大きな面としての交流はやはり問題が大きいですね。

大平
　産業や道路といった面を外して考えるとすれば、海の食材では同じようなものになると思いますが、やはり食や歴史といった切り口から活動していくのが一番やりやすいのではないでしょうか。漁業は衰退ぎみですが、そういった部分はまだ叶うと思います。その中で、観光というよりも交流人口を増やしていくという取組みが落としどころになってくると思います。高速道路ができていないぶん、ゆっくりじっくり時間をかけて楽しめるという考え方もできる訳ですし。それをやるためには、歴史の中の地域の位置付けも必要になってくるでしょう。モノをつくるのではなく、ソフトの作り込みも必要だと思います。これから高齢化社会が進むなかで、学校や行政等をリタイヤして体をもてあましている高齢者も増えてきます。その人々を組み込んで、現在、県でもやっているような歴史ボランティアや、まちなか案内人等を組織していくのもいいのではないでしょうか。そしてその情報をパソコンで管理するシステムもつくる訳です。現状、既にある県との連携を図っていくこともできると思います。

司会
　総合的学習という学校教育の修学旅行でも、現在行っていますね。今までは子供が対象でしたが、まだまだやる気にあふれた団塊世代の方々からも協力を得たり、学びたいといった欲求を充たす措置を講じることができる訳ですね。

大平
　そういった方々に、働ける場を提供していくことにも繋がります。持っている知識を活かす場をつくる訳です。とりまとめは大変な作業になると思いますが。

司会
　私も課題を出した関係上、いろいろ考えたのが食と歴史でした。各市町村のホームページを見てみたのですが、いわきには「めひかりのすいとん鍋」というものがありました。そういったも

のからアプローチすれば、宮城で行っている牛タンを媒介にした味ロードのようなものができるのではないか、と思います。

新妻

相馬ではその点もふまえて、海のものを特化しています。できれば食なら食、観光地なら観光地のマップといった具合に制作できるのではないか、と思います。実は以前、道の駅にある国交省が管理している情報館のサイトを地元からも情報をアップロードできるようにして、総合的な情報ステーションとして利用できないかと伺ってみたのですが難しいようです。地元のひとでも分からないものがガイドブックに載っていたりと、現在、なかなかそのあたりのコンセンサスがうまく機能していないように感じます。

大平

そういうサイトを作っておいて、パスワードを入れることによって情報が入力できるシステムができると思うのですが。

司会

今回の交流会を好機に、そういったPCを使ったアピールができるといいですね。食をテーマにした交流が何かできるのではないでしょうか。何も無いと思っている地域も、実際に探せば何かはあると思います。そういうものが市場に出てブレイクするというケースもあります。

実は私も千葉の房総地域のあるホテルの仕事で名物料理が無くて困っていたとき、猟師の料理で、鰺をたたいて味噌を混ぜ、それを大葉で巻いて陶板の上で焼く「山河焼」という面白いものがある、と料理長から紹介を受けました。それを出してみたところ、大ブレイクしたという経験を持っています。それまでは地元の人も知らない猟師料理だったわけです。それがきっかけで、全ての房総のホテルでこの料理を出すようになっていしまいました。こういった名物料理は意外とあるもので、実はつくれるものなんです。もう一度、地元に眠っているものはないか探していただきたいと思います。食は裾野が広く、生産もあれば加工もある。販売もあれば飲食もあります。そういった意味では生産効率が非常にいいわけです。例えばいま、東京に行きますと駅弁コーナーに宮城県の食材によるテーマ駅弁があります。そんな括りで例えば浜街道といった味わいがあってもいいのではないでしょうか。昔、このあたりは東（あずま）海道と呼ばれていた訳ですし。

また、歴史といったプロジェクトも団塊の世代には効果的です。現役をリタイヤした人々の協力による、歩くまちなみの整備です。さらに祭というのも魅力です。祭は地域そのもの、一番の限定商品です。食と歴史と祭。このそれぞれを合わせ情報交流をするということが、大きな価値になると思います。今後、こういった交流の機会をもっと増やして、いいきっかけにしてもらえればいいのではないでしょうか。

遊佐

地元に大きな祭がなくても、それぞれの連携で魅力的な地域づくりができれば、まちおこしにつながると思います。祭は単に騒ぐだけのものではなく、その原点を見つめた形での展開ができればいいですね。

四ツ倉

先程、歴史という話がありましたが、歴史を紹介しながら海道を歩く楽しみを提供するマップ

があれば、興味を持ってくれる人がいるのではないでしょうか。もちろん、その他のいろいろな情報も入れてです。多岐に渡って、いわきの海を強力にアピールしていけると思います。

新妻

今は健康ブームです。相馬の隣町の新地にある加納山などは、登り下りが１時間半程度でできるということで、他地域から登山客が通年訪れます。そういった無理なく登れる山も紹介してはどうでしょうか。各市町村にそれらの観光資源は結構あるはずです。加納山では今年のお正月に山頂でアルプスホルンのコンサートなどを行ってNHKも取材に来ました。そんなPRの仕方もあります。原町では歩こう会と言って、いわきから電車で行って一日20km程の行程を決め、何回かに分けて目的地まで完歩するといった会もあるようです。

渡辺

前回、天童温泉の鍋まつりというお話がありましたが、食に関して言えば、何かを盛り上げるためのイベントが必要であると思います。また、私達が新時代の浜街道を伝えるにあたって、スポーツの交流会など子供達を巻き込んでいくことが大切です。実は宮城県では石巻と酒田間でサッカーの交流会を行っています。既に５～６回行っていますが、スポーツはイベントの持続性もあり、交流にはもってこいだと思います。宮城県には寿司街道というものもありますし、今後、浜街道においてもそういったものをつくっていければ面白い展開になるのではないでしょうか。

司会

子供という視点から言えば、金沢にある金沢21世紀美術館の館長がおっしゃっていた面白い試みがあります。行政と協力して、県内の小中学生を全部、無料で美術館に招待したそうです。現代美術というものは解釈が分かれる分野ですので、まず来てもらって、20以上もある展示室で現代美術と遊んでもらったそうです。そうすると子供達が親を連れてくる。そうして最初に自分が来たときに説明された内容を逆に説明して、親がかなり感心するそうです。来た子供達には美術館の無料券を配って、また来てもらう。そうすると必然的に親も入場料を払ってまた来るという仕組みです。そういった意味では、子供はこれからキーパーソンになってきます。前回も食育ということをお話しましたが、食育の中心は子供です。郷土の食をきちんと食べてもらい、学んでもらう。食というテーマからそちらへのアプローチもできるはずです。

大平
　子供のため、は広がるキーワードです。子供と聞くと、実施するほうにも別なパワーが生まれてくるように思います。

司会
　現在、子供の30～40%は朝ごはんを食べないそうです。食べたがらないのか、食べる環境にないのかは分かりませんが。

大平
　一緒に食事をできるのは、父親としては朝ごはんしかないのですが。それが無いということは、父親といつ会っているのでしょうか。

司会
　静岡県ではいま食育の第一段階として、朝ごはんを食べようキャンペーンを行っているようです。朝ごはんを食べないとすぐキレたり、授業中、ぼーっとしていたりすることが結構あるらしいです。それを予防する意味もあると思います。マーケティング的にはどうしでも可能性の多い団塊世代を狙いがちですが、次世代の子供たちに協力してもらうということは、非常にいい視点ではないでしょうか。

新妻
　相馬の商人が書き残した日記を読む会というのが毎月1回あって、その中から出て来た資料なのですが、「枡型」という形の道が残されています。これは騎馬武者に一気に駆け込まれないよう、道を戦略的にわざと曲げた名残りです。受け入れの体制があれば、そういった知識を持っている人たちも協力してくれると思います。こういった歴史的な話に興味のある人にはたまらないと思います。現在は、市の広報、各自治体でインフォメーションしているくらいです。

大平
　いわきにもそういった歴史の道研究会はあります。古代遺跡をまわる遊歩道や文学碑等の調査資料をまとめたツールも有料で販売しています。いわきに自生するきのこをまとめたツールは2回増刷しています。ものによっては人気もあるようです。

新妻
　歴史資料は多々あることはあるのですが、難しいのは人のオペレーションです。通年、観光客が訪れる京都のようにいつも開放できる訳ではありません。いいものがあっても、表にはなかなか公表されていないのが現状です。四国の八十八箇所参りではありませんが、例えばいわきから相馬まで観音像を巡るなど、カメラを趣味にされている方に向けて、期間を限定して行えばできるのかもしれません。

平山　（＊聴講）
　歴史の道研究会の話が出たのでお話させていただきます。現在、浜通り歴史の道研究会は活動しています。その集まりというのは、いわきはいわき支部があり、相馬は相馬といった形で４つ程です。それらの連携を図り、一般の方にいかに紹介していくかということで、今までは講演会や現地探訪会ということを行ってきましたが、先程、お話のあったように現役を退いた60～70歳

代の方々にちょっと声をかけてみると、結構、集まっていただきました。それで今お話にもありましたが、相馬のあまり知られていない部分について現地探訪しようと、いわきだけではなく浜街道の他地域にも公募してみました。バスで移動して何が良かったか感想を伺うと、説明を地元の方に聞きながら歩いたのが良かったという答えがかなりありました。機会がなければ浜通りに来ることが無かった、こういう機会があって良かった、という声がありました。

酒井

原町はあまり特徴がありません。強いて言えばカニでしょうか。浪江のほうでは今、太麺のヤキソバを売り出しています。が、実際には、なかなか飛び抜けたものがありません。これからの開発です。ただ、原町はスポーツが盛んでメセナ杯というサッカー大会を行っています。また原町は中学生が元気で、ここ10年程、吹奏楽が全国大会に出場しています。

司会

みなさんのお話の中で、方向性としては食と歴史と行事というものを、マップの制作やサイトの構築など、形はまだ分かりませんが、そういった共通項を浜通りで括っていくのが今後の形ではないかな、と思います。またそれに関して子供を巻き込んで、社会事業に近い形へ引き上げていくことになると思います。今回のこういう機会を大いに利用して、各地域で連携を図ってもらいたいと思います。

広報の点から見れば、浜街道全体で何かキャッチフレーズのようなものをつくるのもひとつの手だと思います。そういった部分も含め、今後皆さんで話し合っていかれてはいかがでしょうか。そしてそれをロードサイドのサインで展開したり、沿線のコンビニで地域振興事業ということで協力いただき、浜遊記のツールを置いてもらったりすることもできると思います。浜街道を訪れる方々が、常に今どこを歩いているのか意識していただかないと意味がないですので、キャッチフレーズやロゴタイプの整備は必要だと思います。そして最後に、情報交換ということが何より大切だと思います。今回の人のリンクを切らないよう、各地域で交流会を活発にしていただき、アイデアを相互に練りあって欲しいと思います。百聞は一見にしかずです。実際に現地を訪れて見て食べて泊まって感じて欲しいと思います。それが交流会の大きな目的ではないでしょうか。

4. 陸前浜街道地域の連携交流マップづくり

「陸前浜街道」を軸として宮城県と福島県の両県を跨いだ広い地域（「陸前浜街道地域」）内外に“新たな交流”を生み出すため、域内の各地域における公共施設や、首都圏における福島・宮城両県のアンテナショップなどの情報拠点で配布することを目的に、『新時代の浜街道』連携推進協議会の調整のもと、浜通り歴史の道研究会や地域内の商工団体等の民間団体との協働により、陸前浜街道地域の連携交流マップづくりをした。

●関連マップ内には「食」「歴史」「体験」「健康」「自然」のピクトも使いながら、各地域の観光資源を、写真もおりまぜながら表記した。また、歴史的街道としての、陸前浜街道（奥州街道含む）もも掲載した。

●地域の連携・交流を強く表現するために、実際の居住者や、交流している人による対談を４つ実施した。

対談1 **「ワールドカップイヤーにおける国際交流観光拠点としての役割」として以下2名**

Ｊヴィレッジ　東京電力女子サッカー部　マリーゼ事務局　山崎美由紀（楢葉町）
福島空港ビル株式会社　総務課　角田清貴（玉川村）

ワールドカップ時の整備が、“近さ”を考える好機になりました。

山崎「2002年のワールドカップ時にはこの『Jヴィレッジ』がアルゼンチン代表のキャンプ地ということもあり、広野ICまで高速道路が延びたことを始め交通網の整備が急速に進みました。実際にここを訪れた方たちにとっても、私たち地元の人間にとっても、“近さ”が開けた好機だったと思います」。
角田「そうですね。当時、アルゼンチン代表が札幌での試合へ向かう際に福島空港を利用したんですが、その時には空港全体で応援しよう、ということで館内と周辺にフラッグを掲げて歓迎しました。サポーターの方もいらっしゃったので、サービスの見直しなど、世界へ向けての取り組みを考えるいい機会にもなりましたね」。
山崎「今年はドイツ開催なので目立ったかたちでの取り組みがあるわけではないですが、2002年以降『Jヴィレッジ』に魅力を感じてくれる方、“ここでサッカーをしたい”とおっしゃってくれる方が東北以外にもたくさん増えました。そういう方々が身近な練習場や合宿所として利用してくれていることが喜びです。そして、実際に訪れた方々が、我々『マリーゼ』を応援していただくことを通じて、より福島の魅力に触れてもらえるようなイベントや案内を充実させていきたいと思っています」。

県を十字に走る大道路をもっと活かし、国際的な観光エリアへ

角田「高速道路を使えば首都圏から2、3時間という国内におけるアクセスの良さと、ソウル・上海から飛行機で2時間半という国際的なアクセスの良さの両方を、もっと活かしていけたらいいですね。特にいわきでは一年中ゴルフが楽しめたり、名湯も多い。那須高原へのアクセスもいい。今現在、福島空港は『Jヴィレッジ』まで車で1時間半ほどの距離で

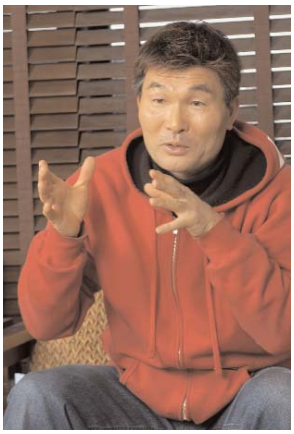
すが、あぶくま高原道路が平田ICから福島空港ICまで開通すれば、約1時間ほどに時間も短縮されます。浜通り―福島空港―関東のルートの利便性向上のためにもそこは早期実現を目指して頑張っていただきたいところですね」。
山崎「福島県は、良くも悪くもとても広いんですよね。高速道路に限らず一般道も、大きな道路が東西と南北を十字に走っているので、日本海側から太平洋側、首都圏から仙台や盛岡、という移動は比較的しやすく便利。ですが主だったスポット同士は離れているので、その距離感はやはりちょっと大きいかな、と思います」。
角田「その距離感も（特に西日本で）、福島県自体の知名度の低さの要因の一つになっていると思います。会津若松や喜多方、猪苗代という地名や存在は知っていても、“福島県”というイメージは希薄。全体としての知名度をもっと上げていくことが、これからの課題になっていくのではないでしょうか。その中で、福島空港は国内主要都市との路線のみならず、中部・関西国際空港等での乗り継ぎによる世界各国とのアクセスが可能で、県内外、海外との交流拠点としての役割もより重要になってくると思われます。今後、それらを踏まえ、点から線、線から面の観光アピールをしていくことで、本当の意味での国際観光エリアに育っていけるのでは、と思います」。（対談抜粋）

対談2「サーフタウンとしての都市間交流」として以下2名

宮城県サーフショップ連合会会長　遠藤廣明（仙台市）
原町市サーフツーリズム推進会議議長　杉山大一郎（南相馬市）

常にいい関係を築いてきました。

杉山「今や日本でも有数のサーフスポットとして全国から人が集まる北泉海岸ですが、僕ら原町と仙台のサーファーたちには特別な繋がりを感じますよね」。
遠藤「20年、30年前から長い交流が続いてますからね。常にいい友人であり、いいライバルでもあります」。
杉山「以前の浜通りにはショップがなかったから、ボードやグッズを買いにも仙台へ行ってたんです。仙台には上手い人たちもたくさんいたし、大会も開かれてましたから。我らローカルサーファーの憧れでしたよ」。



遠藤「いや、ポイントが豊かな浜通りこそ僕らの憧れでしたよ。すばらしいプロサーファーもたくさん育ってますし。そういう意味では、お互いに意識していたからこそ成長してこられたのかもしれませんね」。
杉山「全国大会も昨年は原町が会場で、そして今年は名取。全国規模の大会となると運営がかなり大変ですが、地域間で連携することで先達として得た知識や問題点を次回開催の糧にしてスキルを高めていけば、2年連続の同地開催は無理でも持ち回りで実現できるサイクルができてくるかもしれません」。
遠藤「そうですね。大会が可能な波のコンディションを保てる場所は全国でも稀ですから。それを過不足なく提供するには、人や環境の整

備をもっと頑張らなければ。今、我々の年代に求められているものはきっとそこだと思います」。

我々はいま、ワンランク上の環境づくりを考える時期に来ている。

杉山「仙台の取り組みの中で我々が一番影響を受けたことは、清掃をはじめとするボランティア活動が昔から当たり前に行われており、観光資源としての海の大切さを早い時期からアピールしていた点です。全国100万人のサーファーたちが、高速道路から直結のいい環境、かつフレンドリーな海である、ということを知っている。しかも、集まった人々を地元サーファーたちが快く受け入れて、新たなルールを築きつつ友好を結んでいる。これはすごいことだと思います」。
遠藤「しかし今、福島に学ぶところが非常に多いですよ。杉山さんが昨年行ったサーフカレッジなどいい機会づくりにも熱心だし、ことレスキュー体制についてはぜひ参考にしたいところです」。
杉山「海難レスキュー隊の整備は、それこそサーフカレッジが重要なきっかけだったんです。小さい子どもにとって安全の確保は欠かせないですから。それに、地元のサーファーを隊員に任命することによって、彼らの経験を活かした実践的なレスキューが行える。しかもそれで給与を得られることで、実務時間以外の時間をサーフ技術の向上にあてることができる。サーフィンが仕事になる町なんだ、ってことを実証したかったという思いもありました」。
遠藤「サーフィンに必要なのは、実力と経験、そして人間性。いいライディングを見せるサーファーがレスキューや清掃に携わり、ヒーローとしての目標になることが、さらにサーフィンの裾野を広げる可能性に繋がりますよ」。

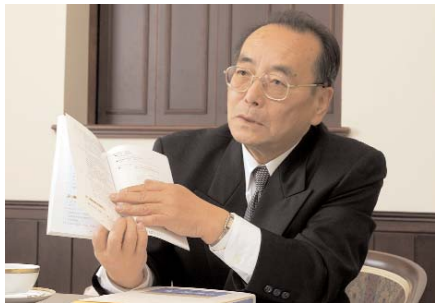
杉山「ピア（海の橋）の建設も実現したいですね。カリフォルニアなどではすでに実施されていますが、サーフポイントの優良化はもちろん、海の安全や環境保全にも役立つし、ホスピタリティに眼を向けた施設にもできる。陸地の道はこれだけ整備され、僕らは交流という大きな恩恵を受けた。今度はそれを地域の発展のために還元していくことも考えなくては」。（対談抜粋）

対談3 「地域資源の発掘と新時代のツーリズム」として以下2名

いわき地域学會代表　古代磐城歴史公園の会会長　浜通り歴史の道研究会監事　山名隆弘（いわき市）
宮城大学　事業構想学部　事業計画学科　助教授　宮原育子（仙台市）

地域住民から興った活動が実を結び、新たな目標を生んでいる好例。

山名「私たちが『古代磐城歴史公園　歴史の道探訪マップ』に取り組むきっかけとなったのは、4年前のことでした。根岸遺跡と夏井廃寺という2つの遺跡の発掘調査がほぼ完了し、国指定の史跡になりうる、という調査結果が文化庁から通達されたんです。それを受けて、地域市民の手で史跡指定への促進運動をしようという機運が盛り上がりまして。その当初の目的が達成した後も、史跡を中心とした歴史公園の整備という新たな目標もあったので、活動は今も続いています。このマップでは、約70ヵ所の神社・仏閣や遺跡を3つのサイクリングコースで巡ることができます。これは、市民が実際に自分でルートを巡りながら考えて作成したものなんですよ。昨年作成したガイドブックも、地域の人々が実際に足で歩いて、自分の言葉でしたためたも



の。史跡や歴史だけでなく、地形や食文化、植物相といった背景も含めて楽しめるように作ったんです」。
宮原「これだけの魅力的な史跡がいわきに存在する、ということにまず驚きました。そしてそれは、観光資源として考えるうえで数々の東北の歴史遺産が埋もれている、ということの証でもあると思うんです。東北にも注目すべき文化と歴史の跡があるのに、なぜ京都や奈良と同じように位置づけられないのか。地域の価値を浮かび上がらせる作業が東北では行われてこなかったことも要因だと思うんです。そういう意味では、このいわきの取り組みはとても意義のある、まさに今必要な活動だと思います。しかも暮らしに密接したスタイルだということが大切だし、他の地域も見習っていけるモデルタイプといえるでしょう」。

近隣の地域や異分野との連携が、新たな魅力を持った観光拠点づくりの鍵に。

山名「外へと向ける眼、また外から向けられる眼、ということを、これからは強く意識しなければならんと思っているんです。ガイドブックを制作した時にも感じたことですが、さまざまな識者の方々のいわきや他の地域に対する見解や評価を戴くことで、我々自身にもさまざまな新しい考え方が生まれたり、気づかなかったことへの視点が芽生えたりするものですから」。
宮原「それには、新たな時代を担う子どもたちへ向けての発信も大事ですよね。地元の子どもたちはもちろん、色んな地域の子どもたちにこの自然や歴史文化に楽しく触れてもらえるある種の公園であり、博物館でもあるような、野外教育施設のような活用の仕方も充分といった…」。
山名「それには、宿泊施設などの充実を考える必要もありますね。残念ながら今のいわきは、ツーリズムを実現するだけの受け入れ態勢が不十分だと感じています。ただ、インフラとしての道路事情はとても整備されているいわきですから、例えば近隣の地域と連携して、数市数町を周遊するようなプランを立てるのもひとつの手として考えられるかと思います」。
宮原「やはり横の連携を強めた宮城県の鳴子温泉が、私の中でも印象深い事例です。鳴子も以前は温泉街だけが観光集客の拠点だったんですね。しかし最近では、近隣の方々と密接な関係を築くことで新たな魅力を生み出すことに成功しています。皆さんは“鳴子スタイル”と呼んでいますが、温泉プラス農業、あるいはグリーンツーリズム。そういうものを組み合わせて、収穫や成長の喜びを求めてお客さんがリピーターになってくれたり、口コミを広げてくれたりする。今までなら関係のなかった地域や分野の人と連携することで、多彩な魅力を持った観光地となることができる、という可能性を考えさせたいい事例だと思います」。
（対談抜粋）

対談4 「連携交流による新観光資源の創造」として以下2名

相馬市商工会議所　副会頭　新妻良一（相馬市）
いわき商工会議所　観光サービス部会長　大平均（いわき市）

街全体の活性化のために、内外両方の取り組みが必要です。

新妻「常磐線の沿線地域といえば極端な話、昔は何もなかったところなんです。近代になって原

子力発電所やJヴィレッジができ、ようやく上向きな発展を遂げつつある。しかし幸が不幸か、相馬は歴史があってお城があるゆえに、行政や中央資本が行う近年の事業振興から取り残されてしまった感があるんです。常磐線自体、相馬の町や史跡に煙害が及ばないように迂回して敷かれた路線ですからね」。
大平「いわきもそうです。港の近くに通したら魚が逃げてしまう、ということで。守るべきものを守った信念は今でも評価できる点ですが、ある意味、旧態依然の体制を許してしまったことが、現在のいわきの町から元気が失われつつある遠い要因であることも事実でしょう。夏のいわきの5地区で行われる「いわきおどり」の参加者が合計で約2万人いて見学者を含めると8万～9万人の集客があるわけです。しかし、地元の商店街はこの大きな集客に対して消極的なんですね。もっと楽しんでお金を使ってもらえる祭りづくりをすれば、地元も潤い、しかもイベント自体も活性化されるはずなんですが」。
新妻「全国的に有名な『野馬追』、これも知名度が高いのは発祥の地である相馬ですが、実際に当時の殿様が演習の拠点にしたのは、広大な土地のある原町なんですね。その歴史と現在の状況を併せて考えても、野馬追は、相馬中村に始まり鹿島、原町、小高、浪江まで連なる一大行事なわけです。しかしそれだけの規模、総体費用の額にもかかわらず、観光事業としての結果が全く伴っていないのが今の現実。せっかく野馬追を観に来てくれる観光客がいるのに、留まって何かを楽しませる、ひいてはお金を使ってもらえる魅力に欠けているんです。お互い、そこを地域ぐるみで前向きに考えないといけないですね」。

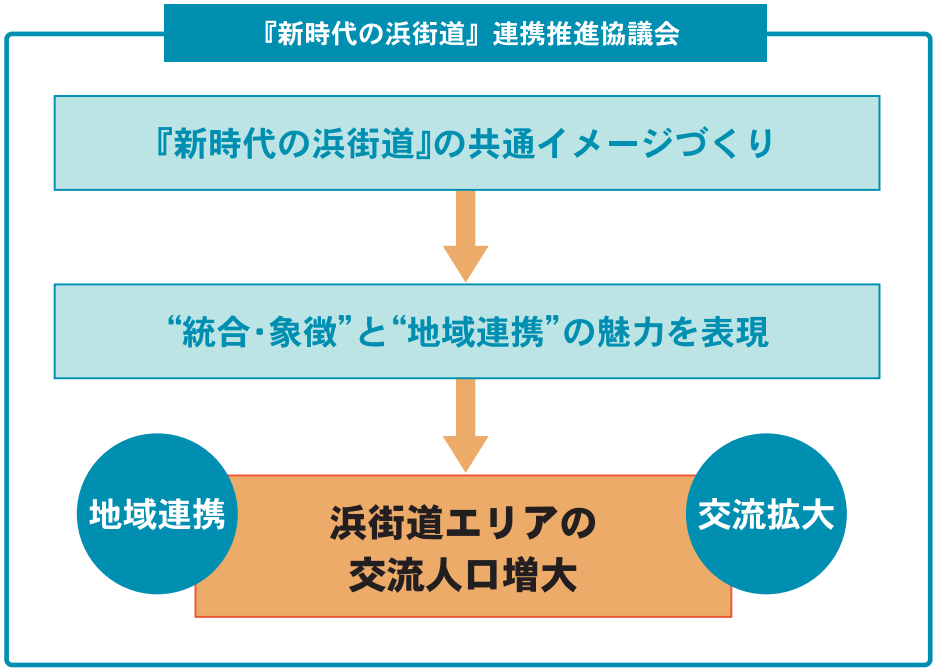
人を育て、地域間の連携と交流をつくる。そしてそれを継続していくことが大切です。

大平「アクセスも整い、観光施設など箱モノもある程度揃った。これからは人を育てていかないと。人と人の繋がり、そして浜通り全体としての連携を強めて、自分たちの中からビジョンを生み出して行政に働きかけ、それぞれの地域に合った施策を導き出すという自主性が必要です」。
新妻「相馬といわきは浜街道の両の拠点として、自分たちの町だけではなく間にある市町村全てを含めた浜街道の活性化を目標にする必要がありますよね。相馬の眼は3割は福島、7割は宮城県を見ていて、いわきの眼は半分は福島、半分は茨城～首都圏を見ている。お互いに県境の地で、ある意味客観性を持って内と外を見る特性を持っている。そのリベラルな視点を活かし、漁業、施設、イベント、史跡というさまざまな要素の繋がりを作って、それを継続していくことが大切」。
大平「常磐道についても、この先どう発展するのかを見据え、またその要素に頼らずとも今できることは何か、ということを考えなくては」。
新妻「高速道路が新たに開通していった時、例えばインターチェンジやサービスエリアひとつをとっても、単にその地名を付けるのではなく、もっと魅力的かつ地域性を感じさせる呼称が考えられないかな、なんてことも考えています」。
大平「それは面白いですね。そういう、面白いことを手放しで楽しめる発想力や行動力を持った人を育てることが、これからの我々の役目なんでしょうね」。（対談抜粋）

5．『新時代の浜街道』のシンボルマークの作成

平成17年度地域連携支援ソフト事業「『新時代の浜街道』地域連携・交流拡大事業～陸前浜街道の"新たな交流"～」の一環として陸前浜街道地域の地域連携を体現し、連携推進母体の取組で使用するシンボルマークを作成し、陸前浜街道地域の連携交流マップで記載したほか、平成18年3月5日に開催の地域連携シンポジウムにて発表。

『新時代の浜街道』シンボルマークは、陸前浜街道沿線地域において、県境を越えた地域交流を促進し、「陸前浜街道の"新たな交流"」の創出とそれを活用する機運を、『新時代の浜街道』という共通のイメージとして高め、交流人口の増大を図ることによる当地域の活性化に取り組む「『新時代の浜街道』連携推進協議会」の活動と、今後の展開の象徴とする。



『新時代の浜街道』シンボルマークを使用するパンフレット、ポスター、POPその他のデザイン制作を行う際に、活動のイメージを損ねたり、誤ったイメージを与えることのないようシンボルマークとあわせて「『新時代の浜街道』シンボルマークデザイン使用マニュアル」を作成。

6. 地域連携シンポジウムの開催

■開催主旨

「陸前浜街道地域」において、街道周辺のより拡大した広い地域で連携を促進し、その機運を『新時代の浜街道』として地域全体で高める”新たな交流”の創出・活用するため、地域連携シンポジウムを開催した。

■開催日時／平成18年 3月5日（日）

13：00～16：00（12：30～受付）

■開催場所／相馬市総合福祉センター はまなす館 多目的ホール

■シンポジウムプログラム

12：30～13：00　受付・入場開始

13：00～13：05　**開会挨拶**
国土交通省国土計画局参事官付専門調査官　星野 ふさ子

13：05～13：55　**基調講演**
テーマ『地域づくりにおける街道の役割――浜街道の歴史、現在、そして未来―』
福島大学経済経営学類教授　奥山 修司

13：55～14：35　**活動事例報告**
「サーフポイントへつづく道　交流で広がる原町市サーフツーリズム」
福島県南相馬市　原町市サーフツーリズム推進会議議長　杉山 大一郎

「やまもと・わたり田園空間博物館より暮らし体験やまちづくり活動の提言」
宮城県山元町　野外ぐるりん友の会　事務局長　石川 勝行

14：35～14：45　休憩

14：45～15：55　**パネルディスカッション 「街道から始まる地域づくり」**
コーディネーター
奥山　修司　福島大学経済経営学類教授
パネリスト
奥本　英樹（原町市サーフツーリズム推進会議オブザーバー）
小椋　唯一（福島県観光連盟企画委員会教育旅行専門部会幹事長）
佐々木吉晴（福島県景観アドバイザー）
渡邊　由香（(財）南相馬市文化振興事業団事業企画担当）
大平　　均（いわき商工会議所 観光サービス業部会長）

15：55　**シンボルマークの発表及び閉会挨拶**
『新時代の浜街道』連携推進協議会　会長　荒井 宏美

16：00　全体終了

■基調講演者

奥山 修司
福島大学経済経営学類教授
『地域づくりにおける街道の役割―浜街道の歴史、現在、そして未来―』

プロフィール
昭和33年、和歌山生まれ、岡山育ち。
早稲田大学大学院商学研究科博士課程中退。専攻は、マネジメント会計および取引デザインで、経済組織の戦略や管理を支援する会計情報の研究で、企業だけでなく自治体を含む経済組織に共通するマネジメント課題の解決に関心を持っている。発明新案として、新多目的交通システム「おだかｅ－まちタクシー」（低定額制の電話予約による乗合方式でドア・ツー・ドア運行するデマンド交通システム）、小収店事業(行政に代わって家庭から出るごみを仕入れて資源に変えて農家や回収事業者に販売するビジネスモデル)、給食JITシステム（地元の農家や納入業者と連携して地消地産率を飛躍的に高めることを可能にする給食のビジネスモデル）などがある。
委員 等
福島県運輸支局公共交通アドバイザー会議座長、福島県観光振興長期計画委員長　、常磐自動車道ハイウェイミーティング座長、福島県エコビジネス研究会顧問、全国デマンド交通システム導入機関連絡協議会顧問、岩手県出資等法人運営評価委員会委員長　など

■活動事例報告者

「サーフポイントへつづく道 交流で広がる原町市サーフツーリズム」
福島県南相馬市　原町市サーフツーリズム推進会議議長　杉山 大一郎

福島県南相馬市の北泉海岸は年間7万人のサーファーが訪れる人気スポットになっている。同市においては、海を活用した地域経済活性化プラン「原町市サーフツーリズム」が提唱され、’03年6月より推進会議のもと、将来の国際的サーフタウン創造に向けた、さまざまな取組みが行われている。2004年には「全日本サーフィン選手権大会」も誘致・実施された。陸前浜街道地域の連携・交流拡大も含め、これまでの取組みを紹介した。
※原町市は2006年1月1日、合併により南相馬市と改名。

「やまもと・わたり田園空間博物館より暮らし体験やまちづくり活動の提言」
宮城県山元町　野外ぐるりん友の会　事務局長　石川 勝行

山元町は宮城県の最南端に位置し、文化と自然が調和した町である。同町では総合計画に基づいた重点プロジェクトを推進するために、「やまもと・わたり田園空間博物館」活動により、地域住民が主体的に地域資源を活用し歴史教育や都市と農村の交流、自然観察、体験活動を展開する取組みを進めている。都市間交流も含め、地域交流の視点で施設の利活用の認識を深め、陸前浜街道地域の連携・交流拡大に繋がる可能性のある取組みを紹介した。

■パネルディスカッション「街道から始まる地域づくり」パネリスト

奥本 英樹
福島大学経済経営学類助教授
原町市サーフツーリズム推進会議オブザーバー

プロフィール
昭和42年、大阪府高槻市生まれ。早稲田大学大学院商学研究科博士課程卒業。専門は財務管理論で、第3セクター鉄道会社における財務的特徴と経営戦略『経営分析研究』、地方銀行のコスト効率性に関する予備的考察、石塚博司編『会計情報の現代的役割』などの業績がある他、共著として『地域産業の挑戦』八朔社、『ビジネス・ファイナンス論』学文社も著している。地域産業振興の観点から原町市サーフツーリズム推進会議のオブザーバーとして、市民、行政、観光関係者などが連携し、海への来訪者を中心街に呼び寄せる「ビーチマネジメント」創出を提案している。地域の観光資源を生かしたまちづくり、理想的な地域内モビリティの実現などに邁進。

小椋 唯一
福島県観光連盟企画委員会教育旅行専門部会幹事長
福島県ふるさと塾地域興しマイスター
福島県ツーリズムガイド連絡協議会委員
福島空港利用促進協議会誘客部会委員
国土交通省「観光カリスマ百選」認定
東北経済連合会東北広域教育旅行誘致委員会幹事長

プロフィール
昭和16年、石川県金沢市生まれ。昭和45年、株式会社ヴィラ・イナワシロ入社以来、36年にわたり教育旅行誘致の活動を行う中、教育旅行誘致には地域社会や行政との連携がかかせないことを痛感し、平成9年同社常務取締役を退任後は、民間と行政の橋渡し役として活動。「教育旅行専門部会」「会津まちじまん企画」「いなわしろ伝保人」「ＡＴＩ」「いなわしろ体験学習推進協議会」など新規事業立ち上げ多数。著作に、専門書「中小ホテル旅館の直販戦略」柴田書店発行、学校用旅行マニュアル「磐梯高原 校外学習資料集」第1集～第8集(社)日本移動教室協会発行、「大陸横断バス 旅の終わりはカトマンズ」講談社発行、「いなわしろ見聞録」いなわしろ体験学習推進協議会発行、などがある。

佐々木 吉晴
いわき市立美術館学芸課長
福島県景観アドバイザー
いわき明星大学非常勤講師

プロフィール
昭和31年、宮城県塩釜市生まれ。東北大学文学部哲学科美学西洋美術史専攻卒

業。1998年に磐越道が全通した際に、いわきから新潟までの美術館をルート化した「ばんえつアートライン計画」があり、そのときの発案者である。シンポジウムでは、交流拡大による沿線各地の拠点施設を結んだ、大きなイメージの具現化策と地域メリットの向上策について、また、福島県景観アドバイザーの見地から、陸前浜街道地域の景観づくり（保全・改善）に関しても言及。専門は、パブリックアート、博物館学、西洋近代美術、現代美術。

渡邊 由香

（財）南相馬市文化振興事業団 事業企画担当　宮城県名取市環境審議会委員
文化経済学会<日本>会員　宮城県名取市在住（浜街道通勤利用）

プロフィール

昭和40年、宮城県仙台市生まれ。平成9年に開学した「宮城大学事業構想学部事業計画学科」に入学。在学中に地元名取市文化会館を拠点とした市民地域活動を行い、文化事業を企画・制作。卒業後、財団法人原町市文化振興事業団職員として「原町市民文化会館」の運営に従事。市民参加型ホールを目指し、事業企画・制作を担当。次世代の育成事業「ゆめはっとジュニア・ウインド・オーケストラ」を設立。一流の演奏家による指導体制など高いレベルを目指す一方、地元の音楽愛好家の運営参画など地域密着事業として注目を集める。今年1月に原町市が合併し南相馬市になったことに伴い、会館名も南相馬市民文化会館に変更。広域を対象としたマーケティングを通じて公共ホールのあり方から「まちづくり」を考察。

大平　均

いわき商工会議所 観光サービス業部会長

今回のシンポジウムに先立ち行われた、陸前浜街道地域づくり交流会から選出されたパネリスト。地域連携を進めるうえでの課題について、実際に陸前浜街道地域で生活するものとして交流会を代表し、また地域を代表して発言を行う。

■シンポジウム全体の議事録

●開会挨拶

国土交通省国土計画局参事官付専門調査官　星野 ふさ子

司会

只今より「地域連携シンポジウム～陸前浜街道の新たな交流～」を始めさせて頂きます。私、本日の司会を務めさせて頂きます高橋純子でございます。皆様どうぞよろしくお願いいたします。それでは開会に当たりまして、国土交通省国土計画局参事官付　星野ふさ子よりご挨拶を申し上げます。宜しくお願いいたします。

星野ふさ子

皆様こんにちは。国土交通省国土計画局の星野でございます。本日は「地域連携シンポジウム～陸前浜街道の“新たな交流”～」を開催いたしましたところ、ご多用中にもかかわらず御出席いただきまして誠にありがとうございました。主催者であります『新時代の浜街道』連携推進協議会 と国土交通省国土計画局を代表いたしましてご挨拶申し上げます。

まず、はじめに、私ども国土計画局の仕事を一言で申しますと、国土政策上の様々な課題に対する処方箋を示し、国民が安心して生活し得る国土の将来像と、豊かでゆとりある国民生活のあるべき姿、言わば国土の将来のビジョンを提示することと言えます。現在このビジョンとされているものが「二十一世紀の国土のグランドデザイン」でございます。この計画では、個性的で魅力的な地域づくりを実現するには、行政のみならず、地域住民やボランティア団体、民間企業等の多様な主体の参加により展開していくことや、既存の行政単位の枠を超えた広域的な連携が重要であるとしています。このような参加と連携による国土づくり、地域づくりを効果的に推進するために、国土交通省国土計画局は地域連携ソフト事業を展開しております。

『新時代の浜街道』地域連携・交流拡大事業は、県際地域における地域連携による新たな地域発展の機会の創出に取り組む初動期の活動事例として、本日のシンポジウムを国土交通省が支援し、『新時代の浜街道』連携推進協議会 との共同で開催することとなりました。

さて、当地、阿武隈山脈と太平洋に挟まれた宮城県南部の浜通り地域から福島県東部の浜通り地域にわたる一帯は、奈良・平安期の官道の由緒を誇る陸前浜街道によりつながった温暖な気候と豊かな自然に恵まれた地域です。このたび、福島県をはじめ地元自治体、民間団体から、街道沿線周辺において、地域資源の掘り起こしと地域交流を促進し、陸前浜街道の“新たな交流”の創出とそれを活用する気運を『新時代の浜街道』という共通のイメージとして高め、交流人口の増大をはかることによる陸前浜街道地域の活性化を推進することが重要である、との提案がされました。

昨年末より推進協議会では、地域の方々のご参加、ご協力をいただきながら、陸前浜街道地域づくり交流会の開催や地元研究会、商工団体との協働による連携交流マップづくりなど、地域の交流・連携を促進するための活動を行ってきたと聞いています。特に、二度にわたって開催された交流会では参加者による活発な意見交換がなされたようです。これらの取組に引き続いて、本日、陸前浜街道の“新たな交流”をテーマとしたシンポジウムにおいて、皆様と共にあらためて陸前浜街道地域の活性化について考え、新時代の浜街道として地域連携を促進し交流を拡大する活動の成果を地域内外に発信していきたいと存じます。

さて、冒頭、「二十一世紀の国土のグランドデザイン」のことを申し上げましたが、実は、その次の計画作りの作業が既にスタートしております。昨年7月には、昭和37年以来「グランドデザイン」まで5回にわたって作成されてきた全国総合開発計画の根拠法である国土総合開発法が

抜本的に改正され、新たに国土形成計画法が成立し、今後は国土形成計画を策定することとされました。改正のポイントは2つありまして、1つは「開発中心型」から「成熟社会型」へ計画の変換をしたこと。もう1つは国土形成計画を「全国計画」と「広域地方計画」の2本立てにより構成したことでございます。今後、「全国計画」については平成19年中頃を目途に、「広域地方計画」についてはその1年後を目途に策定することと予定しております。現在、国土交通省国土計画局のホームページでは、「国土形成計画策定のためのウェブサイト」を開設しておりますので是非アクセスしてみてください。

最後になりましたが、本日の基調講演をいただく奥山修司先生をはじめ、パネルディスカッションなどに登壇の方々には大変お忙しい中出演を賜り、この機会をお借りして厚くお礼申し上げます。また、本日のシンポジウムの開催に当たり、格別のご協力をいただいた関係の方々には深く感謝の意を表します。国土交通省といたしましては、今回の当地域が取り組んだ『新時代の浜街道』として地域連携を促進し、交流を拡大する活動が、これを契機として更に発展するよう祈念申し上げます。

それでは会場の皆様におかれましては、最後までごゆっくりとシンポジウムをお楽しみ下さい。以上、開会のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

●基調講演

福島大学経済経営学類教授　奥山 修司

「地域づくりにおける街道の役割―浜街道の歴史、現在、そして未来」

こんにちは。福島大学の奥山でございます。私は仕事柄、浜街道に頻繁に伺わせていただいております。年度末の忙しい日曜日ですが、本日はちょっとの間、私の講演を聞いていただき、少しでも地域づくりに役立てば幸いに存じます。私は、こういったお話の場を頂戴する場合には、必ず実践をして行きましょう、という姿勢で関わらせていただいております。ですので、このような講演会で言いっ放しというのは本意ではございませんが、今日のテーマである、地域づくりにおいてもう一度、「道」から考えていくというのは様々な事業を展開するうえで、非常に有意義なことだと考えておりますので、本日がその機会になればと思います。よろしくお願いいたします。

最近、「道」は「道の駅」にもありますように、単なる「道」から「駅」へ、と歴史回帰しております。宮城県から勿来の関を越えた浜全体、この陸前浜街道におきましても、それぞれの「道」を中心に「町」が発展していくという原点に戻り、その考え方をこれからの地域づくり及び町づくりに生かして行くことが最もオーソドックスな方法ではないかと考えております。何でも「道」の名の由来は1メートルの幅員からきているそうです。どんな「道」でも「道」には必ず人が通ります。

昔の「道」は、朝廷から太宰府へと西に延びる「道」が重点的に整備され、それ以外、つまり東に伸びる「道」は海の道、山の道ということで、それに東がついて「東海道」と呼ばれました。日本の「道」は、西日本を中心に形成されていたということでございます。これは基本的には、人が通る「道」という形での大きな意味を持っていましたが、時代と共に「道」の機能も移り変わり、馬が通るということが非常に重要な意味を持つようになりました。もともと「駅」は字のごとく、馬を換える場所としてつくられました。私も専門家でないのですが、資料によれば「駅」と「駅」との間はだいたい三十里で、現在で言うとおよそ15km～16km間隔だったそうです。人が通る道から馬と人、やがて馬車という形で車、荷台が通るということが「道」の重要な機能になって来た訳です。長い旅の中で、馬を換えるために「駅」ができ、そこに馬の世話や食事を準備する人、また現在で言うところの郵便、つまり駅伝を生業とする人々等が、この「駅」を中心に生活を営み始め、やがてそこに住環境というものが整備されてきました。「宿」（シュク）もそのひとつです。その昔、「宿」はほとんど、そこを納める幕府に主導権がありました。宿主は食べる米や、様々な物を持ち込んで「宿」を営ませてもらっていた訳です。泊まる側がお金を払う現在のような「宿」は歴史的には近年だということです。「宿」のある地域は馬を換えるだけでなく、人が交わり、物が交わり、情報が交わるといった、自然発生的に交易の機能も発達し、非常に活気を呈していました。

「道」を中心に、地域に賑わいが呈する町づくりでは、人や馬車が運ぶ荷物、それを交換する場、またそれに伴い、税等の様々な取引を管理していく藩の出先、こういった形で地域の核になるものが自然に生まれ育っていく土壌があった訳です。

話を現在に戻し、自動車が通る「道」について考えてみたいと思います。歴史的に浅いこの

「道」ですが、車が通るということに関して、その駅づくり、または賑わいづくりを考えますと、今までの馬車を中心としたスピードとは全く違う町づくり、街道づくりが必要になって参ります。おかしな話ですが、例えば今都会で「美味しいパンがあるよ」「美味しい洋菓子があるよ」、こういう情報が入りますと美味しいパンとかお菓子に釣られて人間は一時間動くそうです。高速道路だと約100km範囲であれば車でわざわざ移動する。もっと極端なケースだと「美味しい蕎麦があるよ」と言われれば、300km動く人も居るというぐらい、アンケートでは、「食」を中心に、つまり自分が得たい物、いわゆる取引や交易する物がそこにあるよ、という情報が伝わると、車で移動する。つまり車が通る環境がしっかり整備されている所であれば、そういった情報に釣られて1時間、3時間かけて全く違う地域の方々が来て交易をするというのが、この車社会の「道」の最大の魅力であり、怖さでもあります。逆に言えば、あっという間に人が吸い上げられていくのが現在の「道」だということになります。これをストローで吸われるのに見立て「ストロー現象」と言っています。

全国、おそらく東京を通って伸びた地域と、逆に人口減等、様々な経済活動が停滞した地域。現状、どちらが多いのか。私も正確に数値は分かりませんが、むしろ道を整備した方が地域が疲弊するという可能性が常に付いて回る、これが現代の車社会における「道」を中心にした地域づくりの怖さなのかもしれません。

そして今、この車を中心とした「道」づくりも既に時代の遅れを取って来ています。現代における「道」の意味とは、何処から何処を結ぶというよりは、何処から来た人達にとって、どのように機能する「道」であるべきなのか、あるいは地域をつくっていくのか、ということを考えていかなくてはなりません。驚く程のスピードで人が移っているのが今の時代なのです。

皆さんもご承知かも知れませんが、極端な例を挙げたいと思います。北海道のニセコの隣に倶知安町という町がございますが、ここに今、スキー客をはじめ、次年度はゴルフ場も買収されましたのでゴルフ場にも多くのオーストラリア人、またニュージーランドの人々が観光で訪れております。初年度の2000年は、たかだか314人程度しかオーストラリアからニセコの、その倶知安町にあるスキー場に来なかったそうです。ところが満足度を調べますと、驚くことに9割近い人々が非常に満足をして帰国している。314人しか来てないにも関わらず、宿泊数は約2900。つまり9泊近くをしている訳です。2004年の数字では驚くことに4201人、宿泊数は44813泊。来る人は10倍に増え連泊数も10日を過ぎて延びております。昨年が7000人と伺いました。おそらく今年は冬だけで1万人を超える人々がオーストラリアから来日し、スキーをしながらゆったりと時間をその地域で過ごしている。10万泊の宿泊をしてもらえる時代になっている訳です。びっくりするような数字があっと言う間の日数、年数でそういう地域を作っているということです。

ここでひとつ大切なのが、我々日本人はどうしても東西の流通、つまりヨーロッパやアメリカを見ながら北半球を中心に考えてしまいがちですが、先程の例のように、オーストラリアの人々にとって、時差のほとんどない日本は、まさに適地です。北半球と南半球で時間軸を取りますと、1時間とか2時間の時差で生活できる。つまり今の我々のネット社会の中で、ビジネスを長期に休

みながら、情報だけは途切れなく得たいと思った時に、滑りながらであろうと何であろうとリアルタイムで情報をやり取りしながら、ゆったりとした時間の中で上質な雪質でスキーができるということは、この上ないサービスを提供できるという、非常な武器になる訳です。

この意味で「道」というものを考えると、今まで車という視点から「道」づくりが行われていたものが、例えば飛行機等の様々な組み合わせも含め、どのようにこの地域の交易に参加していただくのか、という視点で考えていくことが非常に重要だと思います。一旦途切れても、その空間を飛び越えて来られる人達の満足をどのように高めて行くのか、という点から「道」というものをもう一度、考え直す必要があるのではないか、と思っております。

浜通りに関しましては、私も常磐自動車道のハイウェイミーティングで、数年にわたり高速道路を繋げる役目を仰せつかって参りました。まもなく発表になると思いますが、非常な勢いでこの高速道路が整備されることが決定した、ということを伺っております。しかし万々歳かな、と言うと、先程お話したように、既にそれを超えるスピード時代に入っています。いつまでたっても、地元の方々が車で線がつながっていることを大事にしようとしていると、あっと言う間に地域間競争で負けてしまいます。おそらく、高速道路ができる、だから工業団地も沢山出来るのではないかという発想で、工業団地への「道」づくりから地域づくりを考えていると、大変な間違いを侵すことになってしまいます。それは此所だけでなく、他の地域も同じです。現在の日本の工業団地の誘致は、悪い言い方ですが、税金の値引き競争です。税金を減らしてもらう分、様々なサポートをするから工場を誘致させてもらいたいと、お百度参りの様に三顧の礼で、長い間47都道府県が同じ競争を繰り広げている。先程のオーストラリア、ニュージーランドの例のように、もうそろそろ国内から誘致するより海外に眼を向けたほうがいいのでは、と感じています。事実、今、中国のトップクラスの企業では日本に工場を持ってきたいところがあるようです。中国だけで世界競争に勝とうと考えている中国のビジネスマンは少なく、やはり世界に期して良いビジネスをしていくためにはどうしても日本と強いパートナーシップを作りたい。そのためには研究所を中国に付帯するより日本に工場と研究所を付帯して、ここで世界に期する新しいビジネスチャンスを作りたい、という方々がかなりいらっしゃるようです。私も中国に頻繁に伺い痛切に感じています。

ところが今、中国で特に日本の行政の方々が何をしているかと言うと、東北の高価な果物を中国のお金持ちに食べてもらう、と言った農産物を中心とした逆輸出的な施策です。これはもちろん大切なのですが、私はもう少し違った視点で、そろそろ本当の意味で戦略的にこの地域の付加価値をどういう交易で高めていくのか、ということを他の地域と違った取り組みで考えていくべきではないか、と思います。これは私だけの考えではありますが。いずれにしろ、今の時代として、ほとんど繋がっていないようなことを、利の通った話として地域でそれが受け入れられ、将来本当に地域の価値を高めるのかどうか分からない整備が多く実施されていくという危惧は、もう一度原点に返って考える意味があるのではないか、と思います。その意味でも、今日の「道」を中心に町が賑わいを呈していくという地域づくりを、いま一度考えることは、非常に良いテーマだと感じております。

ところで皆様、「道」を最大限に活かした政治家は誰か御存じでしょうか。私は間違いなく徳川家康の参勤交代という制度だと思います。参勤交代は「道」というものをフルに活用して町づくり、地域づくりをしっかりと政策的にやり切ったひとつの立派な政策だったと思っております。都に参じ一年間勤め上げ、実は妻子供と交代で江戸と地元を行き来していた訳ですが、ほとんど妻子は江戸屋敷にて、それぞれの田舎を懐かしむ庭等々、非常に多くの投資をしました。それによって江戸が一気に賑わいを呈していった訳です。当初人口30万人足らずの江戸が300万人を超える大都市に生まれ変わるスピードというのは、この参勤交代という制度が非常に効いていたと言われております。そうしますと、今の時代の参勤交代というのはどのように実現できるのか。「道」を使って、それぞれの交流交易をどのように発展できるのか。家康の参勤交代は人を介しての交流でございました。しかも強制的に制度化した仕組みの中で無理矢理に交代させた訳です。

相馬中村藩の藩主は、文献では中通りに抜けて須賀川に陣を張り、そこから江戸に上る道を多用していたと書かれておりますが、この浜街道も使いました。そのため多くの付き人等、一緒に歩いて江戸に向かう人達の宿泊場所や馬の世話をする人々、大きな経済効果がその地域に落とされた訳です。政府の政策という強制でなくとも、地域にはやはり馬を換える「駅」として、非常に賑わった地域が多くございます。例えば、塩の道で栄えた町のひとつ、中部山脈から日本海沿いへ抜ける中継地点にある足助町という所では、瀬戸内の海沿いから運んだ塩を、リパックと言うか、パッケージし直す荷を作り替えるというだけでひとつの産業としての業が成り立ち、そこに新しい取引の可能性が地域に生まれました。その昔、塩が流通するということは非常に地域にとって様々に地域の活性化に資することでした。このように「道」をフルに生かした賑わいを持った町、これは全国にも多くございます。その観点からも、この浜通りは、これら塩の道に代わるような「道」が幾つも考えられるのでは、と思います。

例えば極端な発想ですが、今、全国47都道府県の中で独立をしたら面白い県はどこかと言われると、私は間違いなく福島県は非常に面白い地域のひとつではないかと思います。何故ならエネルギー源を持っている。つまり原発という地域にとって、今までの歴史的な流れとして、この浜通りを中心に福島が日本に果たした役割というのは非常に大きいと思います。ところが考えてみた時、エネルギーの道というのは在るのか、ということです。塩は実際に道路上を運びます。しかし日本のエネルギー、特に原発を中心にこの浜通りの発電された電気というエネルギーは、電線を使ってどのように運ばれ取引されているのかというのは、驚くほど県民の人達は知りません。私も具体的に情報をいただいたませんので、どのように発電したエネルギーが、どこに売られ、どう役立っているのかのを、詳しく知りません。ですが昔、聞いた時に驚いたのは、いわき、勿来からずっと大熊辺りで発電されたエネルギーは、多くを一旦、会津の山方面に送電し、そこで水力発電の水を上に引き上げるための補助エネルギーとして使われ、東京首都圏の朝の電力をサポートするという、非常に重要な役割を果たしている、ということを聞いたことがあります。

定かではないのですが、いずれにしても日本でこれだけエネルギーを発電している地域に、何故エネルギーの「道」が作られなかったのか、というのは私から見れば、エネルギーの重要性を

あまりにもアピールしていないだけでなく、首都圏を中心に豊かな生活を享受できるその恩恵が、福島県に発しているんだということが理解されていない。参勤交代ではありませんが、年に数回、この当該地域を子供達が訪れてその意義を、意味をしっかりと理解してもらうというような、エネルギーの「道」というものが考えられるのであれば、この地域の認知度、重要性は遥かに上がるのではないかと思っています。

その意味でも、「道」を通じて交易をするということは、見えている「道」だけではなく、何を取引しているのか、取引を通じて何の満足を与えているのか、という方が重要ではないでしょうか。興味深い話なので私も、この浜通り全体で発電した電力が時間帯毎にどのように送電され、極端なことを言えば将来の消費税等において、売った価格に基づいて税金が取れ、そしてこれを明確に売り上げを数字で追えるとするならば、地元の還付率も高くなり、福島県の発電というものが非常に重要な産業として位置付けられると思いますし、それを使った交流というのは、大きな効果があるんではないだろうか、と考えます。

こういった極端な発想をして参りますと、ひとつの灯が見えてきます。つまり今、この浜街道のそれぞれの街道の町が、これからどのような交易を通じて多くの賑わいを創出し、そしてそれぞれに住む人々の満足度を高めていけるのか、ということを考えるに、別にエネルギーだけではなく、海や田畑、山の地域的な特異性を活かしていくことだと思います。私は有り難いことにデマンド交通、様々な給食の事業、ゴミの事業、等で全国を歩かさせていただいておりますが、この太平洋の海沿いにもまた、地域的な特異性があると思います。

御存じにょうに南とは言え、水戸まで行きますと非常に寒いです。だから梅を愛でて春を待ち望む気持ちが強い。また、北に行きますとリアス式と言いますか極端に地形的に荒々しい海岸沿いになって参ります。浜通りの方々は気候的に非常に恵まれた中で過ごされている。そういった意味でこの浜街道の地勢的な魅力というのは、私はこの東日本の太平洋側の中でも、誇っていい所ではないだろうか、と思います。それをどう交易に結びつけていくのか。昔の町というのが「駅」という馬を解くことに因って賑わいをつくっていった。なら、今は何を解いてもらうのか。ここで何を交換してもらうことによって、地域は発展したいと考えているのか。誰を喜ばせたいと考えているのか。誰と取引をしたいと思っているのか。個々に具体的に考えていただくと、それほど間違った方向でいろんなことをやる、という発想は出て来ないんではないだろうか、と私は思っております。

浜通りエリアのしっかりとした海や田畑、そして山。日本の原風景を残しながら日本の食文化の原点が全て享受できる浜通りエリアのような場所というのは、全国にもそれほど多く在りません。エネルギーの道は難しくても、例えば都会の東大に進学できるような有名校に籍を入れ、もう一つは浜通りのどこかのスクールに籍を置く、しかもそれぞれの健康状態、自分の勉強の進捗状況に応じ、それぞれのスクールの期間を自由に変えられる、ダブルスクールのような仕組みができれば、しっかりと子供達をこの地域に呼んで来れるはずです。

私、月に一回、二ヶ月に一回になるケースもありますが、島根県という少子高齢化が最も進んでいる県でお手伝いをさせていただいております。そこで「起死回生策は無いですか」ということを聞かれ、簡単な例で笑い話のように、このダブルスクールについてお話しています。また、私は経験がございませんが、昔、戦後飢えてた時期に買い出しと言って、都会の人達が地方に食料や物資を買いに出かけたことを例えに出して、「平成の買い出し」ということを話しています。

今も本当の意味では飢えてる時代です。36%前後の自給率。自分の口に入れる物のほとんどを海外に依存している。畜産まで入れてしまうと、28%という数字です。出来るだけ自分達の安心した、目で確認できる物を買い出しに来るようなことも十分出来る訳です。その時、どこをその場所にするのかというと、出来るだけ楽しくいい思い出が残るような場所を選んで行く、という競争になって参ります。

例えば、一番手っ取り早い方法として私は良く言うのですが、今、都会の子供達の昔と全然違う時間の過ごし方、遊び方で端的におかしいのが1つあります。それはゲームの時間に多くの時間を割き、缶蹴り等といった昔の遊びが減ってきているということです。ある説に因るとアトピーの多くは良い菌も悪い菌も身体から入れて、その菌と共に抵抗力を付けることによってアトピーが出なかっただけで、身体、手、足が土と接してないことが急激に病気が発生してきている原因であると。都会で暮らす子供は益々、土から離れるコンクリートジャングルのような所で生活を送っている。ならば、この浜街道のどこかに一緒になって日本一の砂場を作ってあげたらどうなるか、ということです。しかし、ここで一番大事なのは、砂場を作ることが大事なのではありません。よく誤解されるのは、行政の方々が「あ、そしたら砂場を作りましょう、今までのハード整備にしたら安いですね」「三億もあったら日本一、世界一の砂場ができるんですから。びっくりする安さじゃないですか、砂場を作りましょう」と解釈してしまうことです。これは上手くいきません。砂場という施設やハードを期待してるのではなく、そこで安全、安心に遊べるということ約束されなければ何の意味もない。つまり「楽しい」というサービスを得られるということが、非常に重要になるということです。砂場という場所ができることは、初めの一歩どころか半歩もいってません。本当に大事なのは、いかに子供達に安全、安心で、猫のフンや土が汚いだとか、そう言うお母さん、お父さんに全く心配の要らない、海で毎日洗浄するような安心感を与える砂場、そしてそこに必ず一緒になって遊んでくれる人、遊び方を教えてくれる人、そこで親子がもう一度原点に戻り大事なことをしっかりと時間を共有できるようなサービスが加わって、初めて価値のある思い出に残る場として、満足度から口コミが起こり、どんどんリピートが来るひとつの流れができる訳です。先程述べたニセコのスキー場と同じです。

行政が作ると最初だけマスコミを呼んで、日本一の砂場ができました。その後どうですか。勝手に遊んでください。維持管理は、どこかの団体に任せました。そこにお願いをしてます。そういうことになってしまいます。それでは、いつまで経っても本当の意味の交易競争には、絶対に勝てないんではないんでしょうか。

今、全国的に工場誘致が大変で、もうひとつの大きな地域の活性策として、医療機関を誘致するという競争が始まっています。その医療機関も、検診医療という新しいセンター機能を誘致するという流れで、日本、世界でトップクラスの医療機関が、全国の適地を探しております。子供と母親の検診センターです。日本の中で一番検診率が低いのが親だそうです。我々は勤め先に強制的に健康診断を受けさせられる。高齢者以上はサービスがある。地域にも色々に健康診断の回覧は回っていますが、実際の率として一番低いのはやはりご婦人方、働いているお母さん方の検診率です。この実態を改善するのに、お母さんだけを呼ぶのは難しい。お父さんがついていっても良いですけども、子供とお母さんを一緒にすればいい訳です。家族全員で一年間に一度、検診を受けましょう。それを行政がサポートしましょう、という考え方です。し

かし今、最高の検診センターで行なう2泊3日の検診時間は4時間しかないそうです。4時間あれば、全ての検診の最高のサービスを提供できる。そこで大事なのは残りの時間、何をするのか、ということです。そこで母子にどれだけの満足を与えられる地域なのか、ということが今、適地を探している医療機関にとって一番大事な情報になっています。つまり、こういう競争に勝つ、ということは行政だけでも出来ないし、民間の一団体だけでもあまりにも裾野が広過ぎる。要は行政も一緒になり、地域に来た人達にいかに楽しんで帰っていただくのか、というサービス競争をしながら、このサービスを練りに練って地域全体で考える必要があるということです。2泊3日、お母さんと子供が来た時にびっくりするぐらい楽しい地域だった、というのが、次の年の検診率を高めることになり、口コミで多くの人達を呼んで来ることに繋がります。今一番大事なことは、地域はディズニーランドをいかに超えるのか、と言われるぐらいのサービスの切磋琢磨です。そしてそれを今どこの地域が始めているのかということを、しっかりと考えていただきたいと思います。浜街道がもし、まだやってないのであれば、できるだけ早い段階に行政のハード造りだけに頼るだけでなく、もっとこの地域でどういう交易をしてもらうのか、自分達はこういう方法で、ここに来た人達に楽しんでもらう、我々はこういう新しい組み合わせで、ここの地域に来た人達の思い出づくりをしっかりとサポートできる新しい仕組みをつくることです。そしてそれらが組合わさった時に、私は紛れも無く、先程言った検診センターの誘致が叶うと思います。これを誘致すれば、おそらくアジアのまずお金を持った親子達が、日本のその検診センターに来る。そして検診が終ってからディズニーランド、あるいはディズニーランドに行ってからその検診センターに、というルートは私はそれほど難しくないと考えています。「浜通りはディズニーランドから離れてる」そういう考えは要りません。飛行機でどんどん飛べるし、必要な所だけ移動してもらう。一番大事なのは、地域でいかに満足を与えられるような、地域の連携というのができるのか、とういうことだと思っています。つまり一事が万事、地域というのは溢れるほどの可能性を秘めている。高齢者が多くなるから地域が人口が減る。そんな言い訳は一時期しか使えません。本当の地域の競争というのは既に始まっていて、そういう私はいかに来た人達とこれからの時代に合った取引、交易というものをやろうとする意欲や意志が、どこまで地域に根ざしているのか、これが大きなポイントではなかろうかと考えております。

短い時間でございますので、本当の意味では「それなら、具体的に何なのか？」という疑問もございますかと思います。テーブルを設けてやりましょう、というのが私のお手伝いする一番大事な仕事だと思っておりますので、是非興味がありましたら、また地元の方々でそういう新しい取り組みというのを始めていこうという考えがございましたら、またお声をかけていただければと思います。有り難うございました。

（了）

●活動事例報告（2題）

「サーフポイントへつづく道　交流で広がる原町市サーフツーリズム」

福島県南相馬市　原町市サーフツーリズム推進会議議長　杉山大一郎

（テレビ取材をされた映像を12分放映）

（サーフィン大会開催前の儀式として吹く法螺貝のデモンストレーション）

ご清聴ありがとうございます。杉山大一郎です。ハワイに3つ大切な言葉があります。1つは「アローハ」こんにちは、という意味です。もう1つは「マハロ」ありがとう、という意味でございます。3つ目は皆さんはそれほど聞き慣れないと思いますが「オハナ」という言葉があります。「オハナ」は、先人達を含めた人々に感謝の気持ちを忘れず受けた恩を返し、次の世代に引き継ぐ、自然への敬意、また仲間への思いやりを持ってチームワークを築き、全てを受け入れ仲間達と一緒に理想の現実に向けて行動することを意味します。

実は、私のサーフツーリズムの考え方には、この「オハナ」という言葉の意味が込められています。先程見ていただいた映像ですが、サーフツーリズムとして多くの基盤を作ったと確信しております。実は、全てがテレビ放映で、4時間分の特番映像を12分に短くプロデュースしたものですが、それだけマスコミの興味を集めている訳です。PR以上の魅力の発見が、交流する人達に伝えることができるか、そして、また来てみたいと思っていただけるか、素晴らしい出会いがありそうだと思っていただけるか、いつも考えております。これを考える時、大変力がみなぎります。自分の生まれた所ですから「とても良い所だ」と言ってもらいたいじゃないですか。そして来てくれた方々にも「とても良い所だね」と言ってもらいたい。

南相馬市の北泉海岸に全日本サーフィン大会、東日本サーフィン大会の誘致ができたのは、基本的な施設整備があったのも事実です。しかし、初めの目的は海水公園、海水浴公園という、一地域の娯楽施設に過ぎませんでした。しかし近年若者文化で、特にスポーツでは冬はスキー、スノーボード。夏はサーフィン、ボディボード、ウィンドサーフィン、とバラエティに富んでおります。良い波が打ち寄せるサーフィンに適した海岸は、限られた条件の揃った場所なのです。まして浜街道地域は、ここからのスキー場までの距離が近く、1時間30分くらいです。世界中でもなかなか無い場所です。

サーファーは良い波が頻繁に打ち寄せる海岸をサーフポイントと呼びます。そして、そのサーフポイントを自分の大切な場所として守っていこうとする心が芽生えます。サーファーは波を求め旅をするのが大好きです。色々な地域のサーフポイントでサーフィンをすることによって自分の好きなサーフポイントを見つけ、そこに頻繁に通うようになります。北泉は、既にその魅力があることに気付き観光事業としてスタートしました。年々、サーファーの数は増すばかりです。どんどん交流人口が増えてきて、ここに暮らしたいと首都圏から来る若者の話をよく聞きます。

そんな中、最も大切な準備は何でしょうか。それはセーフティです。安全確保という意味ですが、サーフツーリズムの計画でも最も重要な事項です。観光地は安全でなければなりません。そこで、映像でも紹介いたしました、地元サーファーによる海難救助隊を結成いたしました。PWCレスキュー、現在最も頼れる救助活動です。お金はかかりますが何より大切な人命に関わる事なので、海水浴場の管理運営のある行政地区では、是非参考にして頂ければ幸いです。

イベントも大切な準備の1つです。サーフィン大会の誘致。既に全日本サーフィン大会を開催いたしました南相馬市では、サーフィンの世界大会を検討中で、世界プロサーフィン連盟より開催地としての候補に挙がっております。世界サーフィンの最もレベルの高い大会です。昨年開催されました愛知県田原市伊良湖浜では、何と3万8千人の集客がありました。私達もこのたび新しい市、南相馬市にちなんで南相馬市長杯サーフィン大会を決定いたしました。より多くのサーファーを全国から誘致したいと考えております。

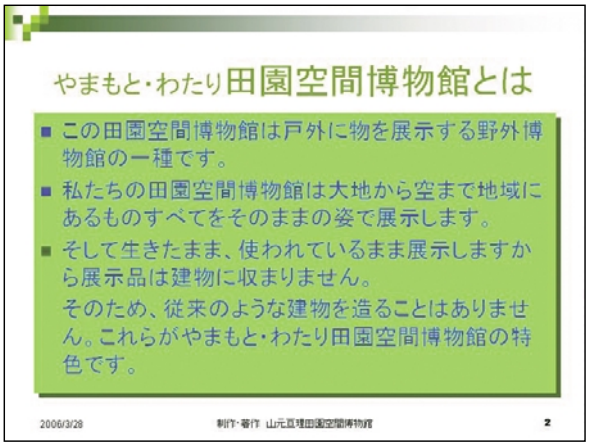
もう1つの準備としては、サーフカレッジ。教育、海から学ぶ、海を楽しみ、また海にお返しするという自然との共生を、ボランティアを通して学びます。もちろんサーフィンだけでなく、考えられる海の楽しみを提案して行きたいと思います。観光地としての整備、高速道路は観光アクセスとしての重要な1つであることはもちろんのこと、国土交通省でも推進しているテトラポットの防災、利用、景観でサーフポイントとしての利用価値を共同で考える事を望んでいます。その事からサーフポイントの公園化を含め、整備計画には是非参加をお願いするサーフツーリズムであります。世界の観光拠点の7割が海に面している事から、私達の住んでいるこの浜街道はこれから大きく飛躍するものと思われます。

最後に、全国のサーフィン愛好者100万人が既にこの地域を知っていて、その名前を「ハッピーアイランド」とサーファー達は呼んでいます。英語で訳しますと「福」はハッピー、「島」はアイランド。福島がハッピーなアイランドだよということで、100万人の人達、若人が既にこの地を知っている訳です。是非来て見てハッピーアイランド。以上の事を踏まえ、サーフツーリズムの今後の増々のご支援をお願い致しまして、私の発表を終わりとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

「やまもと・わたり田園空間博物館より暮らし体験やまちづくり活動の提言」

宮城県山元町　野外ぐるりん友の会　事務局長　石川勝行

只今ご紹介を頂きました、やまもと・わたり田園空間博物館事業ぐるりん友の会の石川でございます。まずはじめに、地域シンポジウムのカリキュラムの中で、私どもの田園空間博物館活動、暮らしのまちづくりについて、ご紹介の場を提供くださいました関係者の皆様方に、心から厚くお礼を申し上げます。私ども「やまもと・わたり田園空間博物館」とは一体どのようなものかを簡単にご紹介申し上げたいと思います。この田園空間博物館活動は、戸外にあるものをそのままの姿であるがままに展示をする博物館でございます。そして、私達の田園空間博物館は、大地から空まで全てのものを展示する博物館です。そのため、従来のような建物を作ってその中に収めるということはできません。これらが私どもの田園空間博物館事業の大きな特色でございます。そしてその活動とは、農村での生産と暮らしを見つめ、そこで育まれた水や土、あるいは里が織りなす地域資源を、あるがままに地域全体として歴史的文化的遺産から見直すことです。そしてこの活動の主役こそ、地域住民である私達でございます。



私達住民は、自ら学習をし計画をし経営をする役割を担っております。その運営の仕方としては、住民と行政が一体となって運営する、すなわち二重入力方式でございます。行政は情報、施設及び資金を提供し、私達住民はアイデアを出し合いビジョンを高め、そして活動を提供しております。「やまもと・わたり田園空間博物館」の大きなテーマは、水と土です。そして地域のテーマとしては、亘理伊達家が治めた領地、そして坂元大條家が治めた領地の新田開発でございます。特定のテーマとして『幾多の風雪に耐えた農家の自給自足の暮らし』これらを掲げております。

ここで私どもの「やまもと・わたり田園空間博物館」事業のサテライトをご案内しますと、亘理地区の吉田サイトというのがございます。そして海側に笠野サイト、こちらは田園空間博物館活動の総合案内所が建設されている所でございます。そして下がってきまして福島県との県境に磯地区。山側には鷲足地区、浅生原地区、真庭地区、この6つのサイトが私ども田園空間博物館事業を展開するサテライト、すなわちサイトでございます。「やまもと・わたり田園空間博物館活動」のテーマとしては、身の丈に合った住民活動をすること。そして少しずつ内容を充実させ、地域の情報バンクとなる活動に推進し、人と人、人と物を繋ぎ学ぶ活動に発展をさせ、生産と暮らしの知恵と技を伝承することで、次の世代に繋ぐ活動にすることでございます。

また田園空間博物館活動の中には、3つの展示方法がございます。常設展示、特別展示、企画展示という3つの展示方法でございます。この常設展示の中で、磯サイトにある「恩賜

郷倉」というのがございます。これは昭和9年の大冷害の際、今は亡き昭和天皇からの御下賜金と政府からの補助金で建てられた備荒倉で、1年365日いつでも見ることができます。非常用の米等を貯蔵し、冷害の時にはここから米を出して農家の方々に配分をし、そして稲作を奨励したという備荒倉です。記録に因りますと、山元町には15カ所のこの「恩賜郷倉」が建てられました。この建物の妻側にある丸い物は菊の御紋です。ちょうど3月の今頃天気の良い日は、この御紋が南側に取り付けられておりますので、太陽の光を受けて壁あるいは横切った床の方に、この菊の御紋が映し出されるという大変由緒のある「恩賜郷倉」でございます。

また特別展示といたしましては、同じ磯サイトにある水神沼がございます。季節限定で山元町ではこの水神沼、あるいは数カ所でしか見ることができない冬の使者、白鳥と共生する農業を展開しております。6000km北のシベリアから今年も多くの白鳥が幼鳥を連れ、この水神沼に飛来してくれました。古くからこの水神沼は農業用水として利用され、幾多の干ばつの際にも枯渇する事がなかったということで、地域の皆様には大変よろこばれております。また、私どもの田園空間博物館には“フットパス”と称した“発見の小道”を笠野活動総合案内所を中心に整備しております。これは磯サイト、真庭サイト、そして浅生原サイト、鷲足サイト、吉田サイトを回る発見の小道で現在、農道、集落道、旧道の再生、休息施設の併設、現在工事中でございますが道標・案内板の併設をしております。案内板は、今月の下旬数十カ所設置される予定になっております。

この他の展示活動としては「集落点検道具探し隊」も月2回実施しております。これは浅生原地区あるいは笠野地区、真庭地区の納屋でひっそりと眠っている先人が使った農具を探し出して、私どもの田んぼづくりの中で活用していこうという取り組みです。また、磯地区、鷲足地区では、地域の発掘事業としては地域のお年寄りの方々から色々お話を伺いながら、学芸員の養成講座教育も実施しております。

そして企画展示といたしましては「田んぼの学校」を年間6回実施しております。今、色々な地域で「田んぼの学校」を実施していますが、私どもは苗づくり、田植えを含め年6回これを開催しております。まず1回目が5月14日の田植え。1株1株皆さんが丁寧に植え、午後からはフキとワラビ取りをしました。そして2回目は6月18日、第1回目の草取り。株間にある草を自分達の手で、泥足になりながら草取りをし、午後からは梅林の草刈りも実施いたしました。3回目は7月9日、2回目の草取りです。2回目の草取りを行う7月中旬になると、稲丈は大変伸びて参ります。昔の方はその稲の葉先でよく眼を突いたということも聞いておりますので、私どもはそれらに十分に注意をしながら行っております。午後からは前回同様、梅林の草刈りをしまして、校長先生の奥様から美味しい梅干しの作り方を教えていただきました。そして第4回目8月27日、稲も段々と黄金色になって参りました。そこで野鳥あるいは害虫からこれらの稲を守るためにカカシづくり

をし「カカシまつり」を実施いたしました。そして第5回目が10月8日、稲刈りでございます。1株1株丁寧に植えた稲をまた、会員の皆様が1株1株丁寧に1穂も落とさず刈り上げ、天日乾燥ということでハサ掛けを実施をいたしました。最後の6回目は10月27日、収穫のよろこび収穫祭、脱穀でございます。この脱穀の方法も、全く昔ながらの方法で行いました。農家から集めさせて頂いた古い農具を使っての脱穀でございます。そして最後に1年間の活動の報告と、参加者にはこの平成17年度の田植えの、あるいは「田んぼの学校」の卒業証書の授与です。今年も沢山の米がとれ、会員の皆様方は喜んでいらっしゃいました。

またもう1つの企画展示として「りんご楽しみ塾」も実施しております。こちらも年間6回のスケジュールで、第1回目は5月5日の摘花。いっぱい咲いた花の中で良いものだけを残す作業です。そして2回目は6月11日。同じ摘花ですがこの時は、摘み取ったいくつかの花の中から、更に良い実だけを残そうという摘花でございます。そして3回目は7月17日、更に剪定を含めた摘果。そして1回目の「りんご塾」の時に植えましたジャガイモ、メークインの収穫をしました。これらは会員の皆様が、それぞれ収穫したものをお持ち帰り頂いたところです。そして第4回目が8月28日、更に良い実を残そうという摘果作業です。そしてネギの定植。秋が楽しみです、参加者の皆さんは大変喜んでおられました。第5回目が10月の16日、いよいよスターキングの収穫でございます。皆さん、大変美味しそうな顔をして食べていらっしゃいます。ご覧の種は「フジ」という品種のりんごで、田園空間博物館活動という名入れのシールを貼らせていただいたところでございます。そして第6回目の最終回が11月27日、収穫祭。こんなに沢山、今年も美味しいりんごがとれましたということで皆さんで記念撮影。6回参加頂いた方には卒業証書、そしてそれぞれに35kgのりんごを配分させて頂きました。

私どもの山元町は笠野学堂総合案内所を中心に海側に県道亘理相馬線、通称、地元ではストロベリーラインと言っております。そして山側には旧東街道、そして中央を国道6号線が南北に仙台から東京まで延びております。ストロベリーラインをドライバーの方に伺いますと、夜、ビニールハウスに電気が点って心安らぐなぁ、というお話を聞いた事がございます。また、春にこの旧東街道を走った時、りんごの花というのは大変良い香りがします。それで、運転手さんが食事の時、路肩に寄ってひと眠りをする光景もよく見られます。この景色に癒されて、元気になるよ、というお話も何度か伺いました。

この他に私どもは年中活動として4月に若菜摘みと草餅づくり。5月には家督を継ぐ長男の誕生を祝った柏餅づくり。そして6月には昨年収穫した豆を使っての味噌づくり。そして7月は「剥けの朔日」ということで、私ども友の会の集会を開催しております。この「剥けの朔日」というのは先人が養蚕をやっていた時の言葉で、蛇の皮が剥けるという意味で、実際にはこの時期より4週間から1ヶ月程前には皆が剥けているのですが、若いお嫁さんに休みを取らせてあげたいという時期を指しています。その他の年中行事として、8月は灯籠流し。9月には芋名月。10月には秋の山里を訪ね木の実を取って来て、先人達はどのような形でこれらを料理して食べたの

か挑戦してみたり、11月には干し柿づくりも行っております。昨年は柿の木が沢山の実を付けてくれました。そして12月はすす掃きとしめ縄づくり。1月は子供達の健やかな成長と厄払いを願っての小正月はミズキに団子を刺したものもつくります。そして2月には節分。青鬼の面、赤鬼の面を作って子供達と豆で鬼を追い出します。3月の雛祭りは一昨日、地域の生徒さん達と実施いたしました。

この他にも草木染めや蔓の加工細工等、様々な活動を展開しております。私どもの「野外ぐるりん友の会」は、平成14年3月に設立いたしました。「ぐるっと」というのは山元町民だけでなく宮城県人、日本国民、世界中の方々が時間と心をつなぐことを意味しております。現在会員は65名ですが、NPO法人化準備中です。今後も行政と協力しながらこの活動を発展をさせて参りたいと思います。そして私どもの「野外ぐるりん友の会」には、数多くのワークショップがございます。これは様々な方々のご協力によって成り立ち、盛況の中で進展をしております。私達は一年間の総括として「集落(むら)づくり博覧会」を実施し、参加者の皆さん、あるいは会員で活動された方々から今年一年間の総括と評価を伺っております。本日ご来場の皆様方で3月18日、もしお身体に余裕のある方は、笠野学童総合案内所において私どもの一年間の総括「ぐるりん友の会」集落(むら)づくり博覧会「村博」を実施をしておりますので、どうぞ足を運んでいただきたいと思います。

以上を持ちまして、体験町づくり報告を終わりたいと思います。ありがとうございました。

（了）

●パネルディスカッション「街道から始まる地域づくり」

コーディネーター
　奥山修司（福島大学経済経営学類教授）

パネリスト
　奥本英樹（原町市サーフツーリズム推進会議オブザーバー）
　小椋唯一（福島県観光連盟企画委員会教育旅行専門会幹事長）
　佐々木吉晴（福島県景観アドバイザー）
　渡邊由香（（財）南相馬市文化振興事業団事業企画担当）
　大平均（いわき商工会議所　観光サービス業部会

1）地域連携実態調査アンケート結果報告

アンケート実施主旨
当地域全体の魅力アップのため目指すべき方向を探り、交流の拡大につながる為のヒントを把握するための一つの方策として、シンポジウムの開催までに首都圏及び地元においてアンケートを実施、回収、集計、分析を行い、その結果をシンポジウムにおいて発表した。

概要

◇郵送及びインターネット調査

◎「陸前浜街道」地域　居住者アンケート
浜街道沿線地域「調査票」調査は、180通依頼し、74通の回答を得た。
浜街道沿線地域「ネット」調査は、5000アドレス依頼し、644件の回答を得た。
◎「陸前浜街道」地域　内外旅行業者アンケート
仙台・福島・郡山・水戸旅行業者「調査票」調査は14社依頼し、6社の回答を得た。
首都圏旅行業者「調査票」調査は、27社依頼し、4社の回答を得た。

◇対面調査

◎ 仙台・福島・郡山・水戸旅行業者「ヒアリング」調査は、4社依頼して全て面談となった。
◎ 首都圏旅行業者「ヒアリング」調査は、5社依頼し、4社の面談となった。

※詳細は、別途、『新時代の浜街道』地域連携・交流拡大事業～陸前浜街道の“新たな交流”～に冠する実態調査報告書にまとめた。

（以下、地域連携シンポジウムでの発表内容）

司会
　皆様、大変お待たせ致しました。只今より地域連携シンポジウム「陸前浜街道の新たな交流」パネルディスカッションを開催して参りたいと思いますが、その前に、皆様のお手元の封筒の中にアンケートの調査報告書が入っているかと思いますが、ここでアンケート結果の概要の説明をさせて頂きたいと思います。新時代の浜街道連携推進協議会より発表させて頂きます。宜しくお願い致します。

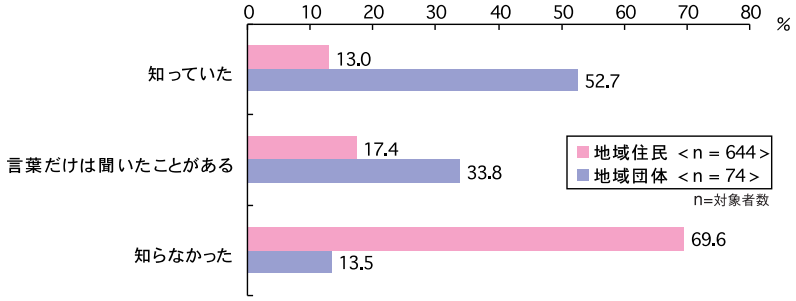
報告者
　簡単に概要の説明をさせて頂きたいと思います。既にご覧頂いておりますが、裏表で、表面が主にこの地域の居住されている皆さん方、インターネットで約644人の方々からご回答頂きました。もう1つはこの地域の農業漁業、それから商工団体等の主に地域振興に関わる団体の方々のアンケートが載っておりまして、それがその地域住民と地域団体という2つの名称で略されて報告されております。全体ご覧いただきますと分かりますように、非常に似通ったものがございますが、一番最初の質問ですね。「この浜街道そのものを知っていたか」（※1のグラフ参照）ということについてですが、やはり地域住民と地域団体ではだいぶ開きがございます。

地域イメージ（※２のグラフ参照）については、地域住民・地域団体共に、豊かな自然及び漁業が上位２つを占めています。逆に住民と団体でイメージの格差があるものも見受けられ、地域イメージが「明るい」とする地域団体に対して、住民としては、「明るい」よりも「人情味がある」に多くの回答が寄せられた他、地域団体の回答で多かった「生活しやすい」については、地域住民としてはそうでもない結果になっています。
地域連携・交流に必要なインフラ整備（※３のグラフ参照）については、地域団体・地域住民共に、「常磐自動車道の延伸」と「国道６号の整備」が高い数値になっております。
「陸前浜街道」地域で誇れること・自慢できること（※４のグラフ参照）については、「自然」「海・山の幸・食文化」「海・海岸線」「温暖な気候」が主な回答となっております。前述の地域イメージ「豊かな自然」「漁業」と重なる結果となっていることから地域イメージそのものが、地域の強みとして認識されていることが伺えます。

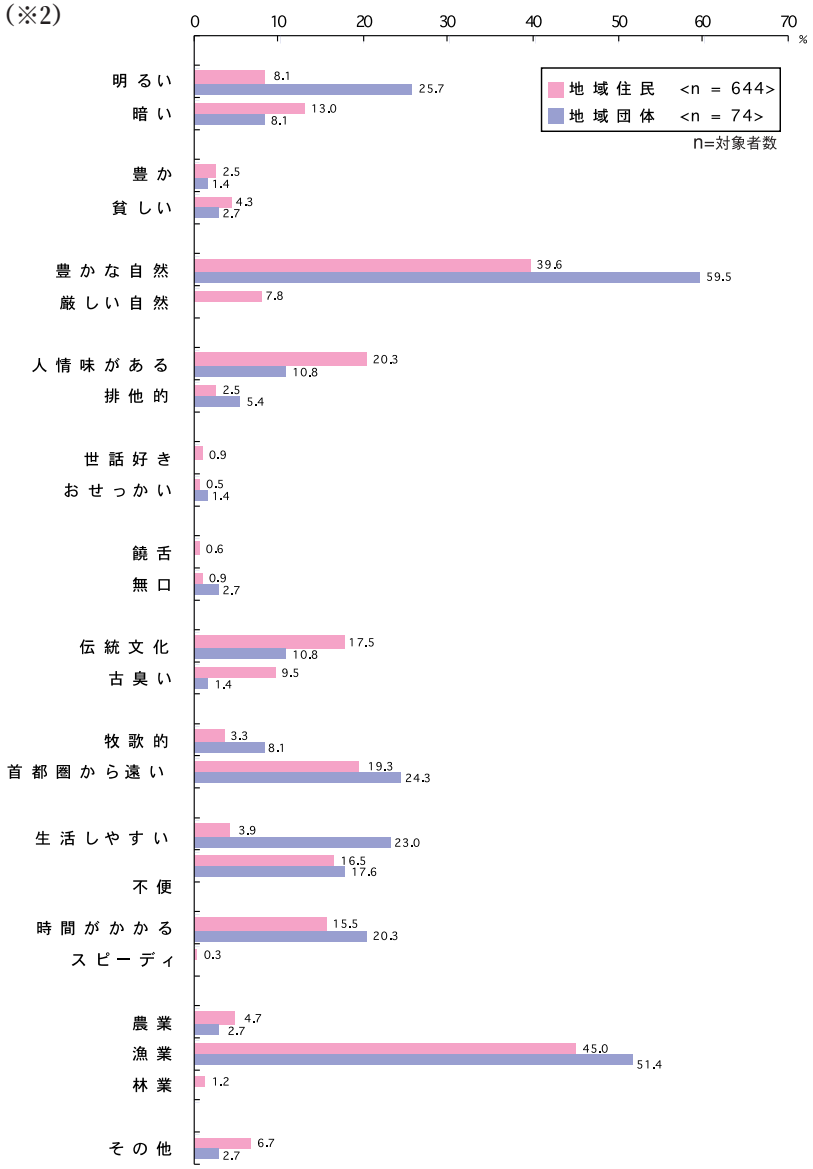
また裏面ですが、これは外部の方々がどのようにこの浜街道地域をご覧になってるのかということです。やはり一番参考になるのは旅行業者、つまりこの地域を、いわゆる旅行送客される方々がどのような目で見ているかということです。周辺地域というのは主に福島、仙台それから郡山、水戸という地域の旅行業者の方から伺いました。これはヒヤリングもしております。更にこれも外部、首都圏はJRあるいは大手旅行業者の方々から伺ったことですが、色々考えさせる問題があります。特に真ん中から下、この地域に対するインフラの整備（※5のグラフ参照）というのがございます。当然、常磐自動車道の延伸であるとか、国道6号の整備強化というのはありますが、それ以外に、地域内の観光資源等の整備というのがありまして、旅行先としての魅力づくりについては、旅行業者の方々から、かなり厳しく見られております。

それから5番目、地域の来訪促進のための重要なテーマ（※6のグラフ参照）ということで色々複数の回答をいただきましたが、周辺地域の旅行会社や首都圏の旅行会社にしましても、街道観光、旧街道の街並みの復元等というのが非常に大きなポイントとして捉えられております。実際旧道の石碑等がかなり在るというのは交流会等でも報告がございました。この辺をどう再整備していくのか、ということが旅行業者の方々も非常に期待しておられる、という結果でございます。先ほど奥山先生の話にもありましたように、都市から地方、地方から都市という面ですね、高速化するとどうしても流入より流出が先に進むというお話がございましたが、その意味からも、この地域も高速化の中でどう地域の人を繋ぎ留めておくかというところが非常に重要な課題になって参ります。これからのパネルディスカッションでもそういった形での新しい提言が頂けると非常に有り難いなと思っております。以上でございます。

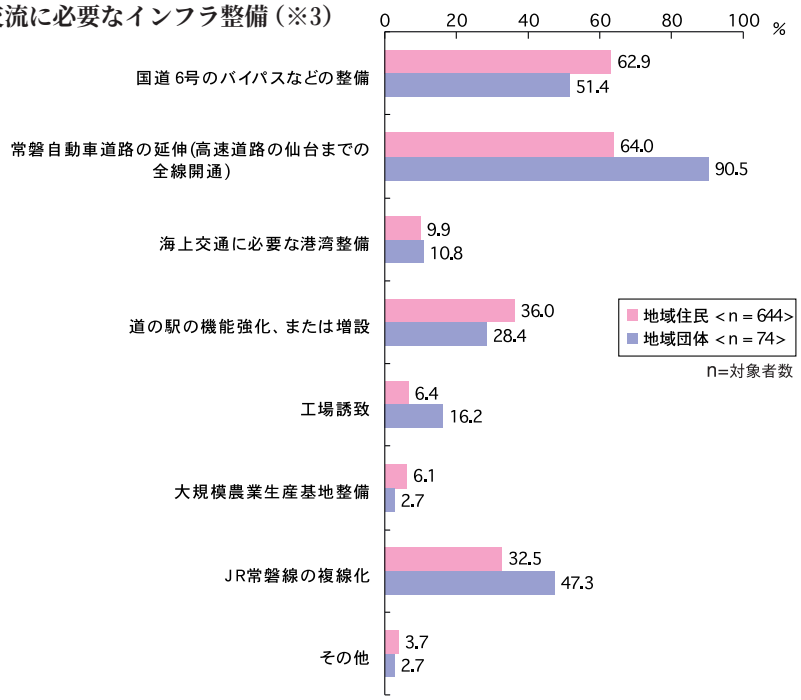
「陸前浜街道」の認知度（※1）



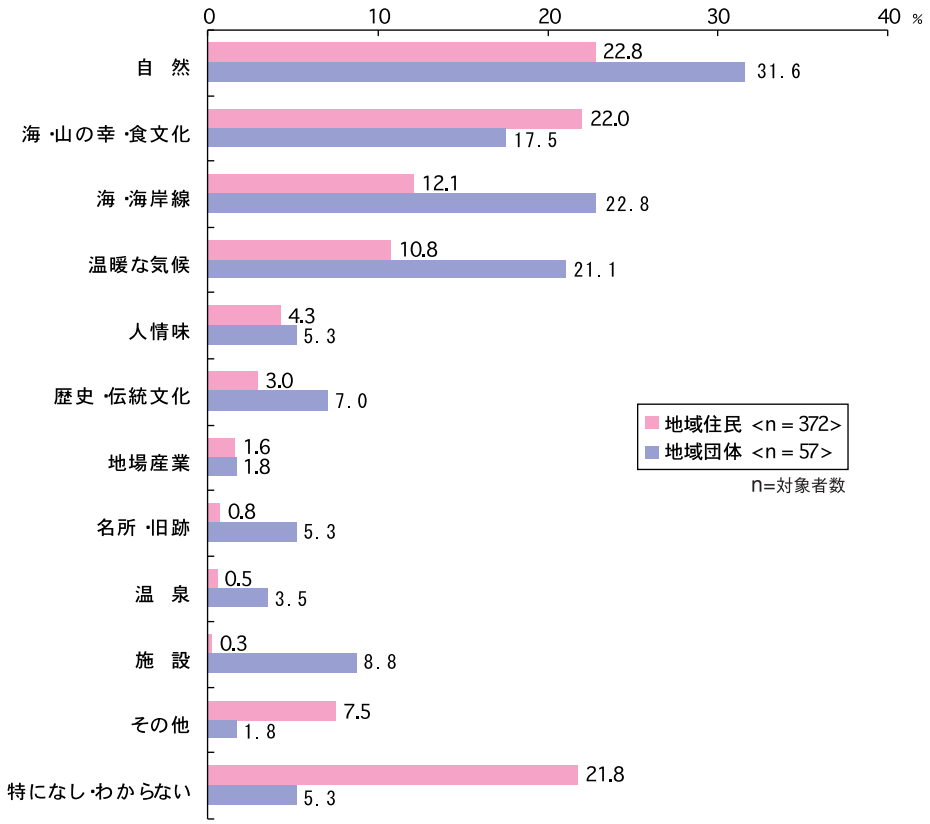
「陸前浜街道」地域のイメージ（※2）



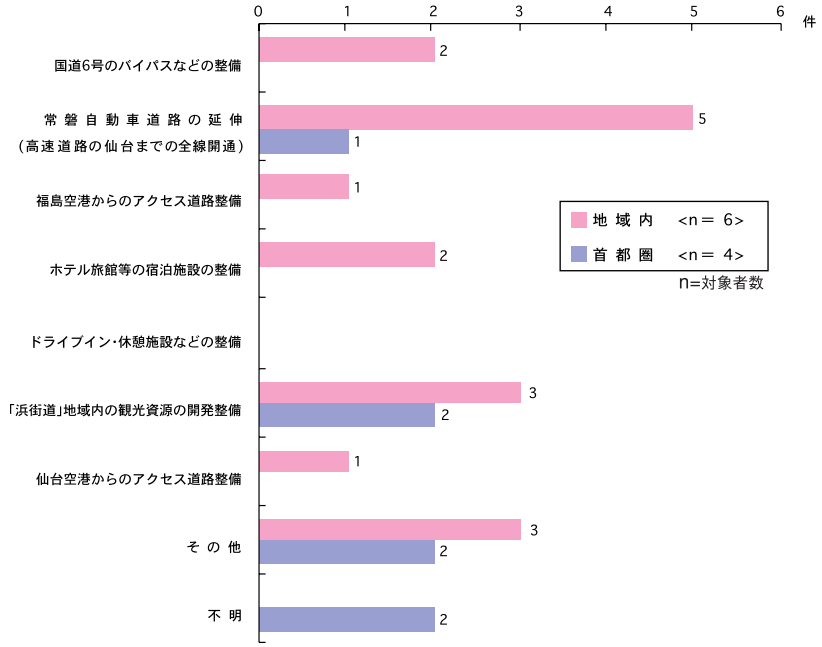
地域連携・交流に必要なインフラ整備（※3）



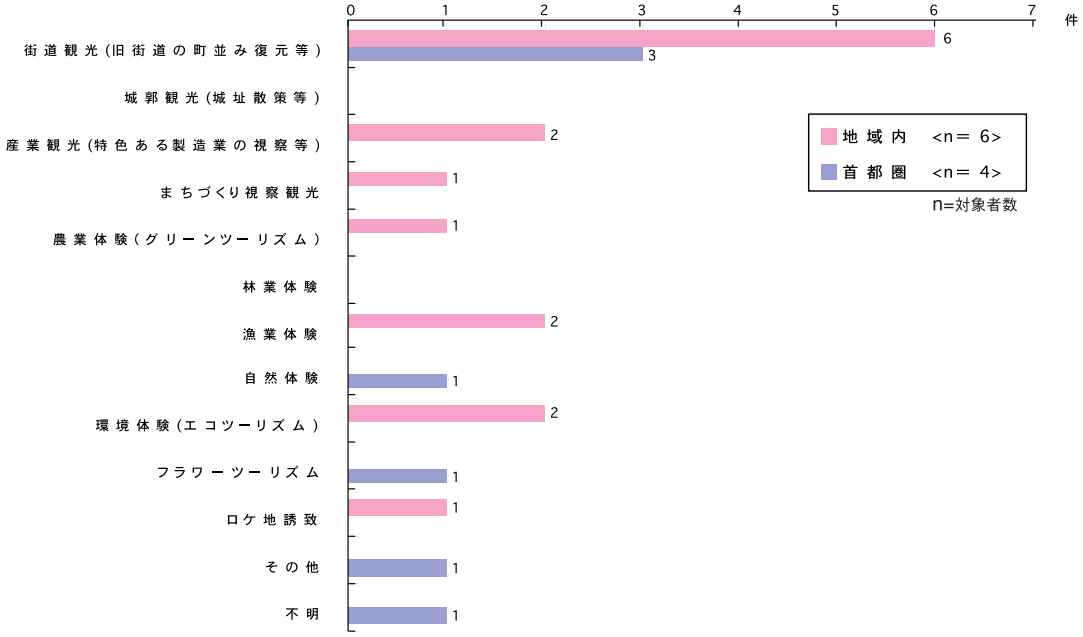
「陸前浜街道」地域で誇れること・自慢できること（※4）



地域連携・交流に必要なインフラ整備（旅行業者向けの方）（※5）



「浜街道」地域来訪促進のための重要テーマ（旅行業者向け）（※6）



2）パネルディスカッション

司会

　只今より地域連携シンポジウム「陸前浜街道の“新たな交流”」パネルディスカッションを開催して参ります。それではパネリストの皆様をご紹介申し上げていきます。詳しいプロフィールは皆様のお手元のパンフレットに記載してございますので、ここではお名前だけのご紹介とさせて頂きます。パネルディスカッション「街道から始まる地域づくり」パネリストの皆様をご紹介致します。

福島県観光連盟企画委員会教育旅行専門会幹事長、小椋唯一様。
福島県景観アドバイザー、佐々木吉晴様。
原町市サーフツーリズム推進会議オブザーバー、奥本英樹様。
いわき商工会議所　観光サービス業部会長、大平均様。
財団法人南相馬市文化振興事業団事業企画担当、渡邊由香様。

　以上5名の皆様にお話を伺って参りたいと思います。

そして、進行コーディネーター役には、先ほど基調講演をして頂きました、福島大学経済経営学類教授、奥山修司様にお願い致します。奥山教授どうぞ宜しくお願い致します。それでは、パネルディスカッション「街道から始まる地域づくり」奥山教授宜しくお願い致します。

奥山修司

それでは時間も押しておりますので、パネラーの方々自己紹介も兼ね「街道から始まる地域づくり」という表題から色々なお立場からの地域づくりについて、お一人ずつお話を頂きたいと思います。まず年の功と言いますか小椋先輩からどうぞ願い致します。

小椋唯一

皆さん、こんにちは。今日はお招きを頂きまして誠に有り難うございます。私は福島県観光連盟で教育旅行、これは学校団体、学校の生徒さんを福島県に呼び込む仕事を中心に行っております。観光業界に40数年在籍している立場から、本日は観光客が今どういうことを望んでいらっしゃるかを含めお話をさせて頂きたいと思います。冒頭から大変ショッキングなお話をさせて頂きますと、観光連盟の中では実はこの浜通り地域はスポッと抜けています。空白地帯なのです。観光連盟は毎年行っている観光動態調査では、平成9年の4700万人という数字をピークに、昨年辺りで4200万人、つまり500万人減ってる訳ですが、「なるほどそういうことなのか」ということを先ほどサーフツーリズムのお話を聞いて納得いたしました。と、申しますのは、今まで皆様方が観光という言葉を聞いた時に感じるイメージと、現在、福島県に求められている観光客のニーズにはズレがあって、観光客が減ったんではなく観光関連施設に寄らなくなっただけなのだと、いうことです。つまりこちらの方で今やろうとしておりますサーフツーリズムなんかは観光連盟の網に引っかからない訳です。もっと分かり易く言いますと、例えば魚釣りをする、あるいは山に行って山菜採りをする、それから写真を撮る、絵を描くというのは観光施設には立ち寄らないため、当然カウントをされない訳です。そのことから考えると500万人減ったというのは、観光客の立ち寄る所が移動したんではなかろうか、つまりガソリンスタンドとかコンビニ等にシフトしたのでは、と思っております。その意味で、冒頭にこの浜通りが私は空白地帯だと申し上げましたが、空白地帯であればあるほど、逆に今までの観光地、つまり先進観光地と同じ道を歩んでは絶対勝てませんから、むしろチャンスがあるんではなかろうかと思っております。本日は、その辺のことについて後でもう少し詳しくお話をさせて頂きたいと思っております。

奥山修司

ありがとうございました。続きまして佐々木吉晴さん、お願いいたします。

佐々木吉晴

佐々木です。福島県景観アドバイザーという肩書きになっておりますが、こちらには年一回、何かお仕事のお手伝いをするくらいで、普段はほとんどいわき市立美術館に勤務しております。磐越アートラインというものを作ったということで今回招いていただいたようですのでそちらの説明から入ります。私は、実は生まれが宮城県の塩竈という所でして、実家のすぐ側に多賀城の城跡が在りました。歩いていつも通って遊んでいた所です。小学校時代には坂上田村麻呂という

偉大な将軍が来られて蝦夷を征伐したと、何か崇め奉るようにして教え込まれてきたんですけども中学校の終わり頃になってはっと気が付きました。もしかすると僕は征服された側の子孫ではないかと。気がついてみますと、歴史というのはいつも勝っている人達が作るもので、負けた人は勝ち組の言うなりになるしかないと。そういう観点で見ると、例えば東北の美術家達がどのような交流をしてきたのか、いつも思い当たることがあります。具体例をひとつ。いわきと新潟の作家達が非常に深い交流を持っていたことがあり、その交流を調べますと、新潟からいわきに直接来る交流ではなく、あるいはもちろん逆でもなく、一旦お互いが東京に出る、そして東京の美術学校で学び東京で活動する、その合間にお互いお互いの古里を訪ねて行くという交流だった訳です。どうしていつも三角形の交流しか成されないのか、ダイレクトにいわきと新潟で交流ができないものだろうか。これは東北人として特に強くそういうことを感じていた訳ですが、ある時、磐越自動車道が全線開通するというお話を伺い「これだ」と思いました。と言うのは、磐越自動車道はご存知のように東京を経由しない訳です。東京を経由しないで新しい交流をつくっていく。そして東京の価値観ではなく、東北人達同士の価値観というものをこれから築き上げていきたい。そんな想いが磐越アートラインというネットワークづくりの第一歩になった訳です。これ以上は、長くなりますので別の機会に。

奥山修司

ありがとうございました。続きまして奥本英樹さんから、お願いいたします。

奥本英樹

はい、奥山先生と同じく、福島大学で教員をしております奥本と申します。立場上は、本年より南相馬市となりましたが、原町市サーフツーリズム推進会議オブザーバーとして、このサーフツーリズムのビジョンや戦略を含め、自主プランの策定等に関わっております。先程、奥山先生の話の中で、道に町が張り付いている、という話がございましたが、我々サーフツーリズム、サーファーの立場からすると、まず道をつくる人達が居る訳です。これを欧米ではパイオニアと言いますが、古くはバスコダガマ、コロンブス、あるいはマルコポーロ。最近と言っても、百年くらい前になりますが、カリフォルニアのゴールド・ラッシュのフォーティーライナーズと言われている人達もそうです。今、そういった道をつくるパイオニアと呼ばれる人達の中には、実はサーファーもかなりいます。サーフィン自体は南の島タヒチやフィジーあるいはハワイと言ったところから発祥し、それがアメリカに伝承し、アメリカで花開いた文化ですが、そのサーファーがより良い波を求め様々な地域に行き、そして様々なサーフポイントを開拓していっている訳です。例えば南アフリカのジェフリーズベイなどは、そうやって開拓された町の1つです。様々な所がどんどんサーフタウンとして町になっている訳です。現在多くの人が住みたい、あるいは余生を過ごしたい町として挙げられているウエスタン・オーストラリアやゴールド・コースト、当然ハワイやカリフォルニアもサーフタウンです。そんな現代のパイオニアたるサーファー達、そして我々が行っているサーフツーリズム等、日本のパイオニアたるサーファーがとても熱い視線を浴びせかけているのがこの浜通りエリアです。北泉海岸と言う1つのスポットだけ取上げても、既に7万人、10万人という人達が訪れている。それだけのポテンシャルを持っている訳です。当然サーフタウンとしての可能性があって、そのためには単なる交流人口の増加だけでなく、そこに

住みたい、そういう市民価値のコミュニティバリューまで含めたものになっていける可能性を信じて、我々はサーフツーリズムという活動を進めています。その話については次の発言の機会にさせていただきたいと思います。

奥山修司
　ありがとうございました。続きまして渡邊由香さんの方から、お願いいたします。

渡邊由香
　私は、市町村名が変わり会館名も変わりましたが、旧原町市民文化会館、現在の南相馬市文化会館で事業を担当させて頂いております。私どものホールは、音楽特性が非常に良いということで、実は来月、私どもで録音いたしましたCDが世界に向けて発売されることになっております。まだ2年目、来年は3年目の新しいホールですが、音楽専門誌を始め、アーティストからも非常に高い評価を頂いております。1109席の大ホールも備えておりますので、やはりこの地域だけではなくて、いわき、福島、仙台、あるいは山形、といった所から集客して来ないと非常に難しいものがございます。公演をかける際にも東北で唯一の公演、近隣ではやっていない公演を意識してはおりますが、残念ながら交通網等のこともあり、皆さん二の足を踏まれるということも伺っております。そういった中、近隣とどう付き合っていけば良いのか、ということ。この地域全体を考えないと、やはり私どものホールの運営もできないということで、今回はこちらの方に参加させて頂きました。私自身も実は常磐線で毎日名取から亘理を通って相馬を通り原町まで通っており、日々思うことは結構あります。ですが、本当に力のある地域だと思いますので、もうちょっと上手にこれから発信していけばより皆さんから注目をされるのではないかと思っております。今日はどうぞ宜しくお願い致します。

奥山修司
　ありがとうございました。それじゃ最後に大平均さんの方から、お願いいたします。

大平均
　いわきから来ました大平と申します。いわき市の商工会議所のサービス産業部会の部会長と、ここにご紹介いただいていましすが、実は2月の1日・15日と2回に渡り、いわきから亘理までの各市町村のそれぞれの団体青年会議所、商工会、それから我々のような商工会議所メンバーが11名集まり、本日のシンポジウムに向けた地域づくり交流会を開きました。本日はその中で代表という形でここに座らせて頂いております。
　現在、私はいわきの観光物産協会の委員長も務めさせて頂いておりますが、もう箱もの的な町づくりは終焉を迎えているというのが現況です。古いものを新しく建て替える等はございますが、ゼロから立ち上げる箱もの的にはもう終ってるということです。今あるものをどうやって活かしていくかが、現在の町づくりや観光、そして交流人口を増やすということにおいて問題になっています。実際に平成15年度、いわき市では観光戦略プランを立ち上げ、それに向けた観光町づくりビューロをつくろうと今考えております。
　私も実際に観光業、旅館を経営しておりますが、観光と言いますと、お土産屋さん等の方々だけと言った捉え方が非常に強いのですが、実際に観光と言うのは、町づくりと一体というような捉え方を今我々はしております。これは我々だけではなく、観光で先進事例の所は皆そうなってると思います。町づくりイコール観光になってくる、というのが、これからの町づくりの在り方でないかと思います。やはり自分が住み易い所でないと人も来ない、というようなところを切り口にして、これから少しずつ進めていきたいと我々も考えております。あとの話は後ほどまたお話をさせて頂きたいと思っております。

奥山修司

お聞き頂きましたように多種彩々、それぞれのお立場で色々と進んだ取り組みをやっておられる方々ばかりでございます。私の基調講演でもお話させて頂いたように、道から地域づくりを考える時は、交易のような、何を交換するのかというところから考えて頂ければと、全てに共通することだろうと思っております。その意味でズレがあったり、常に東京を1つのミラーにしながら論じていたところを、全く切り離して論じていく事も必要になってくるだろうと思います。次は、それぞれの取り組みから新しい地域づくりの可能性、ご自分の実践していることがこの浜街道の地域づくりに資する視点として、どのようにご呈示できるか、そのあたりを中心にお話を頂きたいと思います。また同じ順番で恐縮ですけども、小椋さんの方からお願い致します。

小椋唯一

一昨日、仙台でJTBの非常に大きな会議がありまして、そこで聞いて来たばかりの話をご紹介させていただきます。JTBは世界で一番大きな旅行会社ですが、最近、非常に大きなニュースがあったのはご存知でしょうか？宇宙旅行を販売し始めたんですね。話では5分の無重力体験をするために1時間の宇宙旅行、これはソ連のロシアのソユーズというロケットで打ち上げて1時間です。1回に一時間、そして5分の無重力体験をするのに1,000万円だそうです。これを20人、日本人がもう予約しているそうです。また1週間の宇宙滞在ですと、これが22億円。これにも日本人が1人、予約しているそうでございます。今のは夢物語のようなお話ですが、もっと現実的なお話をしますと、今、日本の観光経済はどのぐらいの規模かご存知でしょうか。簡単に言いますとだいたい15兆円と言われています。 JTBの総売上がおよそ1.5兆円ですので、およそその10倍です。15兆円あって、それ以外に4.2兆円の海外旅行があります。つまりざっくり見て20兆円のお金を旅行に使っているのが日本人なんです。日本の国内総生産はおよそ500兆円。その25分の1を旅行に使っている日本人が不景気なはずはない訳です。

私は県の観光連盟の仕事をしていて、先程、浜通りは空白地帯です、と申し上げましたが。要するに空白地帯だというのはそういった日本の旅行者に選ばれない地域になってしまっているということなんです。ですから不景気だからお客さんが来ない、ということではないということを皆さんにまずご理解頂きたいと思います。温泉地に行ってどんちゃん騒ぎをして疲れて帰って来る、という観光はもう既に過去のものになってきております。むしろ今は交流にシフトしており、地元の人と触れ合う、場合によっては中期滞在、バカンスが無いため長期滞在は日本人はなかなか難しいのですが2泊3泊なら実現できると思います。それから先程のサーフツーリズムのように地元の方達と一緒になって参加をする、体験をするという形に変わってきています。つまり今までの観光のイメージでこの地域を振興していこうなんてことは考えないで頂きたいんです。2つ3つのステップをパスして次の次あたりを狙って頂きたい。そのために、今どうすればよいかを考えて欲しいというのが、私のこの地域に対する提言でございます。

今、日本の国内、まあ海外も含まれると思いますが、セカンドハウス、つまり別荘を持っている方がどれぐらい居ると皆さんお考えでしょうか。私も驚いたのですが100万人だそうです。これから2007年以降、団塊の世代が大量に退職します。彼らが何を考えているのかと申しますと、4分の1の23%は「田舎に住むのは嫌だ」といっています。ところが後の残りの70数%は「時期を見て」「できれば今すぐ」だそうです。つまり、これからの観光はもはや一過性の1泊2日の旅行

でなく、何度も来て頂くリゾートであって、尚かつそこに最終的には住んで頂くことが着地点になる計画を立てなくてはならないということです。観光振興というのは、私は定住人口増加のための1つの過程であると思っています。その意味でこの地域の可能性というのは先程からのお話を伺い、高速道路も通る、東京からは300km圏内、しかも気候は温暖で海もある、山もある、ということでは、非常に大きなポテンシャルがあると思います。我々観光連盟として、どの程度どれぐらいのご協力ができるか、正直言って皆様次第でございますが、私は今回お呼ばれしてこれで終わりにするつもりはございません。できる限り皆様方の地域振興、観光振興のためのお手伝いをさせて頂きたいと思っております。

奥山修司

ありがとうございました。続きまして佐々木さんの方から、お願いいたします。

佐々木吉晴

それでは、磐越アートラインのちょっとした続きを。磐越アートラインについてはそのように地域のアイデンティティというものを作っていきたいという事も勿論あったのですが、もう1つ別な側面として、バブル経済が崩壊してからずっと美術館や博物館は入場者が減少の一途を辿っていたという状況の改善もありました。バブルの時期に合わせやたらと美術館を作ってしまった反動が来ている訳なのですが。経済状況が益々冷え込んで来る中で、入場者が落ち込む。結果的に博物館は運営を縮小せざるを得ない。そうすると益々つまらないものになって地域のためにもならない。悪循環が繰り返される訳です。どのように基礎体力を付けていくのかを考えていた時、鍵となったのがパリの活動でした。パリに行くと間違いなく、皆さんルーブル美術館に行かれると思います。ルーブル美術館は年間600万人の入場者があります。そのうちの大半はそのままパリに泊まりますが、ルーブル美術館だけ見に行く訳ではありません。それがメインであってもオルセー美術館を見に行ったり、あるいは他のシャンゼリゼ通りを通ったり、ベルサイユ宮殿を見たり、あるいはもうちょっとゆとりがあれば農村風景を眺めたりとかしながら、皆さんが十分観光を楽しんでお帰りになる。つまり、ルーブル美術館だけを目的とするのではなく、言ってみればパリを中心とする1つの大きなゾーンがあって、そのゾーンの中をぐるぐる回って十分に堪能して帰るという1つの見えないルートが出来上がっている訳です。ルーブル美術館がいかに世界最大の美術館であると言っても、ルーブルだけで600万人を集める訳ではありません。

振り返って考えると、例えば磐越の沿線にはおよそ20余りの美術館がありますが、それぞれの小さい美術館が1つずつ独自の活動を一生懸命行っても、どうしても客は少ない。従って収入が少なくなってきます。これをどのように増やすのか。色々なやり方があると思うんですが、まず1つ思ったのがパリと同じゾーニングという考え方でした。つまり、約230 kmある磐越沿線を1つの巨大なゾーンとして考え、これを道路で結び、お互いの美術館、博物館を行ったり来たりする訳です。道沿には幾つもの温泉もあります。そういう形で観光と文化資源を上手に活用しながら、お互いにとって良いやり方ができるのでは、と考えた訳です。美術館と観光、あるいは美術館と行政は、ともすれば反対の立場にあると思われがちですが、ルーブルでさえ生涯学習のための施設であるとともに観光資源になっています。そのことを僕らも自覚して博物館運営の中で活かさなければいけない、という発想でした。

元々歴史的にもそんなに深い交流が親密に行われていた訳ではありませんでしたので、結果的には残念ながら目立った活動はなかなかできませんが、ただ副産物もありました。例えば会津若松には美術館がありませんが、喜多方市に美術館があり、そこから道路を挟んで反対側の三島町と柳津にもそれぞれ美術館がありまして、若松を挟んだこの3つの美術館が大掛かりな展覧会を同時開催いたしました。メリットとしては自治省から地域をまたがった活動をすることを認めてもらい多額の補助金を頂くことが出来ました。また1つ1つは小さい美術館ですが、3つ協力する

ことにより県立美術館よりも大きな展示スペースが結果的に確保でき、県立美術館より多額の予算を使って大掛かりな展覧会を実施できました。そして外側からそれを見に来る人達が居て、三島町や柳津の存在、また会津と言う1つの大きなエリアの中に小さいエリアとしての三島や喜多方、それを認知させることに貢献できた訳です。そしてもう1つ、3つの小さい町の住民が、展覧会を通じて興味を持てばどうしても3カ所回らざるを得ませんので、見て回ったと。結果的にお互いの中に、特に美術好きの方々の中に少しずつ小さい交流の芽が生まれました。そういうところは磐越アートラインの1つの副産物ではないかと考えております。

奥山修司

ありがとうございました。続きまして奥本さんの方から、お願いいたします。

奥本英樹

先ほど杉山さんの講演のところで、ビデオの映りが悪くて情報が飛んでしまった部分がありましたので、その辺も含んで補足をさせて頂きたいと思います。我々がこのサーフツーリズムの中で考えていることですが、ツーリズムっていうものは、今もパネラーの方々あるいは先程、奥山先生の話でもキーワードとして何度も出てきていますが、単に交流人口を増やしましょう、と言うものではありません。勿論、中身が伴わなければ当然、奥山先生が言われたように人は来ません。とはいえ単に人が集まっただけだと、様々な軋轢が生じてしまい、むしろ町にとってはマイナスになることも起こり得ます。我々がツーリズムを考えた時、訪れるビジターが満足する、そしてそれだけでなく、そこに住んでいるローカルの人達も満足をする。そのローカルの方々も単にサーフツーリズムであればサーファーやマリンレジャー愛好者だけではなく、そこで商売をされている飲食業の方、宿泊業の方、あるいは商工関係者の方、そういう人達も当然幸せになる。更には地域住民そのもの、それも高齢者の方から子供達まで含めて全ての人達がハッピーになる、あるいは幸せになるという、そういうプラスサムのゲームじゃないと、これからの取引形態というのはなかなか上手く行かない。ツーリズムも当然上手く行かない。そういったプラスサムのゲームを、いかにして作り出せるか、そういうモデルをどうやって作るか、それがサーフツーリズムになっている訳です。

先ほど海外の先進地域、例えばサーフタウンを申し上げましたが、例えばカリフォルニアのハンティングトンビーチという町は、年間1,000万人が訪れているだけではなくて、かなり多くの人達が住んでいます。私もカリフォルニアのハンティングトントンビーチも行きましたし、あるいはフロリダも見てきましたが、多くのサーフタウンは、海を最大限に活用しながら様々な人に様々な形で色々な満足を提供しています。例えばサーファー等にとっては安全に、しかも快適にサーフィンができる。先ほど奥山先生の話にもありましたが、子供達にとっては砂場で自由に走り回ったり砂遊びをしたり、ビーチバレー、ビーチサッカーができる。高齢者も朝夕散歩が楽しめます。そういう形で海を活用しながら多くの満足を、つまりレジャーだけではなくて、福祉プログラムであったり教育プログラムも必ずそこに根付いている訳です。また、それをマネジメントする人達もしっかりいます。

我々もこのサーフツーリズムの中で、どのようにサーフタウンをつくり上げていくか。そういったベンチマークが既にある訳ですから、そのベンチマークを目指しながらどのように南相馬市としての独自の、そして海外に負けないサーフタウンをつくるかということを、この3年間ずっと考えてきました。その中で、いつくかキーワードも浮かび上がってきました。当然ですが「安全性」あるいは「情報」あるいは「交通アクセス」そういったものを1つ1つ整備をしていきまし

ょう、ということです。その結果、今言ったような全ての人に海の素晴らしさを享受できるような町づくりができるんじゃないか、と思います。その取り組みとしてまず、我々は「安全性」というものを第一に考えました。それがサーフパトロールのきっかけです。今まで日本の海は大抵は2週間あるいは3週間程度の海水浴期間、そこに監視員がいるだけで、その期間しか使えませんでした。サーフパトロールをつくることで我々は、できればこれを一年間やっていきたい訳です。そうすることで、例えば臨海学校、あるいは高齢者の人達の海辺の散歩、あるいは小学校の授業の一環としてのビーチクリーン体験等、様々な教育福祉プログラムが出てきます。今、都会では学校から子供を出さない、という方向で取り組みがなされています。でも、この浜通りに来れば、むしろ学校から子供を出して、例えば海辺で楽しませましょうと、そういう地域にしたい。単に夜の町に出て行くような、そういう楽しみ方だけではなく、朝夕を使って気持ち良く散歩をする。どちらで過ごしたいか、またどちらで子供を育てたいか、という提言を、どんどんこの浜通りの方から発信していきたい。そんな思いがこのサーフツーリズムの中には込められています。以上です。

奥山修司

ありがとうございました。続きまして渡邊さんの方から、お願いいたします。

渡邊由香

私どもの地域は20年以上、ホールというものが無かった地域でしたので、つくる段階から市民の皆さんの関心も高く、また市の方もそういった想いを受けてつくり上げたということがございまして、非常にその辺りが特色的なホールではないかと思います。先程、佐々木先生がおっしゃったように、建物というのはできてしまうとその後の運営が非常に難しいということもあり、そういったことを見据え、私どもが取り組みをしている中で2つほど紹介させていただきたいと思います。

1つ目は青少年のオーケストラ。これはこの地域が管楽器、吹奏楽が盛んだという土壌がございましたので「ゆめはっとジュニア・ウィンド・オーケストラ」というものをつくりました。こちらは地域や年齢を超え音楽をやりたい子供達が集まって来るというものです。それを地域の皆さん、大人が支えていこうという試みで始まりました。これは地域創造という団体から非常に多額の資金も受けることができました。ジュニアオーケストラは全国に幾つもありますが、ほとんどが弦が入った管弦楽が主で、管楽器のウィンド・オーケストラをホールで育てるという事例があまりないため支援に値する評価を頂いた訳です。2年目の今年は、来年に向け色々な精査をしています。これについては青少年、小学校4年生～19歳までの子供達が集まっておりますが、サポーターの方が実は年齢層が非常に高く、おばあちゃま方が結構いらっしゃいます。若い人から元気をもらいたいということで、おばあちゃま方がいらしてくださり、お行儀を始め色々なことを教えてくださるなど、世代間を超えた交流が出来上がってます。また、参加している子供達もこの地域だけでなくて、月3回くらいの練習に郡山から兄弟で電車に乗って通って来てくれる子も居るということで、とにかくジュニア・オーケストラのためだけに集まって来る、という繋がりのある交流をしていくという、1つ試みになっています。

本当に試行錯誤を重ね行っておりますが、実は吹奏楽の神様と言われているアフレッド・リードさんという方を音楽監督に迎え、プロの指導を受けるという特色的なことも行っております。

リードさんが実は亡くなられ、今年はトロンボーン奏者でいらっしゃる谷啓さん、最近、山形を舞台に撮影されたジャズの女の子達の『スウィングガールズ』という映画にも出てらしたんですが、子供達にしてみれば、おじいちゃまという世代の人と今度は触れ合って共演をする、という非常に素晴らしい機会を得ることができました。そういった形で本当にジュニアのために集まって、ジュニアが終ればまた自分の地域に帰り、地元でやる子は地元の吹奏楽をやっている。またその時期に練習が始まるよ、と言うとこちらに帰って来てまた参加してくれる、ということで地域をつくっていく。そして地域の方々に支えて頂きながら、この取り組みがいずれ根付いていけば、音楽というものを核にした地域づくりができるんじゃないかと、感じております。

もう1つは先ほど招聘の件につきまして非常に不便だという話もしたのですが、私どもはそれを逆手に取って最初から、うちの場合は夜公演はアーティストの方達がお帰り頂けないので逗留をしてください、ということをお話をさせて頂いております。公開リハーサルだったり、子供達と触れ合って頂く時間を持って頂くことを条件に、逆にアーティストを選ぶということも、私どもは行っています。南相馬市、旧原町ですが、地域のホテルが結構ございますので、そちらに泊まって頂いて地元にも還元していく。あとはこういったイベント系の事業の場合は何十人という単位で打ち上げをやりますので、飲食店の方にもそういった形で還元していく。ホールが演奏会を見に行くといった特定の人のものではなく、何らかの形でそういったサポート活動をしたり、あるいは情報コーナーというコーナーもありますので、そちらに来て頂いて「ああ、ゆめはっとね」と言って頂ける仕組みを考えております。まだまだ未熟ですが。そんなこともありホールは市の中心部に造って頂きました。ご多聞に漏れず、当初は離れた地域に計画をされていたようです。しかし地元の方が「それじゃ子供達が行けない」「地元の人が歩いて行けない」ということで、市役所の反対側、敷地的には狭くなって不便な点はありますが、そこの場にあることで逆に学校帰りの子供達が来て、パソコンを使って情報を検索したり、ということも出てきました。これが2年目で、来年はもっとまた地域に根付いていける形になればと、思っております。そういった形で特色ある運営をしつつ、地元の中に溶け込んで市民の皆さんに色々な形で還元できる地域づくりの一助となればと日々考えております。

奥山修司

ありがとうございました。それじゃ大平さんの方から、お願いいたします。

大平均

私が住んでいるのは小名浜という所です。皆さんご存知のように、小名浜には「アクアマリふくしま」という水族館がございます。その反対の埠頭の方に「ら・ら・ミュウ」という観光施設がございます。その間にあるのがアクアマリンパークです。実はその小名浜の20～30の各種団体が集まり、6年程前、町づくり市民会議というものを発足しました。その会議において県の方からアクアマリンパーク管理の委託を受け、今、色々と行っております。その一つ、アクアマリンパークの倉庫のうちの4棟を残しリニューアルしようということが決定し、今年度中に「ら・ら・ミュウ」寄りの倉庫の屋根と外壁を今新しいものに変える工事が始まっております。その運営管理を市民会議ではなく、新しい会社を設立し行おうということで来月か再来月、その会社が立ち上がる予定となっております。行政との絡みは勿論ありますが、これは行政から出た話ではなく、倉庫のリニューアルに関してはもう10年来、県、国、それ

から市の方と色々と話を続けてまいりました。実際に我々は壊した方が良いだろうという結論でしたが、古いものを残したい、という話もあり、佐々木先生も中に入って頂き色々ありましたが、結局残すことになりました。平成20年ぐらいからは半分から全部がオープンできる予定です。またそれとは別にNPOの市民会議も取得し、現在色々とやっている状況です。

いわき市は、皆様ご存知のように14市町村が合併し、未だにまだ垣根が抜けない部分がございます。観光物産協会も行政等の委託事業が多いため、総予算は1億円ちょっとありますが、そのうちの9割は市からの委託で今、観光の部分は色々難しい部分がございます。その中でいつも我々が考えているのは、観光というのはミニ京都をつくる訳ではありません。町づくりもまた、ミニ東京をつくる訳ではありません。やはりオンリーワンの町づくりをしていかなければならないということをいつも頭に置いております。また観光の部分に関しては、浜街道に関してもそうですが、地域環境が1つの観光を活性化すると私は思っております。自分の所が良くなければ人は来ません。そしてそれぞれが競争し切磋琢磨していかないと自分の所も育たない、というのがいろんな所を見て感じるところです。

実は2月1日の交流会の時、いわきからここまで3時間かかりました。仙台でもいわきから高速で2時間です。相馬は仙台より遠いというイメージがあります。本日は富岡まで高速で参りましたが、それでも2時間以上かかりました。やはりその辺りがプラスになるのか、マイナスになるのか。確かに時間的にはマイナスですが、それを逆手にとってプラスにするような浜街道のつくり方をしていったらどうか、という話が先般の交流会でも出ました。

またこの浜街道のロゴを整備をして、さらにキャッチフレーズもつくることが1つのきっかけになれば、という最終的な意見もありました。それぞれの市町村の連携をどうやって取っていくかが、これからの浜街道の課題だと思います。それぞれの市町村の温度差はあります。観光に対する考え方も違いますし、町づくりに対する考え方も違います。また財政基盤も全然違います。その辺りの共通性をどこに見い出すかということを考えてやっていく必要があると思います。その中で一番やり易いキーワードは、歴史と食、それからもちろん海です。この3つを考慮しながらキャッチフレーズとロゴを上手く活かし連携をやっていこうというのが、交流会の結論だったと思っております。

奥山修司

それぞれのお立場で今、取り組んでいること、またこれからやろうとしているような中身についてお話頂きました。先ほどのアンケートの結果にもありますように、外の目というのは非常に厳しくなっております。極端に言えば、何ら情報を発信してない浜街道エリアというような形での評価になってしまっているんではないか思っております。

一方、私は福島に来て19年になりますが、逆にまっさら、と言うか、これほど売り易い、またアピールし易いエリアは他に無いのでは、とも思います。逆に今日お集まりの方々はこの浜街道自体がバラバラじゃないかと思われたかもしれません。それぞれに地区は色が違う、と考えられるかも分かりませんが、おそらく東京、関西、特に関西に行きますと東北は1つ。東北の良いもの持って来いというような言い方になって参ります。そういった意味で私はこの浜街道を、先程お話させて頂いたように、明確に特長を打ち出す1つの的確なエリアではないかなと思っております。本日は折角の機会ですので、今日を境に、このエリアをパネラーの方々にもアピールして頂く。そのために自分の今やっていることの中からどういうことを提案ができるのか、またどういうお願いをしたり、どういう連携を呼びかけてけるのかという視点で、最後にご発言をお願いしたいと思います。それではまた、小椋さんの方からお願いいたします。

小椋唯一

トリノオリンピックが終りまして、ジャンプ陣は全滅でした。それはルールが変わったからな

んです。逆にそのルールを上手く研究して優勝したのが実は荒川静香選手です。観光の世界でもルールが変わると観光客のニーズが変わります。今まで勝ってたところは列の後ろに並ばなくてはいけない訳です。今、奥山先生はまっさらな所、と言いましたけども、まっさらな所はルールが変われば今度は一番前に並べるんですよ。そういう意味で、この地域は可能性があると感じた訳でございます。そうは言うものの、やはりこの時に何が一番大切かと言いますと、やはり人の力です。この地域の皆さんは今までどちらかと言うと原発立地や東京電力からの様々なお金が入ってくる豊かな所ですから、少々おっとりとしていて「そんなことしなくていいよ」という部分もあったのでは、と思います。しかし、やはりこれからの観光は先程も申し上げましたように、定住人口の増加、つまり気候が温暖で海があって山があって、しかも人が良い所を探している都会の人々に対して、立候補していかなければ駄目なんです。1泊2食で13000円、15000円と長期滞在に向かない既存の観光地では、立候補することはできません。高速道路が通れば浜通りには首都圏から日帰りもでき、福島県内の子供達に今度は海を利用した教室も開けるかも知れない。その意味で私は非常に期待している訳です。私はこれからこの地域で是非皆様方に心がけて頂きたいことがございます。それは、 NATO廃絶運動です。「ナトー」とは北大西洋条約機構ではありませんよ。これは「No action, Talk only」の頭文字です。つまり、動きもしないで議論ばかりしていても仕方がないということです。「No action, Talk only」を廃絶しましょう。行政の方は、ほぼ3年を周期に変わります。いつまでもその地域に留まっておりません。ですから、行政は使わせて頂くものであって、行政主導で地域振興あるいは定住人口の増加を図ろうとするのは土台無理なのです。今ここに居られる皆さんが中心になって、この町でありこの地域を良くしていこう、という実践が大切です。そのためにも陸前浜街道が一つの束になっていかなくてはなりません。それから個々にオンリーワンの観光地を目指す、あるいはオンリーワンの人口増加策を考える時は、陸前浜街道がひとつずつで構いませんので、その辺りを是非上手く使い分けて地域振興を行って頂きたいと思います。それは行政の皆さんも良く分かっているはずです。私が住んでいるのは、猪苗代町という磐梯山と猪苗代湖のある所ですが、ここでもやはり、観光資源は磐梯山とか猪苗代湖だけではないよ、ということで、作ったフレーズが「人を探して人が来る、人が訪ねて人が来る、人が人を連れて来る」という言葉です。猪苗代という有名観光地であるところでさえ、もう既に観光資源は人にシフトしております。皆様、これからでも決して遅くはございませんので、是非頑張って頂きたいと思います。

奥山修司

ありがとうございました。それじゃ佐々木さん、お願いいたします。

佐々木吉晴

先ほど奥本先生からマルコポーロの話が出ましたが、13世紀にマルコポーロが通った道が有名なシルクロードです。シルクロードは言葉としてはありますが、現実には目に見える道路というのは存在しませんでした。世界史の中にはこういう道が沢山登場します。例えばサハラ砂漠を超えて西アフリカと地中海を結んだ塩の道ですが、これはラクダで行った訳で道路ではありません。また北海やバルト海から古代ギリシャを含む地中海世界へと至る琥珀の道というのもありました。ギリシャでは琥珀が採れなかったため、そちらから運ばれて来た訳です。また今から3,000数百年も前から、現在、紛争地域になっているアフガニスタンでしかとれないラピスラズリという非常に貴重な石を運んだラピスラズリロードもありました。このラピスラズリはエジプトで貴石として用いらたきれいな濃いブルーの石です。その他に海を伝わっていったのものでは、インドからペルシャ湾、それと紅海へと入ってく胡椒の道、スパイスロード等があります。

歴史の中に登場して来る非常に重要な道を考えると、これらの道は全て形が無いものです。しかし実際に道が無くても、人々は幾多の苦難を乗り越えそこに交易や交流を求め頻繁に動いて行

きました。それが歴史の中で道となり、そしてその道は概念として生き残ってきました。

中央アジアの展覧会を、昨年うちの美術館で開きましたが、中央アジアの方達も道の無い所で概念としてのシルクロード、シルクロードの中継の基地であった自分達ということで非常に誇りを持って生きてきております。「街道」という言葉。これは正にシルクロードやスパイスロードと同じように形としての道がある以前からもしかすると成り立っている1つの概念ではないかと思います。その概念を肉付けしていくのが人と人の繋がりであったり、地域で形成されてきた個々の固有の文化でないかと思います。こういうものを具体的に物理的な形で表して1つにまとめていく、つまり現実の意味での道路をつくるのはとても大切なことですが、それに因って全てをそこに依存する、あるいは委ねるのは違うと思います。道路がつくられる前の時代から自分達が持っていた概念としての「街道」というものを、もう一度見つめ直すことが必要だと思います。そしてそれと同時に、「線」を意味づけるそれぞれ固有の文化をもつ地域―そうした地域の概念もまた見つめ直していく。そしてその中から概念と現実とを結びつけていった時に、ひとつの形が見えてくるのかもしれません。

先程、お話を伺った杉山さんの熱い感じですね。サーフィンと浜街道が歴史的に直結するものではないことは誰でも分かることですが、でも今この瞬間に、この地域の風土に非常にマッチしたものが現実にあって、そのことに対して熱い想いで活動する人達が居る。結局は、そういった人がそこに居るかどうかだと思います。これは正に小椋さんがおっしゃっていることと同じです。人がきちんとそこに居て、そうした活動を一生懸命やろうとしている。それを沢山繋ぎ合わせていった時に、「街道」というものが具体的なビジョンとして浮かび上がって来るのではないか、と感じております。

奥山修司

ありがとうございました。奥本先生、どうぞ。

奥本英樹

今、小椋さんと佐々木さんに全く同じことを話されてしまい、もはや話すことが無いんですけども。正に人だということです。地域資源の活用を考えた時に、当然その地域の人達にとっても良いものじゃないと、外から人はわざわざ来ません。では、その地域にある良いもの、地域資源は何だろうと考えた時に、それは自然資源であったり、歴史、文化、あるいは建物であったりそういったものを誰かが必ず守ってるということです。それがずっと大好きだから守ってる人がいる。実はサーフツーリズムの中で、我々が行っているこの北泉海岸も、全てのポイントにはそれぞれにそこを守っているローカルのサーファー達がいます。このサーファー達は、この浜街道のエリアではかなり連携が進んできています。同じポイントを同じ目的で守っていきたいという思いで繋がっている訳です。このサーフツーリズムの中で我々がいつも考えていることは、様々なビジネスモデルが存在するという事です。経済モデルとして考えると、産業革命以降、自然資源というものを徐々に消費したりあるいは破壊に近いレベルもあったかも知れません。とにかく、そういう形で文明を成り立たせてきた訳です。とりわけそれが産業革命以降、猛烈なスピードで進行してしまった。でも、もう一度考えていくと、その自然資源をきちんと保全したビジネスモデルもつくれるのではないか。そういったことを、我々はいつも考えています。

そして、その海岸のエリアの開発についてもですが、日本は海の使い方がかなり下手な国民じゃないか、と思います。おそらく昔はもっと海を活用してたんじゃないかと思います。僕は世界のサーフタウンをビデオでや写真で見たり、実際に行ったりして実感しています。その経験から少なくとも戦後、海の使い方が下手になってしまったように感じます。その中で、このサーフツーリズムに関わっていただいているサーファーを中心とする皆さんは、海との上手なつきあい方を大事に守っています。だからこそ、浜通りにはそれらが数多く残されている訳です。新たなビジネスモデルをつくる時に、それはおそらく海だけではなく、山や農村といった、日本中にある色々な所でも同じことです。そういう人達が、大きな情報発信になっていくと思います。サーフツーリズムの中で現在1つの目標としていることは、このサーフツーリズムを通じこの浜街道が環境マネジメントの先進地域として、情報発信を持つエリアにしていきたいということです。そしてそれを日本全国の国土で再度復活させて行ければと思います。そのためには、まず今、住んでる皆さんがサーフツーリズムの考え方に少しでも共感を持って、南相馬市のホームページに載せている報告書も見て頂いて、是非海に足を運んでもらえればと、と思います。先程申し上げましたように、海は夏の僅かなシーズンだけしか使えないものではなく、オールシーズン気持ちが良い自然です。だからこそサーフタウンてには多くの人達が住みつく訳です。その可能性を秘めていることを再度認識頂き、海を活用して欲しいと思います。そういう視点でこのエリアをもう一度見て頂くことで様々な連携の可能性が見えてくると思います。先程のように、福祉プログラムや教育プログラム、あるいはビジネスのモデルにもっと直結するものを考えていく上において、連携というものは欠かせません。1つのコアになる考え方、海を利用する、例えばビジネスモデルという1つのビジョンをつくってそれにどう自分達は関わっていけるのかを考えながら、この浜街道エリアというものを見つめ直して頂きたい、そう思います。

奥山修司

それじゃ渡邊さん、お願いします。

渡邊由香

実は私どもの公演に、いわきの方から団体で学生の方が良くいらしてくださるようになりました。今回たまたまその中の学校、一団体ですが、私どもの公演が終った後、この地域は本当に吹奏楽が盛んですので、その学校に伺って交流をするというお話を頂きました。そこまでは私どもも実は考えておりませんでした。私どもの知らない間にそうやって親交が始まっているということにうれしさを感じました。

今回たまたまサーフィンの話が出ていますが、実は次回、名取の方で大会が開かれるということもあり、色々な形で実は繋がっている、ということも感じております。私自身知らないことも沢山あります。私どものホールも反省すべき点ですが、やはり情報発信ということは、常に肝に銘じていきたいと本日もつくづく思いました。

難しいことは言えませんが、一つお話させていただければ、他所の地域から色々な方々にいらして頂いています。アンケートを見ると茨城だったり山形だったり、公演によっては北海道や青森といった遠くからの方もいらっしゃいます。また、アーティストの方も色々な地域を公演で回られます。そういった方の口コミが非常に怖いのですが、残念ながら時々その皆さんから、おもてなしというのがちょっとこの地域は足りないね、と言われ

てしまいます。お話しをすると打ち解けられるのですが、最初その辺りが何となく不愛想な感を受けると、色々な方に言われました。今後、魅力がある町づくりにおいて、皆さんは色々な方をお招きすることになると思いますし、魅力があれば、自然に他所から人も来ると思いますが、やはりそれらの方々がいらした時に私達がどのようにおもてなしをしてお迎えするのかが、その後に続く非常に大事なところだと思います。私自身もそれを肝に銘じつつ、特別何かをしなくても、一度いらした方にまた来て頂くために、「いらっしゃいませ」というホスピタリティみたいな気持ちで、取り組んでいくことも1つ大事ではないかな、と思いました。

奥山修司

それじゃ最後に大平さん、お願いします。

大平均

小椋さんのお話にもありましたように、前に私が別な取材で言ったのも、人づくりが一番大切でしょうということです。観光に関しましてもキーマンをつくることが必要です。昔からありますように町づくりは3人の馬鹿がいれば変わると言う話もございます。まあ、そのようなキーマンではないですが、それぞれ自分の持ち場をちゃんと努めれば、観光に関しても大分変わってくると思います。小さなことですが、その街にきた時に、ちょっと道を聞いたりとか、これはどこにあるの、と聞いた時に、ブスッとされて指差されるようでは心情的にも、嫌な気持ちになってしまいますので。笑顔や親切といったものは、観光業者じゃなくてもそういうことが自然にできる町づくりにできないかな、というのが常日頃、観光業の私も感じているところです。

また、町づくりにもう20年30年携わって行政とお話をさせて頂いて思うのですが、行政は市民のためにこれをやってる、という観点で非常に強引にものを進める訳です。我々としては、やってくれる、という意識は無いのですが。特に検討会や説明会等、我々がその中に入って3～4回委員会を開いて、その結果をお話をするとき、委員会をやる前から後が決まってケースが非常に多い。そういうものではなく、民間の我々が持ってったものを行政に認めてもらう。実際に我々の団体とか、組織を行政に認めてもらって、それで行政が一緒に各々やってくというのが、一番ベターな形だと思います。先ほどお話しした小名浜の件は、それが上手くいっている例です。とはいえ、そう言いながらもどんでん返しがあると困るので、今その辺は非常に苦労しております。実際にそういうことをやった時、我々の意見をどのように聞いてもらうかが大事なところです。先程、小椋さんがおっしゃったように、行政マンはだいたい2年3年、長くても5年しか居りません。ずっとそこに住む訳ではなり訳です。我々は、ずっとそこに住む人間として、その辺りのところを良く考えやっていかなければならない、と思っています。

浜街道に関しましても、此所に来てもらう仕掛けをどうするかを考えることが、これからの課題だと感じています。来てもらえば此所の良さも分かるし、時間のかかることですが、これが1つのプラスになってくると思います。まずは来るための仕掛けを考えなければいけない。そのためには個人ではできない、1つの団体ではできない。やはりそれは皆様がある程度まとまってやらなければいけない部分があると思います。ですから、全部が足並み揃えてやることは無理だとしても、この150kmの沿線を3つ、または4つに分けるとか、そういう仕掛けはできると思いますので、そのようにすれば、まっさらな所ですので非常に面白い物ができるのではないかな、と思います。

奥山修司

有り難うございました。ちょっと終了時間が延びておりますので、この辺りでパネルディスカッションを終わりにしたいと思いますけれども、聞けば聞くほど難しいなと思う地域づくりになった面もあるかもしれません。地域づくりにおいて、これからの本当の勝負というのは日常的な

魅力というものを、いかに受け手が非日常と思っていただけるかどうかに尽きるのではないか、と思います。日常的なものを非日常として感動して頂くということはどういうことなのかと言うと、当たり前のことが連続して途切れなく実践されていくということに他なりません。施設で言うと例えば今、旭川の動物園で、20万人そこそこだった入場者数が、年間160万人も訪れるような動物園に何故変わるのか、ということは、当たり前のことを当たり前のように繋いだ結果として、人はその動物園が上野動物園より非日常的だと判断をして頂いているだけだと、私は思っております。

地域の日常を当たり前のように地域の人達が満足できる所以外に、そんな非日常的な地域づくりをやれる、ということはまずございません。一番の大事なことは地域の人達が「何が本物なのか」それぞれに当たり前のことを当たり前のように意識しながらやって頂く。それを繋ぐところのしっかりとした構想、ニーズ、シーズの真ん中にあるクリードという理念、哲学を持つことが肝要です。「うちの娘に携帯電話持たさない」というのは「家のクリード」、つまり哲学。我々はこういう風に日常生活を送りながら外から来た人達にこういう交換をしていきたいんだ、と考えるのが「地域のクリード」だと思いますので、何ら難しいことはない当たり前のことを今日からスタートしましょうということで、このシンポジウムが、皆様方に情報として伝わっていれば、成功ではないかなと思っております。

（了）

●シンボルマークの発表及び閉会挨拶

『新時代の浜街道』連携推進協議会　　会長　荒井宏美

司会

　皆様、お待たせ致しました。シンボルマークの発表と、閉会式を始めて参りたいと思います。

　この度、国土交通省国土計画局と『新時代の浜街道』連携推進協議会 では本シンポジウムに際し、協議会の地域連携交流を目指した活動を象徴するシンボルマークを作成致しました。皆様、ご覧頂けていますでしょうか。では、このシンボルマークを制定するに至りました経緯を、『新時代の浜街道』連携推進協議会 会長、荒井宏美よりご報告させて頂きます。荒井会長、宜しくお願い致します。

荒井宏美

　どうもお疲れさまでございます。只今より発表させて頂きます。この協議会は昨年末、福島、宮城県の浜通り地域の自治体や商工団体等の民間団体を含めた幅広い組織が一体となり設立した協議会でございます。この設立目的は、陸前浜街道の周辺地域の交流、連携を促進し、地域振興に寄与することであります。こちらにございますシンボルマークでございますが、本日先ほどから、シンポジウムで各パネラーからお話がございましたように、いろいろな問題を凝縮してこの「浜」という一字にまとめさせていただいたものでございます。縷々書いてあるんですが、先ほどの話と重複しますので簡単に留めさせて頂きますが、今後ひとつこのシンボルマークを基に大いにひとつ皆さんで連携をし合い、発展することをお願いしたいというふうに思っております。宜しくお願いします。

司会

　荒井会長、ありがとうございました。

それでは引き続きまして閉会のご挨拶を申し上げます。

荒井宏美

　続きまして、閉会のご挨拶を申し上げます。本日はお忙しい中、地域連携シンポジウムにご来場いただき誠に有り難うございました。また、奥山先生をはじめ、出演者の方々にはこれからの

地域が目指すべき道を示して頂いた訳でございまして、誠に有り難く思います。本日のシンポジウムは協議会が昨年末より取り組んできました、当地域の連携交流を創出、促進する取り組みの集大成として、この成果を地域の方々をはじめ広く発信するために開催致しました。本日のシンポジウムをきっかけと致しましてこの協議会の活動も地域の皆様と共同で、地域へ未来へとつながり広がっていくようなものにしたいと考えておりますので、今後ともより一層のご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げまして、簡単でございますが、閉会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

司会

『新時代の浜街道』連携推進協議会 会長、荒井宏美より、ご挨拶を申し上げました。これを持ちまして、地域連携シンポジウム、陸前浜街道の"新たな交流"の一切を終了致します。皆様本日は誠に有り難うございました。どうぞお気をつけてお帰りくださいませ。

（了）

7. 今後の展開

今回の『新時代の浜街道』地域連携・交流拡大事業は、当該地域における初めての試みとして、福島・宮城両県の県境を越えた連携・交流を考えた取組となった。

今後、地域づくり交流会や地域連携シンポジウムの中で出された貴重な意見・提案等を参考に、『新時代の浜街道』連携推進協議会を中心に地域が連携して、陸前浜街道地域の魅力を地域内はもとより全国に対し情報発信を行い、連携交流の拡大・促進に務めていく。

参考資料

陸前浜街道地域の連携交流マップ

『新時代の浜街道』のシンボルマーク

地域連携シンポジウムプログラム

新聞掲載紙

参考資料　『新時代の浜街道』連携交流マップ（地図面）　※A2版 交直2回折 仕上がりA4 フルカラー印刷

『新時代の浜街道』連携交流マップ（対談面）

hamakaido

「新時代の浜街道」連携交流マップ

浜遊記対談

食　歴史　体験　健康　自然

人とモノが有機的に交流しあう「新時代の浜街道」広域交流について、各地域で活躍する方々に熱く語っていただきました。

■楢葉町・玉川村

Sports & Wellness

ワールドカップイヤーにおける国際交流観光拠点としての役割

Jヴィレッジ　東京電力女子サッカー部
マリーゼ事務局
山崎 美由紀さん（楢葉町）

福島空港ビル株式会社
総務課
角田 清貴さん（玉川村）

山崎美由紀さん

角田清貴さん

ワールドカップ時の整備が、"近さ"を考える好機になりました。

山崎「2002年のワールドカップ時にはこの「Jヴィレッジ」がアルゼンチン代表のキャンプ地ということもあり、広野ICまで高速道路が延びたことを始め交通網の整備が急速に進みました。実際にここを訪れた方たちにとっても、私たち地元の人間にとっても、"近さ"が開けた好機だったと思います」。

角田「そうですね。当時、アルゼンチン代表が札幌での試合へ向かう際に福島空港を利用したんですが、その時には空港全体で応援しよう、ということで館内と周辺にフラッグを掲げて歓迎しました。サポーターの方もいらっしゃったので、サービスの見直しなど、世界へ向けての取り組みを考えるいい機会にもなりましたね」。

山崎「今年はドイツ開催なので目立ったかたちでの取り組みがあるわけではないですが、2002年以降「Jヴィレッジ」に魅力を感じてくれる方、"ここでサッカーをしたい"とおっしゃってくれる方が東北以外にもたくさん増えました。そういう方々が身近な練習場や合宿所として利用してくれていることが喜びです。そして、実際に訪れた方々が、我々「マリーゼ」を応援していただくことを通じて、より福島の魅力に触れてもらえるようなイベントや案内を充実させていきたいと思っています」。

▲福島空港

県を十字に走る大道路をもっと活かし、国際的な観光エリアへ

角田「高速道路を使えば首都圏から2、3時間という国内におけるアクセスの良さと、ソウル・上海から飛行機で2時間半という国際的なアクセスの良さの両方を、もっと活かしていけたらいいですね。特にいわきでは一年中ゴルフが楽しめたり、名湯も多い、那須高原へのアクセスもいい。今現在、福島空港は「Jヴィレッジ」まで車で1時間半ほどの距離ですが、あぶくま高原道路が平田ICから福島空港ICまで開通すれば、約1時間ほどに時間も短縮されます。浜通り～福島空港～関東のルートの利便性向上のためにもそこは早期実現を目指して頑張っていただきたいところですね」。

山崎「福島県は、良くも悪くもとても広いんですよね。高速道路に限らず一般道も、大きな道路が東西と南北を十字に走っているので、日本海側から太平洋側、首都圏から仙台や盛岡、という移動は比較的しやすく便利。ですが主だったスポット同士は離れているので、その距離感はやはりちょっと大きいかな、と思います」。

角田「その距離感も（特に西日本で）、福島県自体の知名度の低さの要因の一つになっていると思います。会津若松や喜多方、猪苗代という地名や存在は知っていても、"福島県"というイメージは希薄。全体としての知名度をもっと上げていくことが、これからの課題になっていくのではないでしょうか。その中で、福島空港は国内主要都市との路線のみならず、中部・関西国際空港等の乗り継ぎによる世界各国とのアクセスが可能で、県内外、海外との交流拠点としての役割もより重要になってくると思われます。今後、それらを踏まえ、点から線、線から面の観光アピールをしていくことで、本当の意味での国際観光エリアに育っていけるのでは、と思います」。（対談抜粋）

▲Jヴィレッジ

■いわき市・仙台市エリア

History & Nature

地域資源の発掘と新時代のツーリズム

いわき地域学會代表
古代磐城歴史公園の会会長
浜通り歴史の道研究会監事
山名 隆弘さん（いわき市）

宮城大学　事業構想学部
事業計画学科　助教授
宮原 育子さん（仙台市）

山名隆弘さん

宮原育子さん

地域住民から興った活動が実を結び、新たな目標を生んでいる好例。

山名「私たちが「古代磐城歴史公園　歴史の道探訪マップ」に取り組むきっかけとなったのは、4年前のことでした。根岸遺跡と夏井廃寺という2つの遺跡の発掘調査がほぼ完了し、国指定の史跡になりうる、という調査結果が文化庁から通達されたんです。それを受けて、地域市民の手で史跡指定への促進運動をしようという機運が盛り上がりまして。その当初の目的が達成した後も、史跡を中心とした歴史公園の整備という新たな目標もあったので、活動は今も続いています。このマップでは、約70ヵ所の神社・仏閣や遺跡を3つのサイクリングコースで巡ることができます。これは、市民が実際に自分でルートを辿りながら考えて作成したものなんですよ。昨年作成したガイドブックも、地域の人々が実際に足で歩いて、自分の言葉でしたためたもの。史跡や歴史だけでなく、地形や食文化、植物相といった背景も含めて楽しめるように作ったんです」。

宮原「これだけの魅力的な史跡がいわきに存在する、ということにまず驚きました。そしてそれは、観光資源として考えるうえで数々の東北の歴史遺産が埋もれている、ということの証でもあると思うんです。東北にも注目すべき文化と歴史の跡があるのに、なぜ京都や奈良と同じように位置づけられないのか。地域の価値を浮かび上がらせる作業が東北では行われてこなかったことも要因だと思うんです。そういう意味では、このいわきの取り組みはとても意義のある、まさに今必要な活動だと思います。しかも暮らしに密接したスタイルだということが大切だし、他の地域も見習っていけるモデルタイプといえるでしょう」。

▲古代磐城歴史公園 歴史の道探訪マップ

近隣の地域や異分野との連携が、新たな魅力を持った観光拠点づくりの鍵に。

山名「外へと向ける眼、また外から向けられる眼、ということを、これからは強く意識しなければならんと思っているんです。ガイドブックを制作した時にも感じたことですが、さまざまな識者の方々のいわきや他の地域に対する見解や評価を聞くことで、我々自身にもさまざまな新しい考え方が生まれたり、気づかなかったことへの視点が芽生えたりするものですから」。

宮原「それには、新たな時代を担う子どもたちへ向けての発信も大事ですよね。地元の子どもたちはもちろん、色んな地域の子どもたちにこの自然や歴史文化に楽しく触れてもらえるある種の公園であり、博物館でもあるような、野外教育施設のような活用の仕方も充分といった…」。

山名「それには、宿泊施設などの充実を考える必要もありますね。残念ながら今のいわきは、ツーリズムを実現するだけの受け入れ態勢が不十分だと感じています。ただ、インフラとしての道路事情はとても整備されているいわきですから、例えば近隣の地域と連携して、数市数町を周遊するようなプランを立てるのもひとつの手として考えられるかと思います」。

宮原「やはり横の連携を強めた宮城県の鳴子温泉が、私の中でも印象深い事例です。鳴子も以前は温泉街だけが観光集客の拠点だったんですね。しかし最近では、近隣の方々と密接な関係を築くことで新たな魅力を生み出すことに成功しています。皆さんは"鳴子スタイル"と呼んでいますが、温泉プラス農業、あるいはグリーンツーリズム。そういうものを組み合わせて、収穫や成長の喜びを求めてお客さんがリピーターになってくれたり、口コミを広げてくれたりする。今までなら関係のなかった地域や分野の人と連携することで、多彩な魅力を持った観光地となることができる、という可能性を考えさせたいい事例だと思います」。（対談抜粋）

▲鳴子温泉「田植踊出」

■南相馬市・仙台市エリア

Active & Refresh

サーフタウンとしての都市間交流

宮城県サーフショップ連合会
会長
遠藤 廣明さん（仙台市）

原町市サーフツーリズム
推進会議議長
杉山 大一郎さん（南相馬市）

遠藤廣明さん

杉山大一郎さん

福島と仙台は、サーフィンを通じて常にいい関係を築いてきました。

杉山「今や日本でも有数のサーフスポットとして全国から人が集まる北泉海岸ですが、僕ら原町と仙台のサーファーたちには特別な繋がりを感じますよね」。

遠藤「20年、30年前から長い交流が続いてますからね。常にいい友人であり、いいライバルでもあります」。

杉山「以前の浜通りにはショップがなかったから、ボードやグッズを買いにも仙台へ行ってたんです。仙台には上手い人たちもたくさんいたし、大会も開かれてましたから。我らローカルサーファーの憧れでしたよ」。

遠藤「いや、ポイントが豊かな浜通りこそ僕らの憧れでしたよ。すばらしいプロサーファーもたくさん育ってますし。そういう意味では、お互いに意識していたからこそ成長してこられたのかもしれませんね」。

我々はいま、ワンランク上の環境づくりを考える時期に来ている。

杉山「仙台の取り組みの中で我々が一番影響を受けたことは、清掃をはじめとするボランティア活動が昔から当たり前に行われており、観光資源としての海の大切さを早い時期からアピールしていた点です。全国100万人のサーファーたちが、高速道路から直結のいい環境、かつフレンドリーな海である、ということを知っている。しかも、集まった人々を地元サーファーたちが快く受け入れて、新たなルールを築きつつ友好を結んでいる。これはすごいことだと思います」。

遠藤「しかし今、福島に学ぶところが非常に多いですよ。杉山さんが昨年行ったサーフカレッジなどいい機会づくりにも熱心だし、ことレスキュー体制についてはぜひ参考にしたいところです」。

杉山「海難レスキュー隊の整備は、それこそサーフカレッジが重要なきっかけだったんです。小さい子どもにとって安全の確保は欠かせないですから。それに、地元のサーファーを隊員に任命することによって、彼らの経験を活かした実践的なレスキューが行える。しかもそれで給与を得られることで、実務時間以外の時間をサーフ技術の向上にあてることができる。サーフィンが仕事になる町なんだ、ってことを実証したかったという思いもありました」。

遠藤「サーフィンに必要なのは、実力と経験、そして人脈性。いいライディングを見せるサーファーがレスキューや清掃に携わり、ヒーローとしての目標になることが、さらにサーフィンの裾野を広げる可能性に繋がりますよ」。

杉山「ピア（海の橋）の建設も実現したいですね。カリフォルニアなどではすでに実施されていますが、サーフポイントの優良化はもちろん、海の安全や環境保全にも役立つし、ホスピタリティに眼を向けた施設にもできる。陸地の道はこれだけ整備され、僕らは交流という大きな恩恵を受けた。今度はそれを地域の発展のために還元していくことも考えなくては」。（対談抜粋）

▲ルール・マナーレベルアップスクール

■いわき市・相馬市

Movement & Community

連携交流による新観光資源の創造

相馬商工会議所
副会頭
新妻 良一さん（相馬市）

いわき商工会議所
観光サービス業部会長
大平　均さん（いわき市）

新妻良一さん

大平　均さん

街全体の活性化のために、内外両方の取り組みが必要です。

新妻「常磐線の沿線地域といえば極端な話、昔は何もなかったところなんです。近代になって原子力発電所やJヴィレッジができ、ようやく上向きな発展を遂げつつある。しかし幸が不幸か、相馬は歴史があってお城があるゆえに、行政や中央資本が行う近年の事業振興から取り残されてしまった感があるんです。常磐線自体、相馬の町や史跡に煙害が及ばないように迂回して敷かれた路線ですからね」。

大平「いわきもそうです。港の近くに通したら魚が逃げてしまう、ということで。守るべきものを守った信念は今でも評価できる点ですが、ある意味、旧態依然の体制を許してしまったことが、現在のいわきの町から元気が失われつつある遠い要因であることも事実でしょう。夏のいわきの5地区で行われる「いわきおどり」の参加者が合計で約2万人いて見学者を含めると8万～9万人の集客があるわけです。しかし、地元の商店街はこの大きな集客に対して消極的なんですね。もっと楽しんでお金を使ってもらえる祭りづくりをすれば、地元も潤い、しかもイベント自体も活性化されるはずなんですが」。

新妻「全国的に有名な「野馬追」、これも知名度が高いのは発祥の地である相馬ですが、実際に当時の殿様が演習の拠点にしたのは、広大な土地のある原町なんですね。その歴史と現在の状況を併せて考えても、野馬追は、相馬中村に始まり鹿島、原町、小高、浪江まで連なる一大行事なわけです。しかしそれだけの規模、総体費用の額にもかかわらず、観光事業としての結果が全く伴っていないのが今の現実。せっかく野馬追を観に来てくれる観光客がいるのに、留まって何かを楽しませる、ひいてはお金を使ってもらえる魅力に欠けているんです。お互い、そこを地域ぐるみで前向きに考えないといけないですね」。

▲いわきおどり

人を育て、地域間の連携と交流をつくる。そしてそれを継続していくことが大切です。

大平「アクセスも整い、観光施設など箱モノも各段進歩した。これからは人を育てていかないと。人と人の繋がり、そして浜通り全体としての連携を強めて、自分たちの中からビジョンを生み出して行政に働きかけ、それぞれの地域に合った施策を導き出すという目主性が必要です」。

新妻「相馬といわきは浜街道の両の拠点として、自分たちの町だけではなく関にある市町村全てを含めた浜街道の活性化を目標にする必要がありますよね。相馬の眼は3割は福島、7割は宮城県を見ていて、いわきの眼は半分は福島、半分は茨城～首都圏を見ている。お互いに県境の地で、ある意味客観性を持って内と外を見る特性を持っている。そのリベラルな視点を活かし、漁業、施設、イベント、史跡というさまざまな要素の繋がりを作って、それを継続していくことが大切」。

大平「常磐道についても、この先どう発展するのかを見据え、またその要素に頼らずとも今できることは何か、ということを考えなくては」。

新妻「高速道路が新たに開通していった時、例えばインターチェンジやサービスエリアひとつをとっても、単にその地名を付けるのではなく、もっと魅力的かつ地域性を感じさせる呼称が考えられないかな、なんてことも考えています」。

大平「それは面白いですね。そういう、面白いことを手放しで楽しめる発想力や行動力を持った人を育てることが、これからの我々の役目なんでしょうね」。（対談抜粋）

▲相馬野馬追